

MEJ 4066

ローマ字問題資料集

第 1 集

国語シリーズ 23

文 部 省

刊 行 の 趣 旨

国語シリーズは、国語改善と国語教育の振興に関する施策を普及徹底するために編集するものであります。

このシリーズは、国語問題編・国語教育編・国語生活編・国語教養編および資料編に分け、問題編は主として国語審議会の発表した事がらを、教育編は国語学習指導の方法などを、生活編は国民の言語生活に関する事がらを解説するものであり、教養編は一般の国語教養を高めることを、資料編は国語改善と国語教育に関する基礎資料を集録することを目的としたものであります。

すでに、問題編・教育編はおのおの6冊、教養編は5冊、生活編は4冊、資料編は1冊を刊行しましたが、各編にわたって今後も逐次刊行する予定であります。

この本は、資料編の2冊目として、調査局国語課において編集しました。

昭和 29 年 12 月

文部省調査局国語課長 白 石 大 二

ま え が き

この本は、主として文部省から発表通達されたローマ字のつづり方、ローマ字教育に関する諸事項のうち、一般に参考となると思われるもの、および文部省所管のローマ字に関する会議についての資料を集めたものである。

これらの資料は、もとよりこれだけで尽きるものではないが、今回は収録の範囲を、一応、昭和 22 年度から義務教育で行われるようになった、ローマ字教育についての諸施策に関する資料に重点を置き、他はすべて割愛した。もっとも、文献としては、このほかに、「学習指導法 国語科編」があるが、これはまだ小学校用のものが発行されていないので、中学校・高等学校用のものとともに他の機会に譲ることとした。

なお、関係事項として、アメリカから来た教育使節団の報告書等を付録として添えた。

配列は、主として年代順に従ったが、便宜上関係事項を一まとめにした場合もある。

収録に際して、原文が縦書であるものは横書に改め、初めに「(原文は縦書)」と注記しておいた。また、横書きに改めるに際して、原文の同一性をそこねないかぎり、公用文の書き方に従って漢数字を算用数字に改めた。なお、かなづかい、および漢字の使い方は、すべて原文のとおりにしたが、字体は当用漢字字体表に掲げられている字体に統一した。

目

次

1	通達・報告・訓令・告示・建議・要項等	
1	調査報告	ローマ字の書き方……………明治33.11.5 …… 3
2	訓令	ローマ字のつづり方……………昭和12.9.21 …… 9
3	通達	ローマ字つづり方の取扱……………昭和13.11.15 ……11
4	意見	ローマ字教育を行ふについて昭和21.10.22 ……12
5	当局談	ローマ字教育の実施……………昭和22.1.20 ……14
6	通達	ローマ字教育の実施……………昭和22.2.28 ……15
7	通達	ローマ字教育の実施……………昭和22.2.28 ……16
8	要項	ローマ字教育……………昭和22.2.28 ……16
9	照会	学校数等の調査……………昭和22.2.28 ……18
10	新聞発表	会議の開催……………昭和22.12.5 ……18
11	決議	ローマ字調査委員会準備会…昭和23.1.29 ……19
12	照会	ローマ字教科書の入要部数等昭和23.5.25 ……19
13	通達	ローマ字教育に関する調査…昭和23.5.25 ……20
14	照会	ローマ字習得状況調査……………昭和23.5.27 ……22
15	建議	改訂 ローマ字教育の指針 ……昭和25.3.1 ……24
16	照会	ローマ字教育実験学級……………昭和26.6.28 ……25
17	照会	ローマ字教育実験学級……………昭和26.6.28 ……27
18	要項	ローマ字教育実験調査……………昭和26年8月 ……27
19	報告	つづり方部会……………昭和27.3.10 ……32
20	報告	分ち書き部会……………昭和27.3.10 ……34
21	報告	ローマ字教育部会……………昭和27.4.14 ……43
22	建議	ローマ字つづり方の単一化…昭和28.3.12 ……47
23	答申	ローマ字の学習……………昭和28.8.4 ……50
24	新聞発表	ローマ字の学習……………昭和28.8.4 ……51
25	通達	ローマ字の学習……………昭和28.8.31 ……53
26	報告	教育部会……………昭和29.3.15 ……58

27	報 告	わかち書き部会……………昭和29. 3. 15 ……59
28	告 示	ローマ字のつづり方……………昭和29.12. 9 ……59
29	訓 令	ローマ字のつづり方の実施…昭和29.12. 9 ……61

§ 2 文 献

1	ローマ字教育の指針 ……昭和22年 2 月……………65
2	改訂ローマ字教育の指針 ……昭和25年 3 月……………71
3	ローマ字文の書き方 ……昭和22年 2 月……………84
4	小学校学習指導要領 ……昭和26年12月……………94
5	中学校 高等学校 学習指導要領 ……昭和26年10月……………108
6	教科用図書検定基準 ……昭和28年11月……………114
7	国語問題要領 ……昭和25年 6 月……………121

§ 3 会 議

1	臨時ローマ字調査会……………125
2	ローマ字調査会……………135
3	ローマ字調査審議会……………144
4	国語審議会ローマ字調査分科審議会……………149
5	官制・政令・規程などによらない会議……………165
	(1) ローマ字教育対策懇談会……………165
	(2) ローマ字教育協議会……………165
	(3) ローマ字調査委員会準備会……………167
	(4) ローマ字に関する学習指導要領編修協議会……………168
	(5) 文部省ローマ字教育実験調査研究会……………170

§ 4 付 録

1	連合国最高司令部指令第 2 号……………175
2	米国教育使節団報告書……………176
3	第 2 次訪日アメリカ教育使節団報告書……………181
4	日本における教育改革の進展（文部省報告書）……………183

§ 1

通達・報告・訓令
告示・建議・要項

} 等

1 調査報告

羅馬字書方調査報告 (明治33.11.5 官報による。原文は縦書。)

文部省ニ於テ曩ニ文学博士上田万年、神田乃武、渡部董之介、小西信八、磯田良、文学博士高楠順次郎、湯川寛吉、蘆野敬三郎、金子銓太郎、大西祝及藤岡勝ニヲシテ羅馬字ヲ以テ国語ヲ写ス方法ヲ調査セシメシニ其報告書左ノ如シ (文部省)

文字ノ呼ヒ方及順序

ア	ベ	チェ	デー	エー	エフ	ゲー	ハー	イー	ジェ	ケー
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
エル	エム	エン	オー	ペー	クー	ルー	エス	テー	ウー	ヴィー
L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V
ワー	エクス	ヤー	ゼット							
W	X	Y	Z							

使用ノ文字

ABC 二十六字ノ中 LQVX ヲ除キ他ノ二十二字ヲ用キルコト、ス

各音ノ記シ方

第一 直音 (仮字羅馬字対照表)

ア	イ	ウ	エ	オ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
a	i	u	e	o	za	ji	zu	ze	zo	ha	hi	fu	he	ho	ya	i	yu	ye	yo
カ	キ	ク	ケ	コ	タ	チ	ツ	テ	ト	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ラ	リ	ル	レ	ロ
ka	ki	ku	ke	ko	ta	ci	tsu	te	to	ba	bi	bu	be	bo	ra	ri	ru	re	ro
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	パ	ピ	プ	ペ	ポ	ワ	ヰ	ウ	エ	ヲ
ga	gi	gu	ge	go	da	ji	zu	de	do	pa	pi	pu	pe	po	wa	i	u	e	o
																			(wo)
サ	シ	ス	セ	ソ	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	マ	ミ	ム	メ	モ					
sa	si	su	se	so	na	ni	nu	ne	no	ma	mi	mu	me	mo					

注意 凡テ仮字ニ拘ラス現今ノ音ニ從テ記スコト、ス

シハ shi ヲ取ラス si トス
 ジヂ, ズヅ ハ現今同一ニ発音セル
 カ故ニ同様ニ記スコト、ス
 チハ chi ヲ取ラス ci トス
 フハ hu ナル能ハサルカ故ニ fu トス
 イ ヰ ハ凡テ i ヲ以テ之ヲ記ス
 エ ヱ ハ e トスレトモ ye ハ残スヘ

キ必要アルヲ以テ之ヲ存ス
ウ ハニツナカラ u トス
オ ヲ ハ通シテ o トナスてにをはノ
 ヲモ亦 o ヲ以テ記スコト、ス但シ語
 音ノ上ニハ wo トスヘキトコロアル
 ヲ認ムルヲ以テ之ヲ存ス
 鼻音ノ ga ハ別ニ綴リ方ヲ立テス ga
 ヲ兩様ニ読マシムルコト、ス

第二 拗音 (仮字羅馬字対照表)

キヤ	キュ	キョ	ギヤ	ギユ	ギョ	ニヤ	ニユ	ニョ	ヒヤ	ヒユ	ヒョ
kya	kyu	kyo	gya	gyu	gyo	nya	nyu	nyo	hya	hyu	hyo
シヤ	シユ	ショ	ジャ	ジュ	ジョ	ビヤ	ビユ	ビョ	ピヤ	ピユ	ピョ
sya	syu	syo	ja	ju	jo	bya	byu	byo	pya	pyu	pyo
チャ	チュ	チョ	ヂヤ	ヂユ	ヂョ	ミヤ	ミユ	ミョ	リヤ	リュ	リョ
ca	cu	co	ja	ju	jo	mya	myu	myo	rya	ryu	ryo

注意 kwa kwo gwa gwo ノ音ハ標準トスヘキ語音中ニハ存在セシメス
 シテ可ナリト認ムルヲ以テ之ヲ存セス
ジャ ヂャ 等ハ直音ノ例ニ準シテ區別セス

第三 長母音

長母音ノシルシヲ字ノ上ニ置キテ之ヲ示ス

例

byōki 病氣 hōritsu 法律

第四 促音

促音ハ子音ヲ相竝ヘテ之ヲ示ス

例

gakkō 学校 teppō 鉄砲

第五 鼻声音

鼻声音ハ常ニ n ニテ終ルモノトス

例

Shinbasi 新橋 nenpō 年俸

第六 音ノ結合スル場合

い 母音ノ同和

母音相連リテ同和スル場合ニハ其発声ニ從テ之ヲ記ス

例

i+a	tsuki-ai	ヲ	tsukiyai	トス
i+e	Mi-eken	ヲ	Miyeken	トス
i+u	Kiri-u	ヲ	Kiryū	トス

此場合ニハ拗音ニ転ス

i+o	ni-oi	ヲ	niyoi (コレハ訛音ヲ以テ云フ)	トス
u+o	gu-ai	ヲ	guwai	トス
e+a	ume-awase	ヲ	umeyawase	トス
e+i	Te-ikoku	ヲ	Tēkoku	トス

尙コレハ實際ニツキテ調査シタル上コノ書方ニ従フヘキ語ヲ定ムルヲ良シト決定ス

ろ 子音相連結スルコト

實際ニ子音相連リテ其間ニ母音ノ存在セサルコトヲ認メ得ル語ハ子音ノ字ヲ連ヌルコト、ス

例

ks	wataksi	私	kr	krikri	円顚
gr	dongri	団栗	br	sukobru	頗
sk	taski	襪	kt	doktoru	どくとり

コレモ調査ノ上表ヲ製シテ決定スルモノトス

は 子音ト母音ト連ナリテ相結フヘカラサル場合

コノ場合ニハ「ハイフン」ヲ用キルヘシ

例

gen-an	原 案	gen-in	原 因
--------	-----	--------	-----

頭字ノ用法

左ノ場合ハ頭字ヲ用キルモノトス

- 一 固有名詞ノ頭
- 三 文章ノ頭

符号ノ命名

,	コンマ	!	感動ノシルシ	-	ハイフン
;	セミコロン	()	括弧	-	長母音ノシルシ
:	コロン	[]	鉤括弧	'	アポストロフ

。	止り	“ ”	引用ノシルシ
?	問ヒノシルシ	—	線

符 号 ノ 用 法

- 一 「コンマ」ハ最小ナル切目ヲ示ス為ニ用キル
- 一 「セミコロン」ハ「コンマ」ヲ以テ示シタル区分ヨリ大ナル区分ヲ示スニ用キル
- 一 「コロソ」ハ「セミコロソ」ヲ以テ示シタル区分ヨリ更ニ意味ノ完結シタル区分ヲ示スニ用キル
- 一 「止り」ハ一文ノ完結セルコトヲ示スニ用キル
- 一 「問ヒノシルシ」ハ問ヲ示ス文ノ終ニ置ク
- 一 「感動ノシルシ」ハ感動ヲ顯ハス語又ハ文句ノ終リニ置ク
- 一 「括弧」ハ説明ノ為ニ文中ニ挿入セラレタル語句若クハ文ヲ囲ムモノトス (但シ二箇ノ線ヲ以テ代用スルモ可ナリ)
- 一 「鉤括弧」ハ原文ニナキ語ヲ挿入スル時ニ用キル
- 一 「引用ノシルシ」ハ他書ヨリ引用シ来レル文句若クハ他人ノ談話ヲ直写セルトキニ其前後ニ之ヲ置ク
- 一 「線」ハ文句ノ組立急ニ変シタルトキ等ニ用キル又例ヲ挙ケントスル前ニ「コロソ」ト共ニ之ヲ置ク
- 一 「ハイフン」ハ「各音ノ記シ方」第六ハノ場合或ハ二語若クハ二語以上ヲ続ケ書クトキ其成立ヲ示スニ必用ナル場合ニ之ヲ用キル又二行ニ跨リタルトキ其一ナルコトヲ示スニ用キル
- 一 「アポストロフ」ハ文字ノ略セラレタルコトヲ示スニ用キル

語 ノ 分 別 書 方

名 詞

- 一 名詞代名詞ノ複數ヲ示スニ用キル ナ下 下モ ラ タチ ノ如キてにをはハ名詞ト連ネ書セズ

例

wataksi domo 私ども anata gata あなたがた

- 二 名詞ニツク敬辞おハ連書ス

例

Omatsu お 松 Otake お 竹

- 三 名詞ニツク様, 殿, 君等ハ連書セス

例

Saigō sama	西郷様	Ōyama kun	大山君
Taii dono	大尉殿		

四 名詞ニツクてにをはハ名詞ト相分ツヘシ

例

ningen to iu mono wa 人間といふ者は
但シ例外トシテ連書スヘキ必要アルモノハ調査ノ上表ヲ作りテ定ム
ルヲ良シト決定ス

五 動詞或ハ形容詞ニコトヲツケテ名詞トスルコトアリコノコトハ連書セス

例

hon o yomu koto	本を読むこと
nagekawasii koto	歎はしいこと

六 複合名詞ハ調査ノ上語彙ヲ造ルコト、ス

形容詞

- 一 形容詞ノ語尾ニ i ノ二箇連ナルコトアリコノ場合ニハ i ノ長母音トセス
シテ i ヲ二箇連ヌヘシ

例

utsukusii hana 美しい花

- 二 名詞ニ ナ ナル タル ノツキテ形容詞トナルモノアリ此中ナノミハ続ケ
テ書キ他ハ離スヘシ

例

aimaina hanasi	曖昧な話
seimitsu naru torisirabe	精密なる取調
kore ni hōfutsu taru mono	是れに彷彿たるもの

代名詞

- 一 代名詞トてにをはトハ左ノ場合ノ外ハ分ツコトトス
kono, sono, dono, ano, kano ノ如ク代名詞トてにをはニテ已ニ
一箇ノ語トナレルモノ
- 二 代名詞トてにをはトニテ副詞ヲ成ス場合ハ連書スルモノトス

例

soretomo	それとも	arehodo	あれほど
----------	------	---------	------

副詞 (ママ)

- 一 名詞等他ノ詞品ニてにをはノツキテ副詞トナルモノ多シコレハ實際副詞

トナリ終レルモノ、外ハ続ケサルモノトス

例

aikawarazu	相交らず		sono mama	其儘
asikarazu	悪しからず			

但シコレハ調査ノ上別ニ表ヲ定ムルヲ良シト決定ス

二 副詞句ヲナスてにをはニ (ni) ハ離ス

例

iciban ni 一番に Tōkyō ni 東京に

接 続 詞

接続詞モ亦副詞ノ場合ト等シク已ニ一箇ノ接続詞トナレルモノハ一綴リニ書クモノトシ其他句ヲナセル場合ハ相分ツコト、ス

例

sikasinagara 併ながら somosomo 抑

動 詞

一 動詞ト助動詞トハ分チ書クコト、ス

例

oide asobasu sō de gozai masu 御出遊ばすさうで御座います

二 動詞ノ頭ニツクヘキ敬辞ヲハ続ケ書クコト、ス

例

oagari nasai mase 御あがりなさいませ

三 動詞ノ過去ヲ示スタリノ如キハ続ケ書クコト、ス

例

yukitari 行きたり

四 動詞ニツ、クテハ続クルコト、ス

例

kosiraete 拵へて

数 詞

一 数詞ト名詞トハ相分ツヘキヲ原則トス

但シ左ノ場合ニハ続クルコト、ス

一 促音ヲナス場合

二 熟語ヲナセル場合

例	iccō	一 町		futatabi	再
---	------	-----	--	----------	---

二 数詞ヲ数字ヲ以テ示スコトハ場合ニヨリテ之ヲ許スコノ場合ニハ其次ニ

来ルヘキ名詞ハ音ノママヲ記スベシ

例

3000 byō 三千俵

但シ略符ヲ用キルトキハ此限ニアラス 仮令ハ俵ノ略符ニ h

ヲ書クカ如シ

三 数詞トてにをはトハ相分ツコト、ス

例

hitotsu no ie 一つの家

てにをは

一 をハ○ヲ以テ示スコト、ス

二 ヘハ e トス

三 漢語トてにをはトハ上ニ挙ケタル特別ナル場合ヲ除ク外ハ凡テ離シ記ス
ヘキコト、ス

感 動 詞

一 感動詞タルモノニハ感動符ヲ付スヘシ

二 アクセントハ付セサルコト、ス

2 訓 令

内閣訓令第3号

(原文は縦書)

各 官 庁

国語ノローマ字綴方ハ従来区々ニシテ、其ノ統一ヲ欠キ使用上不便
尠カラス、之ヲ統一スルコトハ教育上、學術上将又国際關係其ノ他
ヨリ見テ、極メテ必要ナルコトト信ズ。仍テ自今左ノ通ローマ字綴
方ヲ統一セントス。各官庁ニ於テハ漸次之ガ実行ヲ期スベシ。

昭和12年9月21日

1 国語ノローマ字綴方ハ左表ニ依ル

ローマ字綴表

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	i	yu	e	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	i	u	e	o			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	zi	zu	de	do	zya	zyu	zyo
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

2 前号ニ定ムルモノノ外ニ付テハ概ネ左ノ例ニ依ル

- 1 長音ノ符号ヲ附スル場合ハ okāsama, kūsyū, Ōsaka ノ如ク「ー」ヲ用フルコト
- 2 撥音ハ総ベテ「n」ヲ以テ表ハスコト
- 3 撥音「n」ト其ノ次ニ来ル母音(yヲ含ム)トヲ切離ス必要アルトキハ hin-i, kin-yōbi, Sin-Ōkubo ノ如ク「-」ヲ用フルコト
- 4 促音ハ gakkō, happyō, tossa, Sapporo ノ如ク子音ヲ重ネテ之ヲ表ハスコト
- 5 文書ノ書始及固有名詞ハ Wagakuni no…………, Sizuoka, Masasige ノ如ク語頭ヲ大文字トスルコト 尙固有名詞以外ノ名

詞ノ語頭ヲ大文字トスルモ差支ナシ

6 特殊音ノ表記ハ自由トス

(注： この訓令は、昭和29年12月9日内閣訓令第1号によって廃止された。62ページ参照。)

3 通 達

地図144号

(文部時報638号による。原文は縦書。)

昭和13年11月15日

文 部 省 図 書 局 長

各地方長官宛

中等学校ノ英語科教授ニ於ケルローマ字綴方ノ取扱ニ
関スル件

標記ノ件ニ関シ別紙甲号広島県知事進達ニ対シ乙号ノ通回答致置キ
タルニ付為念通牒ニ及フ

(甲号)

〔昭和13年10月26日広島県知事進達〕

中等学校ノ英語科教授ニ於ケルローマ字綴方ノ取扱ニ
関スル件

標記ノ件ニ関シ別紙ノ通提出有之候条此段及進達候也

(昭和13年10月広島西高等女学校長伺)

国語ノローマ字綴方ニ関シ一般的ニハ昭和12年9月21日内閣訓令
第3号ニヨリ方針ヲ示サレ又文部省トシテハ英語教科書検定ニ於テ

新式綴方教授ノ趣旨ヲ明カニサレタルモ尙旧来ノ式ヲ併記スル教科書多ク過渡期ニ於ケル實際教授ニ當ツテ如何ニ処理スヘキカニ迷ヒ居リ候就テハ如何取扱可申歟規準御示シ被下度此段御伺申上候也
(乙号)

(昭和13年11月15日地図144号文部省図書局長回答)
標記ノ件ニ関シ本年10月26日号外ヲ以テ貴管下広島西高等女学校長伺進達相成タル処右ハ左記ノ通ト御了知相成度

記

各学校ノ外国語科教授ノ際ニ於ケル国語ノローマ字綴方ノ取扱ニ関シテハ昭和12年9月21日内閣訓令第3号統一ノ国語ノローマ字綴方ニ依ルヘキモノトス
但シ当分ノ内ハ教科書及辞書等ノ關係ニテ従来ノ綴方ヲ併セ課スルコトハ適当ト認ムルモ書写ノ場合ハ内閣訓令ノ綴方ニ依ラシムルコト

(補注： 内閣訓令第3号は、9ページ参照。)

4 意 見

ローマ字教育を行ふについての意見(原文は縦書)

(ローマ字教育協議会)
(昭和21年10月22日)

国語教育の徹底をはかり、社会生活の能率を高め、国民の文化水準を向上させるために、ローマ字によつて読み書きを行ふ習慣を国民一般に普及する必要がある。ローマ字教育協議会においてその方

策を協議した結果、次のやうな処置をとることを適切と認めた。

一 国民学校においてローマ字教育を実施すること。

国民学校においてローマ字教育を実施するについては、次の方法によることとする。

- 1 ローマ字教育に関する基準としては、別冊「ローマ字教育の指針」によること。
- 2 昭和22年度は、第4学年（又は第3学年）以上の各学年同時に開始すること。
- 3 授業時数は、1年40時間以上とすること。
- 4 昭和22年度の教科書は、児童用書および教師用書を文部省において編纂すること。
- 5 教師の訓練については、(イ)昭和21年度に卒業すべき師範学校の生徒に対し、ローマ字教授法の訓練を行ふこと。(ロ)教師の再教育の課程にローマ字教授法を入れ、又教師一般に対するローマ字教育講習会を開催すること。(ハ)師範教育においてローマ字教育をその課程に入れること。

二 青年学校、中等学校、高等専門学校の教育についても、その内容を豊富にするために、国民学校との関聯において、ローマ字教育課程の実現、ローマ字による国語その他の教科書の使用等を考慮せらるべきこと。

三 ローマ字教育を促進するために、学術的および社会的処置を講ぜられたきこと。

- 1 ローマ字教育に関する諸般の調査・研究を行ふこと。
- 2 関係諸団体間の連絡協調をはかること。
- 3 優良図書の刊行を促進し、普及をはかること。

右の目的のために、ローマ字教育委員会(仮称)を設けること。

四 ローマ字の表記法（特に綴り方）については、別冊「ローマ字教育の指針」に示す方式をとるが、さらに適當の機関を設け、学術上、教育上および實際生活上から研究を進め改善をはかられた

きこと。

以上の各項がすみやかに実現されるやうに希望する。

(補注：ここにいう「別冊『ローマ字教育の指針』」とは、「ローマ字教育の指針」と「ローマ字文の書き方」とを合わせたものである。)

5 当局談

文 部 当 局 談

(昭和22.1.20) (原文は縦書)

このたび、文部省では、国民学校においてローマ字教育を実施するために、その要項を決定しました。

今日の社会生活において、ローマ字の読み書きに慣れることは、国民一般にとって必要なことと考えます。そうして、このためには、まず、なるべく速やかに国民学校の児童がローマ字によって国語の読み書きができるように取り計らうことが肝要であります。

こういう趣旨から、来年度から国民学校においてローマ字教育を実施することとし、この要項を決定した次第であります。

国民学校においてローマ字を授けるについては、教育上からも学術上からも考慮を要する問題が多々あることと思います。しかし、なによりも大切なことは、国民の大部分がローマ字の読み書きに慣れることであり、ローマ字教育を実際に行いつつ、その結果を研究し、改善を計って行くことであります。

従って、この要項は、さしあたり昭和22年度に実施すべき点について定めたものであり、その実施の成果を基礎として、さらに昭

和 23 年度からの計画を考えて行きたいと思います。

ローマ字教育を実施することは、国語をやさしくし、合理化し、ひいては国民の国語生活を能率化する上の一助となると思います。

さきに「当用漢字表」・「現代かなづかい」が制定され、国民各方面の支持のもとに実行にうつされていることは誠に喜ばしいことではありますが、ローマ字教育の実施にあたっても、また各方面の御協力を得たいと存じます。

なお、本省においては、昨年 6 月以来、学者・教育者・ローマ字研究家および報道関係者等の参集を願い、ローマ字教育協議会を設けて、この問題について審議を重ねていただいたのでありますが、その結果「ローマ字教育を行うについての意見」がとりまとめられました。

この要項は、右の協議会の意見を参考とし、その実施の方法について慎重に検討を加えた上、決定したものであります。

(補注 : 「要項」は 17 ページを参照。)

6 通 達

発教 7 号

(原文は縦書)

昭和 22 年 2 月 28 日

文 部 次 官

各地方長官あて

国民学校においてローマ字教育を行うについて

昭和 22 年度から別紙要項に基づいて、国民学校においてローマ

字教育を行うことになったから、貴管下の関係各学校に示達し、遺憾なく実施されるよう取り計わりたい。命によって、これを通達する。

(補注：「要項」は17ページを参照。)

7 通 達

発教7号

(原文は縦書)

昭和22年2月28日

文 部 次 官

各 師範学校長 } あて
高等師範学校長 }
女子高等師範学校長 }

国民学校においてローマ字教育を行うについて

昭和22年度から別紙要項に基づいて、国民学校においてローマ字教育を行うことになったから、遺憾なく実施されるように取り計わりたい。命によってこれを通達する。

(補注：「要項」は17ページを参照。)

8 要 項

国民学校におけるローマ字教育実施要項

(昭和22. 2. 28)

昭和22年度から、国民学校において、事情のゆるすかぎり、児童にローマ字による国語の読み方、書き方を授けることとする。

昭和22年度に各国民学校において、ローマ字教育を行うには、次の各項による。

- 1 各国民学校において、ローマ字教育を行うかどうかは、その学校の教育上の責任者が、その学校の事情を考慮してこれを決定する。ローマ字教育を行う場合には原則として第4学年以上の各学年に行う。ただし、さらに下学年からローマ字教育を行い得るような学校では第3学年から行うことができる。
- 2 授業時数は1年を通じて40時間以上とし、国語あるいは自由研究の時間のうちで行う。
- 3 教授の方針、方法、その他については文部省で「ローマ字教育の指針」を編修し、配布することとする。
- 4 教科書は文部省編修のものをを使用することを原則とする。
- 5 国民学校において授けるローマ字文の書き方は別冊「ローマ字文の書き方」による。
- 6 ローマ字教育に関する教師の訓練については、本年度から適当の処置を講ずることとする。

(備考) (1) この要項における国民学校とは、来年度から新学制が実施される場合には、小学校および新制中学校をさすものである。

(2) 昭和23年度からの実施案については、昭和22年度における実施の成果を基礎としさらに研究の上決定する。

9 照 会

発教7号

(原文は縦書)

昭和22年2月28日

文部省教科書局長

各 地方 官
師範学校校長 } あて
高等師範学校校長
女子高等師範学校校長

ローマ字教育を行う学校数等の調査について

ローマ字教育に使用する教科書を準備する都合があるので、2月28日発教7号によりローマ字教育を行う学校数等について、次の様式によって調査し、至急報告願いたい。

記

昭和22年度にローマ字教育を行う学校数等の表(表は省略。)

10 新聞発表

ローマ字調査委員会準備会の開催について

(教科書局国語課)
(昭和22.12.5.新聞発表)

本日、各界・各団体の権威者・代表者の方々にお集まりをいただき、「ローマ字調査委員会準備会」を開きました。この準備会は、ローマ字調査会の性格があくまでも中正なものであり、公正妥当な結論を得られるようにという目的で開きましたもので、調査委員会が、真に社会各方面の権威者をもうらした民主的な構成であるよう

にするために、お集まりの方々から委員選出の方法・範囲、また、委員会運営の方法などについての隔意のない御意見をうけたまわり、それに従って委員会を設置し、ローマ字問題に関するあらゆる問題についての結論を得たいと念願している次第であります。

(昭和 22 年 12 月 5 日)

11 決 議

ローマ字調査委員会準備会決議

(昭和 23.1.29)

本準備会は、ローマ字問題の重要性に鑑み、本問題に関する公正にして権威ある委員会を構成するための案を得ることに努めてきたが、ここに結論を得た。ついでには本準備会の意見を基礎としてローマ字調査委員会が速やかに設置され、中正妥当な結論が得られるように希望する。

12 照 会

発教 81 号

(原文は縦書)

昭和 23 年 5 月 25 日

文部省教科書局長

各都道府県知事あて

ローマ字教科書の入要部数等の調査について

昭和23年度に使用されるべきローマ字教科書は、訓令式のつづり方によるものと、ヘボン（標準）式のつづり方によるものの2種が発行されることになっているが、これの製造・供給の必要上、貴管下の各小学校ならびに各新制中学校において、そのいずれのつづり方による教科書を必要とするか、またそのいずれでもよいかなどについて調査のうえ、左記の様式によって至急御報告願いたい。

注1 この報告は、さきに各地軍政部からの通達「ローマ字教育を行う手続」のうちの「質問形式第1号」の回答と、まったく合致した数であることが必要であるから、報告にあたっては、右を参照されたい。

2 教科書は、小学校用として（第3学年）第4，5，6学年を通して1冊を、新制中学校用として、第1，2，3学年を通じて1冊を発行するものであるから、教科書入要部数等の数は、各学年を通じての合計数を記入されたい。

記

（補注：様式の表は省略する。）

13 通 達

昭和 23 年 5 月 25 日

文部省教科書局長

各 師 範 学 校 長
各 高 等 師 範 学 校 長
各 女 子 高 等 師 範 学 校 長
各 青 年 師 範 学 校 長
東京農業教育専門学校長 } あて

ローマ字教育に関する調査について

ローマ字教育の現況を知り，あわせて昭和 23 年度に使用されるべきローマ字教科書の製造・供給の必要上から，貴管下の小学校・新制中学校について，同封の質問用紙に記入のうえ，至急返送されたい。

- 注 1 この質問はさきに各地軍政部から，各都道府県あてに通達されたものと同じものである。
- 2 ローマ字教科書は，小学校用として（第 3 学年）第 4，5，6 学年を通じて 1 冊を，新制中学校用として，第 1，2，3 学年を通じて 1 冊を発行するものである。
- 3 本年度に使用されるべき教科書は訓令式のつづり方によるものと，ヘボン（標準）式のつづり方によるものの 2 種が発行され，各学校の選択に応じて，そのいずれかが供給される予定である。

質問用紙

- (1) ローマ字は昭和 22 年の学年度に教えられたか。

否 _____

然り _____

- (2) 昭和 22 年の学年度にローマ字が教えられたならば，どの式

を採用したか。

- (イ) 訓令式（または日本式） _____
- (ロ) ヘボン式 _____
- (ハ) (イ), (ロ)両式 _____
- (ニ) その他 _____

(3) ローマ字教授について次の点に回答されたい。

- (イ) 開始の年月日 _____
- (ロ) 昭和22年の学年度における学習生徒数 _____
- (ハ) 昭和22年の学年度の授業時間 _____

(4) 昭和23年の学年度にローマ字を教えるつもりがあるか。

有 _____

無 _____

(5) 教えるつもりならば、どの式で教えるか。

- (イ) 訓令式 _____
- (ロ) ヘボン式 _____
- (ハ) どちらでもよい _____

(6) 昭和23年の学年度のローマ字教授について、次の点に回答されたい。

- (イ) 学習児童・生徒予定数 _____
- (ロ) 組数 _____
- (ハ) 教師数 _____

14 照 会

発教 87 号

(原文は縦書)

昭和23年5月27日

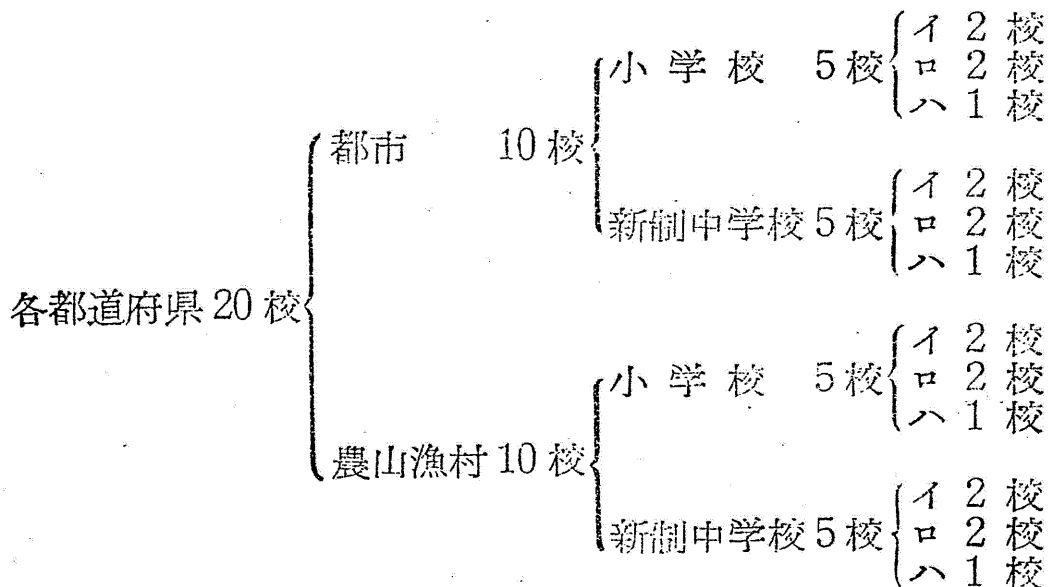
各都道府県知事あて

小学校ならびに新制中学校において、児童・生徒の
ローマ字の習得状況調査のために行う調査について

このたび文部省においては、小学校ならびに新制中学校における
ローマ字教育に関する参考資料として、左記の各項に基いて調査を
行うことになった。ついてはこれが準備のため、同封の回答用紙に
所要事項を記入のうえ、至急御返送願いたい。

記

一 小学校児童ならびに新制中学校生徒を対象として、次の区分に
よってローマ字の習得状況を調査するために、調査を行う。



各都道府県は右によって、それぞれ 20 校を調査校として選択し、
報告されたい。右の区分のうち、

- イ は昭和 23 年度以前からローマ字教育を実施している学校。
- ロ は昭和 23 年度以前にはローマ字教育を実施していなかった
学校。
- ハ は現在までローマ字教育を実施していない学校。

とする。なお、農・山・漁村の配分は、各都道府県において、各自の実情に応じて適宜選択されたい。

- 一 調査のための考査は3回行うこととし、その時期は次のとおりの予定である。

第1回調査 第1学期末（昭和23年7月）

第2回調査 第2学期末（昭和23年9月）

第3回調査 今年年末（昭和24年3月）

- 一 調査のための考査問題は、文部省で作成し、各都道府県あてに配布する予定である。各都道府県はそれを調査校に配布して考査を実施のうえ、その答案をまとめて、本省あてに返送せられたい。なお、考査問題ならびにその取扱等については、別に通達する。

（補注：「回答用紙」は省略する。）

15 建 議

昭和25年3月1日

文部大臣 高瀬荘太郎殿

ローマ字調査審議会会長

安 藤 正 次

建 議

現行「ローマ字教育の指針」の改訂に関して、かねてから、ロー

マ字調査審議会の教育部会において慎重に審議を進めておりましたところ、昭和24年12月20日の第1回総会で、別冊「改訂ローマ字教育の指針」を議決いたしました。つきましては、この普及に関して最善の努力を尽されるよう希望いたします。

(補注：「改訂ローマ字教育の指針」は、71ページを参照。)

16 照 会

昭和26年6月28日

.....教育委員会教育長あて

文部省調査普及局国語課長

ローマ字教育実験学級について（照会）

本年度から全国小学校のうち数校にローマ字教育実験学級を設けて、下記の概要によって実験調査を実施することに決定しました。

この調査は、現在小学校において「ローマ字教育の指針」により国語科の一環として行われているローマ字教育の実験調査を実施するもので、他教科をローマ字で教育し、その学習効果を調査するような特殊な実験調査を目的とするものではありません。

ついては、実験学級を決定するために、国立教育研究所の調査資料にもとづいて貴管下の.....小学校を一応その候補校として選定しましたが、当方としては当該教育委員会と充分協議の上で学校を決定したいと存じますので、次の3項目について、7月20日までに

御回答くださるようお願いいたします。

- (1) 上記の学校がこの実験調査に協力する意向があるか、否か。
- (2) 貴教育委員会において上記の学校に実験学級を設けることに同意されるか、否か。
- (3) 上記の学校に実験学級を設けてさしつかえない場合には、その学校で、標準式、訓令式、日本式のうちの式のローマ字つづりを採用されるか。

記

- 1 目的 ローマ字教育の学習効果を調査するため。
- 2 対象 小学校第3学年の (1) 現在までローマ字教育を課したことがなく、 (2) 本年度第2学期(9月)からローマ字教育を課し得る学級であること。

(特別の編成をしない自然学級で、1校に1学級とする。)

注 この実験調査は当該学級で来年度も継続する予定。

3 条件

- (1) 時間配当、教材、指導法、実験の課題、記録、報告等については、当方の「ローマ字教育実験調査打合会」で協議決定し、実験学級担任教官はそれによって学習の指導に当り、その経過を報告すること。
- (2) 授業時間数は、1学年を通じて40時間程度を標準とする。
- (3) 教材のうち、教科書については、本年度の第4学年用教科書のうち、実験学級担任教官の希望するものを使用すること。
- (4) 実験の課題はたとえば、
 - イ 国語教育としてのローマ字教育の立場から、
 - a 言語意識の向上
 - b 表現力の変化(ローマ字文の語い、文体に与える影響。)
 - c 方言、なまり音の標準語化
 - ロ ローマ字教育内の問題として、
 - a 分ち書き指導上のくふう点

- b くとう点の指導法
- c 読み書きのはやさ など。

17 照 会

昭和 26 年 6 月 28 日

.....学長 あて

文部省調査普及局国語課長

ローマ字教育実験学級について（照会）

（補注） この照会は国立大学付属の小学校へ設置すべき実験学級に関して当該大学の学長あてのもので、趣旨は教育委員会教育長あてのものと同じであるから、本文を省略する。

18 要 項

ローマ字教育実験調査実施要項 （昭和 26 年 8 月）

1 目 的

この実験調査は、義務教育期間中の普通の自然学級におけるローマ字学習の効果を調査して、ローマ字教育上の種々の問題点を発見

するとともに、調査の結果を分析・評価して、ローマ字教育に関する基礎的な資料を得ようとするものである。

2 組 織

- (1) この実験調査は、文部省調査（普及）局国語課，国立教育研究所，国立国語研究所が協力して行う。
- (2) ローマ字教育実験調査研究会を設けて，指導案，テスト問題などを作成し，および実験調査の結果の分析・評価，その他について研究協議する。
- (3) 実験調査に関する事務は，文部省調査（普及）局国語課において処理する。

3 対 象

次の条件によりうるもの。

- (1) 「小学校（国民学校）におけるローマ字教育実施要項」（昭和22年2月28日文部次官通達）によってローマ字教育を行う自然学級。
- (2) 今後少なくとも3か年は継続して行いうる学校。
- (3) 今年度は，現在までローマ字教育を実施していない小学校第3学年の学級であって，第2学期から実施しうる学級。
- (4) 自然学級はこの実験調査開始のときの条件であって，その後については，児童の転入学などに特別の考慮を加えるものとする。

4 実験学級の選定

- (1) 国立教育研究所の資料によって，学校の教育課程のグループを基礎に，学校の学級数，教職員ひとりあたりの児童数，および地理的条件等を考慮して選定した。
- (2) 今年度の設置学級は20学級とする。

5 授業時間数および配当（補注参照。）

- (1) 1学年を通じて40時間以上を標準とする。
- (2) 今年度は第2学期以降40時間とする。

(3) 今年度は40時間を区分して、前期15週間は1週2時間ずつ30時間、後期10週間は1週1時間ずつ10時間とする。

(4) 学習時間の配当と学習効果との関係について調査するため、以上の時間数の配当を下記の二つの種類に分けて行う。

甲類：前期15週間，30時間の授業を1週40分単位で3回行い，後期10週間，10時間の授業は1週60分を2回以下で行う。

乙類：前期15週間，30時間の授業を1週20分単位で毎日行い，後期10週間，10時間の授業を1週20分単位で3回に行う。

(5) 甲類，乙類の時間配当を実施する実験学級は下記のとおりである。

甲類：函館付小，秋田付小，光が丘，川崎，宇都宮付小，青木南，新鹿，若桜，法勲寺，隈府。

乙類：富谷，宮寺，常磐松，磐田北，浮孔，新宮，桑島，生石，東国分，深江。

6 教材

(1) 学習指導は教科書を教材として行う。

(2) 今年度は第4学年の教科書を使用する。

(3) 使用教科書は，実験学級を設ける学校が選定し，文部省があっせんする。

(4) 副読本・参考書等は原則的に学習指導の教材としては使用しない。

7 学習指導法

(1) 指導法については，実験調査の条件をできるかぎり同じくするために，文部省において具体的な指導案を作成し，それによることとする。

(2) 今年度は，学習指導要領国語科編（案）に基づいて学習指導試案を作成した。

(3) 宿題に類するものは，原則として課さないこととする。

(4) 課外指導は原則として行わないこととする。

8 実験調査項目

今年度は、特殊な調査項目は設定しない。

9 学習活動の観察記録

- (1) 担当教官は、学習指導に当っては学習指導要領国語科編(案)および指導試案に基づいて中心的な話題・題材を設定して毎時間の教案を作成する。
- (2) 学習活動について、学級別および個人別に綿密に観察し、学習指導観察記録簿・効果判定は話題(教材)ごとに学級別学習指導観察記録に毎時記入し、それに個人の学習活動、その効果などの著しいものを並記する。個人別の観察記録・評価は個人別学習指導観察記録簿にできるだけ詳しく、少なくとも1か月ごとに記入する。
- (3) 観察記録の原簿は、文部省の求めに応じ、随時提出する。
- (4) 観察記録・評価は所定の学級別、個人別の各様式により、1か月ごとに教育委員会を通じ、文部省に報告する。

10 テスト

- (1) 担当教官は、学習指導の段階ごとに、随時、テストを行って学習活動の評価をする。テストの結果・評価については、教育委員会を通じ、文部省に報告する。
- (2) だいたい、17時間、30時間の指導経過後には、文部省で指定する中間テストを行う。報告については第1項に同じ。
- (3) 指導の40時間終了後には、教育委員会の協力を得て、実験学級全体についてテストを行う。
- (4) 第2項、第3項以外のテストに要する時間は、40時間のうちに含める。

11 国語学力テストおよび環境調査

- (1) ローマ字文の学習指導の開始前、文部省で作成した問題により、漢字・かなまじり文による学力テストを行う。
- (2) また、所定の様式により、環境調査を行う。

12 担当教官との連絡指導

- (1) 必要に応じ、教育委員会を通じ、文部省と緊密な連絡を行う。
- (2) 全国3か所において、ローマ字教育実験調査研究会の委員の参加を得て、指導を兼ねてデモンストレーションを実施する予定。

13 実験調査の結果

担当教官提出の観察記録の整理，テストの結果の整理，テストの結果と学習活動との相関関係の分析等を行う。

(補注)

授業時間数および配当について、
昭和27年度は、

1年間30週間、45時間を第1年度の甲類・乙類の区別を継続して行い、

甲類：函館付小、秋田付小、光が丘、川崎、宇都宮付小、青木南、新鹿、若桜、法勲寺、隈府は、

1週90分を45分ずつ火、木（または水、金）の2回に分けて行い、

乙類：富谷、宮寺、常磐松、磐田北、浮孔、新宮、桑島、生石、東国分、深江は、

1週90分を30分ずつ、月、水、金（または、火、木、土）の3回に分けて行った。

昭和28年度は下記の要領によって、1年間40時間のわくだけを決め、指導回数・時間などについては、各学級の担当教官が使用教科書に即して決めることとした。

- (1) 年間40時間を次の区分で各学期に配当する。

第1学期 16時間（4月を第6学年用の教科書へはいるまでの準備の期間として、このうち4時間をあてる。）

第2学期 16時間

第3学期 8時間（おそくとも、2月20日までに40時間の指導が終るようにする。）

以上を基準とするが、各学校の実情に応じて、各学期の時間を2時間以内の範囲内で適当に増減することができる。ただし1か年を通じて合計40時間は増減することはできない。

- (2) 週間・年間の指導回数，毎回の指導時間（分数）等については，各学級の担当教官がこれまでの経験に基き，最も効果が上がり，しかも実施しやすいと信ずるところにより，昭和28年度使用予定の教科書について，その内容や指導の目的に即して決定する。

19 報 告

国語審議会：ローマ字調査分科審議会； つづり方部会報告

（ローマ字調査分科審議会，つづり方部）
（会から第13回国語審議会総会への報告）（昭和27.3.10）

昭和25年4月，ローマ字調査審議会が国語審議会に統合され，ローマ字調査分科審議会として発足し，つづり方部会が設置され，昭和26年6月26日に，その第1回部会を開いて以来，昭和27年2月25日に至るまでに，24回の会合を重ねてまいりました。

第1回の部会におきまして，「なるべくすみやかに，少なくとも教育面においては，ローマ字のつづり方を一つの方式にまとめ，ローマ字教育を強力に推進しよう。」という意見が満場一致で承認され，以後，その線にそって慎重に審議を進めてまいりました。

初期におきましては，「3式の主張ないし理論的根拠などについては，もとの臨時ローマ字調査会ならびに，さきのローマ字調査審議会において，ほぼ出尽した感がある。1日でも早く，具体的に結論を出すためには，この部会では理論の討議はやめて，まだ，効力をもっているいわゆる訓令式を採り上げ，これに検討を加え，欠点があったならば，それを改めていくようにしたらどうか。」という提

案もありましたが、結局、「3式について、各人が思っところを、じゅうぶんに述べ合って、総合的な結論に到達すべきである。」との提案が採択されまして、それぞれの式についての主張・説明が行われました。それらの演述に対して、質疑応答がたびたび行われました。しかしながら、一方において、1日も早く結論を見いだすために理論の論議は切り上げて、具体的審議を行うべきであるとの意見が次第に高まり、第16回部会(26. 9. 10)におきまして、(1) 3式の主張については文書によつて行う。(2) 次回からは、サ行のつづり方から具体的審議にはいる、という2か条が確認されたのであります。

それ以後は一方において、印刷物による各式の理論上の主張・説明を行いつつ、部会の席上においては、毎回具体的に審議が進められ、第1読会としては、(6)を除いて、各項とも少数意見の留保つきで、次のように決定いたしました。

- (1) 「シ」は si または, shi と書く。
- (2) 「チ」は ti または, chi と書く。
- (3) 「ツ」は tu と書く。
- (4) 「フ」は hu と書く。
- (5) 「ジ」は zi または, ji と書く。
- (6) 「ダ行」は da(ダ) di(ヂ_デ) du(ヅ_ド) de(デ) do(ド) と書く。
- (7) 助詞の「ヲ」は wo と書く。
- (8) はねる音「ン」は n と書く。
- (9) つまる音はすべての場合に、つまる音を示す子音の部分を重ねて書く。

—ss—, または, —shsh—; —tt—, または, —chch—

- (10) 「シャ」は sya または, sha と書く。

残りの「シュ, ショ; チャ, チュ, チョ; ジャ(ヂャ), ジュ

（ヂュ），ジョ（ヂョ）；クッ，グッ」などについても上記の方針による。

なお，名詞の初めを，大文字で書くことについては，多数の意見が一致し，これの決定は，分ち書き部会にゆだねることとなりました。

以上，第1読会として決定した諸事項，ならびに，決定事項中における「または」の解釈等につきましては，第2読会におきまして，さらに検討を加え，審議を続行する予定であります。

以上のとおり御報告いたします。

20 報 告

国語審議会：ローマ字調査分科審議会；

分ち書き部会報告

（ローマ字調査分科審議会：分ち書き部）
（会から第23回国語審議会総会への報告）（昭和27.3.10）

まえがき：国語審議会；ローマ字調査分科審議会に，分ち書き部会が設置され，昭和25年7月10日，第1回の会合を開いて以来，1年6か月，その間，16回の会議と，2回の連絡会とを重ねてローマ字文の分ち書きのしかたについて，慎重に審議しました結果，別冊のとおり「ローマ字文の分ち書きのしかた」をとりまとめましたので報告いたします。

審議の経過と方法：初めの2回は問題の所在と審議の方法とについて話し合い，その結果，現行のローマ字の教育面と実用面との両方から考えていくこととした。すなわち，たとえば，古典の書換え

のような特殊の場合のことは考慮の外にいたのである。

資料としては、文部省から発表された、「ローマ文字文の書き方」を主として、「^{改訂}ローマ字教育の指針 解説」を参考として用いた。そのさい、関係諸著書・文献、および、事務当局から提出した審議資料補遺などを合わせ用いた。

ローマ字文の分ち書きのしかた

- 1 単語は原則として一続きに書き、他の単語から離して書く。

Suzusii kaze ga soyosoyo huku.

Kyô wa watasi no tanzyôbi desu.

Nanka hosii, nâ ! Nante namae na no ?

- 2 a 接頭語は続けて書く。

osiroi, omiotuke, omaturi, ohitotu, oikura,

onsugata, onzôsi, ontamazusa,

mitamaya, mikuni, miakasi,

gokibô, gobuzi, gozonzi, muisiki, muzikaku,

husansei, huansin, bukiyô, bukiryô, buaisô,

hikagakuteki, higenzitudeki,

mamukai, massyôziki, massakasama, mappiruma,

manmaru, manmukai, mannaka, mayonaka

- b 接頭語のように用いられることばも続けて書く。

kutiosii, tunnomeru, utihorobosu, utiawase,

tatiokureru, tatigie, torimidasu, torikomi,

sasimodosu, sasisawari, kakikumoru, kakikudoki,

uraganasii, urawakai, itihayaku, osihakaru,

tehidoi, teitai, teatuku, teippai, subayai, zubutoi,

doerai, hunzibaru, bunnaguru, opporidasu, oppirogeru,

ottorikakomu, suttonkyô, kusodokyô, kusootituki,
raigakunen, mainitiyôbi, maizikan,
menami, onami, mematu, omatu, megitune, ogitune,
zenkoku, zenken, zensekai, syôkoku

3 a 接尾語は原則として続けて書く。

watakusitati, kotoritati, kimira, watasidomo,
okusamagata, okamisanren, hahago, yomego,
titiue, hahae, anigimi, senokimi, omawarisan,
oniisan, nêsan, ziisan, kamisama, hotokesama,
tyûidono, sontyôdono, tonobara, wakaisyu,
segareme, koitune, bakame, murabito,
takami, hukami, atusa, yowasa, akkenasa, okasimi,
atumi, sakate, okute, sekennami, nokinami,
hikakuteki, ronriteki, abunage,
midorinasu (kurokami), kodomorasii

b 接尾語のように用いられることばも続けて書く。

imadoki, higuredoki, hi no kuredoki, gohandoki,
tasogaredoki, kawataredoki,
imagoro, konogoro, hirugoro, rainengoro, 1980-nengoro,
nunogosi, kamigosi, tukuegosi, yamagosi,
itininmae (no sigoto), hutatukime, yonensei,
hatukakan, yôkaburi,
hidarikado, mukôgawa, kitagawa, higasiyori, hidarisumi,
migisita, hidariue, minamimuki, hantaimuki,
mukôgisi, gakegiwa, gakepputi, yotutuzi, gakesita,
sakaue, hidarimae, matinaka, suzimukô,
kamiwaza, ningenwaza, sekaizyû, matizyû,
hiyaasemono, bikubikumono, matatabimono,
sinnainagasi, tyôsihazure, komozutumi, kisizutai,

tunawatari, onsenmeguri, omiyamairi, kokorozumori,
hukurotozi, rôsokutate, kippukiri, zityensyanori,
saramawasi, zeikomi, tabakonomi, senpômoti,
tonboturi, monowazuke, asagaozukuri,
takuanzuke, sitattarazu, momizigari,
nezumitori, hadamamori, mangokudôsi,
senmaidôsi, hitomebore, mizusirazu, semitori,
dôbutuzukusi, kekkôzukumé, hunanorirenyû

ただし、「.....入り」,「.....売り」,「.....集め」,「.....選
び」,「.....落し」などのように、最初が母音で始まる語が続
くために、読みにくさを感じずるような場合はつなぎ「-」を入
れてもよい。

mirukuiri (miruku-iri), nezumiirazu (nezumi-irazu),
kippuuri (kippu-uri), utautai (uta-utai), kâdoatume
(kâdo-atume) atusaatari (atusa-atari),
yomeerabi (yome-erabi),
darumaotosi (daruma-otosi), daikon'orosi (daikon-orosi)

また「ペン屋さん」,「めがね屋さん」などの「さん」は前
の語から離し、小文字で書き始める。

pan'ya san, meganeya san, tabakoya san

c 固有名詞に続く接尾語は離して書く。

Tarô tati, Yukiko ra, Zirô San tati, Andô Kun ra

d 固有名詞に続く、「さん」,「くん」,「様」,「氏」,「殿」な
どの敬称は離して、大文字で書き始める。

Hanako San, Gorô Kun, Tanaka-Yosio Sama,
Ôtuka Si, Noguti-Hideyo Dono

ただし、愛称・略称の「ちゃん」は続けて書く。

Kentyan, Settyan,

Makototyan, Hanakotyan,

また、固有名詞につく, 「先生」,「教授」,「博士」,「夫

人」,「委員」などは離して小文字で書き始める。

Watanabe sensei, Taguti kyôzyu,

Yukawa hakusi, Yamamoto huzin, Itô iin

- c 接尾語のうち,「だらけ」,「ぐらい」は離して書く。

doro darake, asedarake, ti darake, ke darake,

kono gurai, awatubu gurai,

Boku no sei gurai aru.

- 4 a 助動詞は原則として続けて書く。

kikaseru, miseru, yorokobareru, tasukerareru,

kakanai, tabeyô, ikitai, hanasimasu, okita,

moratta, yonda, mimai, ikumai,

arisô da, suzusionô da (様子・ありさまなどの意味を表わす「そうだ」。)

- b 助動詞のうちで,「だ」,「です」,「らしい」,「ようだ」,および,伝え聞く意味を表わす「そうだ」は離して書く。

Are wa Huzisan da.

Huzisan wa utukusii yama desu.

Mô minna kaetta yô da.

Kon'ya wa ame ga huru rasii.

Kono hon wa Yamada Kun no rasii.

Asoko wa taihen atui sô da.

〔注意1〕 接尾語の「らしい」は続けて書く。

Ano otoko wa itu made tottemo kodomorasii, ne.

〔注意2〕 「だ」を含めて形容動詞と認められる場合は「だ」を離して書く。

kirei da, zyôzu da

- c 助動詞「う」は接続する動詞・助動詞などによって,それぞれの行のオ段長音となる。

kakô, sasô, utô, utaô, yomô, urô, yobô,

desyô, masyô

- 5 a 助詞は離して書くのを原則とする。

Kore wa watakusi no hon desu.

Koko wa, natsu wa suzushii si, huyu wa atatakai.

Kare wa natsu demo huyu demo zyôbu da.

Tenki ga kuzureru na to omowaseru no go kono
kumo da.

- b 助詞「は」, 「も」が, 助詞「に」, 「で」に重なった場合には続けて書く。

Ue niwa ue ga aru.

Dare nimo dekinai.

Tegami dewa osoku naru.

Kiku dake demo yoi.

- c 接続の「と」は続けて書く。

Haru ni naruto, tubame ga kuru.

- d 禁止の「な」は続けて書く。

Ikuna, yo. Sonna koto o suruna.

- e 用言につく助詞のうちで「ば」, 「ても(でも)」, 「て(で)」
「ながら」, 「たり(だり)」などは続けて書く。

Yomeba wakarui. Mitemo wakarumai.

Kusuri o nondemo naoranakatta.

Dôzo mite kudasai. Ugokanaide kudasai.

Nakinagara utatta.

Kodomotati ga detari haittari site asonde iru.

Tondari hanetari suru.

- f 「に」をともなって副詞句となる場合は続けて書く。

imani, wariaini, tokubetuni, sizenni, gûzenni, issyoni,

syôzikipini, yokeini, ...arigeni, migotoni, yutakani,

zyûbunni, seikakuni, sizukani, suguni, yôsuruni,

anzuruni, ippenni, itidoni, sasugani, imadani, zissaini,
tagaini, tuideni, tomoni wariaini, tugitugini
Asa no zyugyô ga hazimaru maeni, minna de hanasiai
no kai o hirakimasita.

- 6 複合語は続けて書くもの、つなぎ [-] を入れて書くもの、および、離して書くものがある。

atikoti, minomawari, omoidasu, deau, kizuku,
sinrin-titai, wakari-yasui, hanasi-tuzukeru,
bunka kokka, yobô tyûsya, usukimi warui,
ansin suru, sippai suru, bikkuri suru, otomo suru

- a 1 語として、じゅうぶんに熟したもの、および連濁の現象を生じているものは原則として続けて書く。

ziyûzizai, asagohan, akurutosi, nomimizu, tenohira,
sôgokankei, zidôsôti,
tokorodokoro, tyûsyabari, mukôgisi, mezamasidokei,
toritukeru, sumituku, nesoberu, kokoroyoi,
tyûibukai, tika razuyoi

- b 複合語を構成する成分語の独立性がそれぞれ強いもの、および、成分語の一つ、あるいは全部が独立性が弱く、単独では独立語として普通に用いられにくいものは、つなぎ「 - 」を入れる。

- i 成分語の独立性が強いもの

ane-imôto, garasu-mado, haori-hakama, huro-oke,
hanasi-tuzukeru, tumi-tameru, omoi-kiru

- ii 成分語の独立性が弱いもの

tôsa-kyûsû, ziki-kandankei, anzen-titai,
zyetto-enzin, *abc*-zyun, taibutu-renzu,
ne-korobu, oi-sigeru, sosori-tatu

- iii 成分語がそれぞれ独立性が強く、しかも、複合語として誤解されるおそれのないものは離して書く。

rikugun byôin, zidô kyôiku, gaikoku kôro,
ziyû bôeki, tyûsin sisô, genši bakudan,
mikata suru, kandô suru, suketti suru,
genki yoku, imi hukai, kagiri naku

7 複合固有名詞は、次のように書く。

- a 国・都・府・県・市・区・町・村などをとものった固有名詞
はつなぎ [-] を入れ書く。

Nippon-koku, Tôkyô-to, Ôsaka-hu, Nara-ken,
Kyôto-si, Tiyoda-ku, Hanamaki-mati,
Sibutami-mura

〔注意 1〕ただし、「町」, 「村」をとものわないでは地名と
して用いられないようなものは、続けて書く。

Yûrakutyô, Motomura

- b 固有名詞と普通名詞とが複合してできた一つの固有名詞(役
所・銀行・会社・団体・場所・施設・建物などの名まえ)は、そ
れが、他に同類がなく、ただ一つのものである場合には、普通
名詞も語頭を大文字で書く。

Nippon Ginkô, Tôkyô Daigaku, Yokohama Eki,
Syôin Zinzya, Naruto Kaikyô, Tôkyô Keibazyô,
Kusatu Onsen, Ueno Dôbutuen, Syônan Densya,
Koisikawa Syokubutuen, Tôyoko Basu,
Tanna Tonneru, Ôsaka Syôsen, Matusima Kaigan,
Sagami Tetudô, Syakuzii Kôen, Tôkyô Hoteru,
Izumo Taisya, Kamo Ôhasi, Nakano Pûru,
Zingû Kyôgizyô, Otiai Kasôzyô, Tôkyô Kyûkô Dentetu,
Hamanako Kankô Kisen, Tôkyô Wan,
Nippon Rain Onsen Hoteru

〔注意〕ただし、分けがたいもの、および連濁現象の現れたも
のは続けて書く。

Hanzômon, Katabiranotuzi, Ziyûgaoka,
Miyakezaka, Isiyamadera, Edogawabasi,
Sarusawanoike, Sumidagawa, Sakurazima

- c 商品名などで、他に同類があるものは、普通名詞を小文字で書く。

Isezaki meisan, Narumi sibori, Asahi biiru,
Yanagiya pomado, Kôsyû budô, Aomori ringo,
Pakâ mannenhitu, Mitubisi enogu, Singâ misin,
Koronbia razio, Korona taipuraita

- 8 複合固有名詞を構成する成分語が、いずれも固有名詞である場合にはつなぎ [-] を入れて書く。

- i 日本人の姓名。

Yukawa-Hideki, Miyake-Yasuko

- ii 同一の地名などを区別する場合。

Izu-Nagaoka, Atami-Ginza, Nagato-Hutami,
Kanda-Surugadai, Nezu-Yaegakityô

- iii 二つの地域を合併して一つの呼び名で呼ぶ場合。

Uzi-Yamada

- iv 会社名などを冠した駅名など。

Keihin-Kawasaki (京浜川崎), Tôbu-Nikkô (東武日光),
Naraden-Kyôto (奈良電京都), Seitetsu-Hakata (西鉄博多)
Keiô-Tamagawa (京王多摩川), Dentetsu-Takasago (電鉄高砂)

- 9 「^{かみ}上」, 「^{しも}下」, 「東」, 「北」, 「新」などの接頭語のついた固有名詞は、接頭語の部分も大文字で書き始め、つなぎ [-] を入れて書く。

Kita-Sasebo, Higasi-Nakano, Sin-Nagoya,
Hon-Tiba, Simo-Itabasi, Kami-Ôsaki, Tyûô-Maebasi

- 10 「前」, 「裏」, 「わき」などの接尾語を伴う固有名詞は、接

尾語の部分の小文字で書き、その前につなぎ〔-〕を入れる。

Tamagawaen-mae, Kudan-sita, Gizidô-waki,

Gakkô-ura, Hakusan-ue, Zingû-mae-nisiguti

21 報 告

国語教育におけるローマ字の取扱について

(国語審議会：ローマ字教育部会から第14回国語審議会総会への報告) (昭和27.4.14)

国語教育におけるローマ字の取扱について審議しました結果、次のとおり決定いたしましたので報告いたします。

- 1 小学校の国語科の中で、漢字・かなのほかにローマ字による国語の読み書きを必修とすること。なお、これはさしあたり第3学年以上の児童に授けるのを適当とする。
- 2 つづり方、および、分ち書きの方式は教育の課程においては、単一なものであるべきである。
- 3 大学の一般課程においては、ローマ字についての知識を、教員養成の課程においては、さらに、ローマ字の学習指導法を授けるよう処置すること。なお、現在、ローマ字の学習指導を担当している教員の再教育についても、適当な方法を講ずること。
- 4 国語科以外の教科においても、その教科書の中に、ローマ字を用いたものの検定を行うこと。
- 5 中学校におけるローマ字の学習は、当分の間、現行の取扱によって実施するものとする。なお、高等学校以上においても、ローマ字を使う機会を与えることが望ましい。

提 案 理 由

1 審議の目的：1950年に来訪した第2次訪日アメリカ教育使節団報告書中の「国語の改革」の章の最後にしるされた4項の勧告のうち、第1、第2および第3の勧告に対し、国語審議会として、とるべき対策を審議すること。（別紙：1，2参照）

2 ローマ字学習の必要：国語の表記をやさしくして、教育や知識を広め、文化的国民を育て上げる一つとして、漢字・かなと並行してローマ字の学習を行うことが必要である。

また、ローマ字は今日、世界で広く行われている文字であり、日本でも国語を書き表わすために用いられることが多くなってきたので、ローマ字による国語の書き表わし方、および、読み方を学ぶのである。

3a ローマ字による国語の読み書きを必修にする理由：

(1) ローマ字を学習することによって、国語教育の効果をいっそう高めることができる。

(2) 現在、社会でローマ字が使われており、将来ますます普及する可能性があるから、児童にローマ字の学習をさせる必要がある。しかし、現行のように、各学校の選択にまかせておいたのでは、ローマ字教育の効果をじゅうぶんに上げることができないから、これを必修とすべきである。

b さしあたり、第3学年からローマ字の学習を始める理由：

(1) ローマ字の学習も、文字教育の原則からいえば、第1学年から始めるべきであるが、国語教育の学習段階からいっても、教員の質と数とから考えても、さしあたり、第3学年から始めるのが比較的行われやすく、また、効果が上がると考えられる。

現行制度に従い、すでに第3学年から行っている学校もあるから、この学年からならば、実施することができると思われる。

(2) 従来の経験から考えて、ひととおり、ローマ字文をすらすら

と読み書きする能力を養うためには、第3学年から始め、各学年とも最低限度、年間40時間は必要と思われる。

c つづり方・分ち書きの方式が単一なものであるべき理由：

正規の教育課程として全国的にローマ字の学習を行うためには、単一なものでなければ、いろいろの不便を生ずるおそれがある。

d 教員の再教育についての具体的処置：

文部省・教育委員会、または、それから委託された民間団体などが必要な講習を行う。

e 中学校におけるローマ字学習の取扱を当分の間、現行のままとする理由：

中学校におけるローマ字学習の必修の問題は、小学校において、第3学年から必修科目としてのローマ字を授けられた児童が、中学校へ入学する年度からは考慮すべきであるが、それまでは生徒の学力水準がまちまちであり、また、教員の質と数とからみて、一応、現行の取扱によるのが適当であろうと思われる。

4 少数意見：別紙のとおり、審議、決定したが、これに対する少数意見は下記のとおりである。

a 1について：

(1) 小学校の正規の教育課程の中へローマ字を入れる必要はない。

(2) 授業開始の学年は、現行のとおり、第4学年あるいはそれ以後とすること。

b 2について：「2」のあとへ、「ただし、単一な方式の決定を見るまでは、従来のとおり3式を認めることとする。」をつけ加えること。

c 提案理由 2について：前半、すなわち、「国語の表記をやさしくして……必要である。」をはぶき、後半だけとすること。

第8回国語審議会総会要録 抄

(要録11ページ～12ページ)

会長：国語審議会として、使節団の勧告内容を審議事項として採り上げるか、どうか。(採り上げることに決定。)では、この勧告に基いて、問題を検討するために部会を作るか、どうか。

千葉：報告書の Language Reform の章の4項中、第3に「大学程度の水準において」とあるが、大学でローマ字の研究をするか、どうかをはっきりさせてもらいたい。また、部会は4項目全部の対策委員会か。

会長：「大学程度の水準」というのは、必ずしも大学だけではないが、大学も含まれると思う。厳格には、部会ができてから決められるべき問題であろう。部会はローマ字教育を一般的な立場で採り上げる。第4項は別だ。第1項から第3項までは、今まで国語審議会では採り上げられなかったことである。これについての部会は、ローマ字調査分科審議会の部会とせず、まず、国語審議会の部会として設置して、次に具体的な事項を採り上げる段階となって、部会をローマ字調査分科審議会の中にもっていくことになる。(異議なし。)

ローマ字教育部会の委員は何人ぐらいがよいか。

石黒：会長に考えてもらうのがよい。

会長：12人ぐらいではどうか。(賛成。)では、指名させていただく。

大塚，千葉，松浦，安藤，石黒，長沼，

佐野，武藤，山崎，時枝，牛山，照井

以上のかたがたに御異議がなければ、お願いしたい。(異議なし。)

別紙 2

第2次訪日アメリカ教育使節団報告書（ぬきがき）

国語の改革
（前文省略）

国語改革については、次のような勧告をする。

- 1 一つのローマ字方式が最もたやすく一般に用いられうる手段を研究すること。
- 2 小学校の正規の教育課程の中に、ローマ字教育を加えること。
- 3 大学程度において、ローマ字研究を行い、それによって教師がローマ字に関する問題と方法とを教師養成の課程の一部として研究する機会を与えること。

22 建 議

昭和28年3月12日

文部大臣 岡野清豪殿

国語審議会会長

土 岐 善 麿

ローマ字つづり方の単一化について（建議）

ローマ字のつづり方については、昭和12年の内閣訓令第3号（いわゆる訓令式）によって、公式に単一化されているわけでありま
す。しかし、一般社会で現実に用いられているつづり方としては、
いわゆる標準式（ヘボン式）・日本式・訓令式の3種があり、昭和
22年から実施された義務教育におけるローマ字の学習指導でも、こ

の3式の中から自由に採択することができるような処置がとられました。

ローマ字のつづり方については、ローマ字の学習指導実施についての対策を協議するため、昭和21年に設けられたローマ字教育協議会では、「ローマ字教育を行ふについての意見」をまとめ、その中で、「……ローマ字の表記法(特につづり方)については、……さらに適當の機関を設け、学術上・教育上および實際生活上から研究を進め改善をはかられたときこと。」と述べてあり、教育の現場からはつづり方の単一化が強く要望されております。

国語審議会は、国語を書き表わすローマ字のつづり方の単一化をはかることが重要な事からであることを認め、昭和23年10月に設置された「ローマ字調査会」以来の審議事項を引きつぎ、通計54回に及ぶ会議で慎重な審議を重ねた結果、昭和28年3月12日第18回総会において別紙のとおり「ローマ字のつづり方」を決定しました。

第1表・第2表の具体的な取扱についてはさらに必要な機関と連絡して御決定のうえ、ローマ字の単一なつづり方が政府部内および義務教育はもちろん、ひろく一般社会に用いられるよう必要な処置をとられることを要望します。

ま え が き

国語のローマ字つづり方として広く行われている方式には、それぞれに根拠、特色および歴史があり、いずれのつづり方にもわかにその使用を無視することはできない。

しかしながら、国語教育の上や公式の文書、地名などに用いられる場合には、おのずから一定のよりどころがなければならない。この「ローマ字のつづり方」の第1表は、すなわちそのよりどころの役をなすものである。

ただし、第2表によるつづり方も現実には通用しているものであるから、その読み方もまた教育の適當な時期において習得されなけ

ればならない。

なお、そえがきは、書き表わし方のうちのおもなきまりをあげたものである。

ローマ字のつづり方

国語のローマ字つづり方は第1表による。

ただし、第2表のつづりを用いてもよい。

第 1 表

〔 () は重出を示す 〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo

di	du	dya	dyu	dyo
kwa				
gwa				
				wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上にへをつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

23 答 申

昭和28年8月4日

文 部 大 臣 あて

教育課程審議会会長

小中学校のローマ字学習に関する答申

本審議会は、文部大臣の諮問事項「小中学校のローマ字学習について」につき、研究討議しました結果、小中学校の教育課程におい

て、国語審議会会長の建議（昭和28年3月12日づけ「ローマ字つづり方の単一化について」）通りに、実施してもよいことに決定いたしました。ただし当局は具体案の作成にあたっては、実施上混乱をきたさないような処置をとられるように要望します。

（補注： 建議「ローマ字のつづり方の単一化について」は、
47 ページを参照。）

24 新聞発表

（昭和28年8月4日）

このたび、教育課程審議会から、小・中学校におけるローマ字教育を、さきに国語審議会が可決し、文部大臣あて建議した「ローマ字つづり方の単一化について」の趣旨どおり実施してさしつかえないむねの答申がありました。

所定の手続を経て、これが実施されれば、学習指導ならびに教科書についての具体的処置は、次のような趣旨によって取り扱われることになると思います。

1 学習指導について

- (a) ローマ字のつづり方は、現在一般社会においては、いろいろの方式のものが用いられているが、ローマ字の学習指導においては、昭和28年3月12日、国語審議会決定のつづり方のうち、第1表に掲げるもの（そえがきを含む。）を、そのよりどころとする。

〔参考： 現在行われているローマ字教育は、つづり方については、いわゆる訓令式・日本式・標準式（ヘボン式）のうち、どれによってもさしつかえないことになっているので、

現行の「小学校および中学校・高等学校学習指導要領（国語科編）」には、よりどころとすべきつづり方については、特に明示されていない。]

- (b) 第2表に掲げるつづり方（そえがきを含む。）によるローマ字をも読むことができる。

〔参考：現行の「小学校学習指導要領（国語科編）」には、
「ほかの式のつづり方のローマ字文をも読むことができる。」とある。〕

- (c) 第2表に掲げるつづり方（そえがきを含む。）によるローマ字文を読めるようにするには、まず第1表に掲げるつづり方によるローマ字文にじゅうぶんに慣れてから始めるようにする。

〔参考：現行の「小学校学習指導要領（国語科編）」には、
「ほかの式のつづり方のローマ字文を読めるようにするには、まず、一つの式にじゅうぶん慣れてから始めるようにすべきである。」とある。〕

2 教科書について

- (1) 国語科ローマ字の教科書について

- (a) つづり方の第1表・第2表（昭和28年3月12日国語審議会決定）を示す。

〔参考：現行の「教科用図書検定基準」には、「つづり方の比較表が適切に用意されているか。」とある。〕

- (b) ローマ字のつづり方は、昭和28年3月12日、国語審議会決定のつづり方のうち、第1表に掲げるもの（そえがきを含む。）をそのよりどころとする。

〔参考：現行の「教科用図書検定基準」には、「ローマ字つづりは、いわゆる訓令式・日本式・標準式（ヘボン式）のうち、どれかを主として用いてあるか。」とある。〕

- (c) 第2表に掲げるつづり方のローマ字文の読み方も、適当な時期において、習得することができるよう配慮する。

〔参考：現行の「教科用図書検定基準」には、「どの式を採用するにしても、他の二式についての知識をも与えるよう配慮されているか。」とある。〕

(2) 国語科ローマ字以外の教科書について

ローマ字のつづり方は特別の必要のない限り，昭和28年3月12日，国語審議会決定のつづり方の第1表に掲げるもの（そえがきを含む。）を一貫して用いる。

〔参考：現行の「教科用図書検定基準」には、「ローマ字つづりは，特別の必要のない限り，訓令式・日本式・標準式（ヘボン式）のうち，どれか一つを一貫して用いる。」とある。〕

なお，「小学校および中学校・高等学校学習指導要領（国語科編）」および，「教科用図書検定基準」の改訂等については，正式に決定し次第発表されることと思います。

25 通 達

（文初初第 568 号）
（昭和28年8月31日）

各都道府県教育委員会 }
各都道府県知事 } あて
各教員養成大学(部)長 }

文部省初等中等教育局長
文 部 省 調 査 局 長

小中学校のローマ字学習について（通達）

これまで小中学校のローマ字学習におけるつづり方に関しては，

いわゆる訓令式・日本式・標準式（ヘボン式）のうち、そのどれかにより、どの式によるにしても、他の二式についての知識をあわせて得るようになっておりましたが、このたびその単一化をはかり、別記の第1表（そえがきを含む。）をそのよりどころとし、第2表（そえがきを含む。）についての知識もあわせて学習させることにしました。その指導実施の時期方法等については別記をじゅうぶにご参照の上、学習上混乱をおこさないようにご配慮ください。なお参考資料として国語審議会の建議を添付いたします。ついては、この件に関し貴管下各市町村教育委員会（小中学校付属小中学校）へ周知方をお願いします。

別 記

1) ローマ字のつづり方

第1表, 第2表, そえがき

2) 実施の時期

(イ) 学習指導について。 (ロ) 教科書について。

3) 昭和28年度、昭和29年度における取扱。

4) 学習上混乱をおこさないための注意。

1) ローマ字のつづり方

国語のローマ字つづり方は第1表による。

ただし、第2表のつづりを用いてもよい。

第 1 表

〔（ ）〕は重出を示す。〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	kō	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syō
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyō
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyō
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyō

ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dya
kwa			
gwa			
			wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上にへをつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお、固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

2) 実施の時期

(イ) 学習指導について

昭和30年度から下記の趣旨によって実施されることとなる。(ただし学習指導の目標、方法などについては何らの変更もない。)

- (a) ローマ字のつづり方は現在一般社会においては、いろいろの方式のものが用いられているが、ローマ字の学習指導においては、第1表に掲げるもの(そえがきを含む。)を、そのよりどころとする。

〔参考：現在行われているローマ字教育は、つづり方については、いわゆる訓令式・日本式・標準式(ヘボン式)のうち、どれによってもさしつかえないことになっているので、現行の「小学校および中学校・高等学校学習指導要領(国語科編)」には、よりどころとすべきつづり方については、特に明示されていない。〕

- (b) 第2表に掲げるつづり方(そえがきを含む。)によるローマ字文をも読むことができるようにする。

〔参考：現行の「小学校学習指導要領(国語科編)」には、「ほかの式のつづり方のローマ字文をも読むことができる。」とある。〕

- (c) 第2表に掲げるつづり方(そえがきを含む。)によるローマ字文を読めるようにするには、まず第1表に掲げるつづり方によるローマ字文にじゅうぶんに慣れてから始めるようにする。

〔参考：現行の「小学校学習指導要領(国語科編)」には、「ほかの式のつづり方のローマ字文を読めるようにするには、まず、一つの式にじゅうぶん慣れてから始めるようにすべきである。」とある。〕

(ロ) 教科書について

昭和30年度においては、前記通達の趣旨にもとづいた教科書が検定発行される予定である。

3) 昭和28年度，昭和29年度における取扱

昭和28年度の残りの期間および昭和29年度においては，これまでどおり実施することを原則とする。

4) 学習上，混乱をおこさないための注意

ローマ字による国語の書き表わし方と現代かなづかいによる国語の書き表わし方とは，それぞれ独自の体系に基いて決められているもので，両者の間で一致していない点は，連濁・連呼の場合の書き表わし方ばかりでなく，助詞・長音・よう音・つまる音の書き表わし方などにも見られるから，その点をはっきりさせ，それぞれの体系において指導すべきである。

参考資料

昭和28年3月12日

文部大臣 岡野清豪殿

国語審議会会長
土岐善麿

ローマ字つづり方の単一化について
(建議)

ローマ字のつづり方については，昭和12年の内閣訓令第3号(いわゆる訓令式)によって，公式に単一化されているわけであります。しかし，一般社会で現実に用いられているつづり方としては，いわゆる標準式(ヘボン式)・日本式・訓令式の3種があり，昭和22年から実施された義務教育におけるローマ字の学習指導でも，この3式の中から自由に採択することができるような処置がとられました。

ローマ字のつづり方については，ローマ字の学習指導実施についての対策を協議するため，昭和21年に設けられたローマ字教育協議会では，「ローマ字教育を行ふについての意見」をまとめ，その中で，「……ローマ字の表記法(特につづり方)については，……さらに適當の機関を設け，学術上・教育上および實際生活上から研究を進め改善をはかられたきこと。」と述べてあり，教育の現場からはつづり方の単一化が強く要望されております。

国語審議会は，国語を書き表わすローマ字のつづり方の単一化をはかることが重要な事からであることを認め，昭和23年10月に設置された「ローマ字調査」会以来の審議事項を引きつぎ，通計54回に及ぶ会議で慎重な審議を重

ねた結果、昭和28年3月12日第18回総会において別紙のとおり「ローマ字のつづり方」を決定しました。

第1表・第2表の具体的な取扱についてはさらに必要な機関と連絡して御決定のうえ、ローマ字の単一なつづり方が政府部内および義務教育はもちろん、ひろく一般社会に用いられるよう必要な処置をとられることを要望します。

「ローマ字のつづり方」

ま え が き

国語のローマ字つづり方として広く行われている方式には、それぞれに根拠、特色および歴史があり、いずれのつづり方にもわかにその使用を無視することはできない。

しかしながら、国語教育の上や公式の文書、地名などに用いられる場合には、おのずから一定のよりどころがなければならない。この「ローマ字のつづり方」の第1表は、すなわちそのよりどころの役をなすものである。

ただし、第2表によるつづり方も現実には通用しているのであるから、その読み方もまた教育の適当な時期において習得されなければならない。

なお、そえがきは、書き表わし方のうちのおもなきまりをあげたものである。

（「ローマ字のつづり方」の表は、別記(1)のとおりであるから略す。）

26 報 告

ローマ字教育について

（ローマ字調査分科審議会：教育部会）
（から第20回国語審議会総会への報告）（昭和29.3.15）

ローマ字は単音文字であり、また、ローマ字書きは必然的にわかち書きを伴うから、日本語をローマ字で書き表わしてみると、その正しい発音、文における単語の役割のきまり、単語の並べ方のきま

りなどの事実がはっきりと現れてくる。

この意味で、ローマ字の学習は、国語を正しく効果的に使いこなすために、国語のしくみとはたらきとを児童にたやすく理解させる手段となるものであるから、その指導を国語教育の一環として、なるべく低学年から始めることについて、さらに審議すべきである。

27 報 告

ローマ字文のわかち書きについて

(ローマ字調査分科審議会：わかち書き部)
(会から第20回国語審議会総会への報告) (昭和29.3.15)

わかち書きは、日本語をローマ字で書き表わす際の正字法の一部であって、文法と密接な関係をもっていることはいうまでもないが、本来、実用的なものであるから、理論のみにとらわれず、国民一般に読みやすく書きやすいことを主とすべきである。

審議にあたっては、問題となるような具体例を多く集め、文法との関連を考慮しながら検討を加え、その後に大局的見地から再検討のうえ決めることが適当と思われる。

28 告 示

内閣告示第1号

(原文は「ローマ字のつづり方」以下を除いて縦書。)

国語を書き表わすに用いるローマ字のつづり方を次のように定める。

昭和 29 年 12 月 9 日

内閣総理大臣 吉 田 茂

ローマ字のつづり方

ま え が き

- 1 一般に国語を書き表わす場合は、第1表に掲げたつづり方によるものとする。
- 2 国際的關係その他従来の慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によってもさしつかえない。
- 3 前二項のいずれの場合においても、おおむねそえがきを適用する。

第1表 〔() は重出を示す。〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dyu
kwa			
gwa			
			wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上にへをつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

29 訓 令

内閣訓令第1号

(原文は縦書)

各 官 庁

ローマ字のつづり方の実施について

国語を書き表わす場合に用いるローマ字のつづり方については、昭和12年9月21日内閣訓令第3号をもってその統一を図り、漸次これが実行を期したのであるが、その後再びいくつかの方式が並び行われるようになり、官庁等の事務処理、一般社会生活、また教育・學術のうえにおいて、多くの不便があった。これを統一し、単一化することは、事務能率を高め、教育の効果をあげ、學術の進歩を図るうえに資するところが少なくないと思ふ。

よって政府は、今回国語審議会の建議の趣旨を採択して、よりどころとすべきローマ字のつづり方を、本日、内閣告示第1号をもって告示した。今後、各官庁において、ローマ字で国語を書き表わす場合には、このつづり方によるとともに、広く各方面に、この使用を勧めて、その制定の趣旨が徹底するように努めることを希望する。

なお、昭和12年9月21日内閣訓令第3号は、廃止する。

昭和29年12月9日

内閣総理大臣 吉 田 茂

(補注：昭和12年9月21日内閣訓令第3号は、9ページ参照。)

§2 文 献

1 ローマ字教育の指針 (昭和22年2月)

第1 ローマ字教育の必要と方針

- 1 ローマ字は現在世界の多くの国家で、その国語を書き表わすために使われている。従ってローマ字は世界共通の文字であり、これが相互の理解を進め、国際社会をうち立てる上に役立っていることはいうまでもない。

わが国でも、これまで国民の一部では国語をローマ字で書き表わし、国語および国情を世界各国民に理解させるのに役立たせて来たが、これからさらに新しく国際社会の一員として更生するためには、国民一般がローマ字で自由に国語を読み書きする能力および習慣を持つことが必要である。ここにローマ字教育を行う理由の第一がある。

- 2 ローマ字は、本来言語をうつすのにすぐれた機能を持つばかりでなく、書写・印刷等の実際において、能率の高い文字組織である。わが国民一般がローマ字で国語を書き表わし、ローマ字で多くの文献が印刷される社会習慣ができれば、社会生活の能率はいちじるしく高められ、一般国民の文化水準も高められるはずであって、このことが早く一般化することは、わが国の再建に望ましいことである。これが国民一般にローマ字教育を行う理由の第二である。

- 3 ローマ字は、国民一般に国語の特質・構造に関する正確な知識およびこれを自由に使う能力を得させるのに役立つことが多い。漢字・かなにもそれぞれ有利な特質があるが、またローマ字には単音文字として独自の機能がある。ローマ字を使用することによって、わが国民の国語能力および国語教養は、いちじるしく高められる。これが国民一般にローマ字教育を行う理由の第三である。

ローマ字教育を行う必要と理由は、他にも考えられるが、その重要な点は、およそ右の三つに要約されよう。そうしてなるべく速やかに国民一般がその利益を得るためには、国民学校の児童にこれを学ばせる必要がある。

- 4 ところで国民学校でローマ字教育を行う上には、どういう方針をとるべきか。

国民学校の児童は、ローマ字による国語の読み書きを習得することによって、国語の音韻についての自覚、国語の構造ならびに機能上の特質についての理解を深めることができ、また成人社会における表記形式と同じ表記形式を速やかに身につけ、文字組織のやさしさから、多くの語を習得する便宜を受ける。

それ故にローマ字教育は、かな漢字まじり文による国語教育と並行して行われるが、その眼目は、国語教育の徹底・充実ということに求められるべきである。ここに国民学校におけるローマ字教育の根本方針がある。

- 5 右の根本方針に関連して留意すべきことは、かなおよび漢字による国語教育との関係である。かなを専用にするか、漢字を一部存するか、全部廃するか、ローマ字を専用にするか等の問題は、今にわかに定められるべきことではなく、学術上の研究、国民一般の習慣・感情、国民一般の使用した上での経験等の各種の問題を考え合わせた上で、他日国民一般の総意により、自発的に決定されるべきである。すなわち、ローマ字教育の方針・目的は、かな漢字まじり文による国語教育の存在を一方に認めながら、ローマ字による教育の独自の効果をあげることに専念し、国民の国語能力・国語知識を高めることにある。

- 6 なお、ローマ字が英語その他の外国語に用いられているために、英語その他の外国語を授ける前提として、ローマ字による国語の読み書きを教えようという考え方もあるが、これは、まったく誤りであって、ローマ字教育はあくまでも国語教育のために行われ

るものとして考えなければならない。

第2 教 材

教材の選択および配列にあたっては、次の諸点に留意する。

- 1 国語のローマ字による表記法を訓練する。
 - (1) 学習の初期にあたっては、児童生活における基本的な表現形式をローマ字書きで示し、その読み方・書き方に習熟させる。
 - (2) ローマ字のあらゆる場合の表記のし方を自然に順を追って提出し、無理のないように習得させる。(よう音・つまる音・はねる音の表記、句読点の使用法、節のまとめ方などには特に注意する。)
- 2 標準語または標準語的な表現を用いる。

表音文字であるローマ字の特質にもとづき、教材は、つとめて標準語または標準語的な発音・語法により、正しい国語の教育に役立たせる。
- 3 語学的の興味をおのずと持たせるように配意する。
 - (1) 動詞・形容詞の活用、その他の語法的事象を理解させる。
 - (2) 韻文教材では、韻律の表現について理解させる。
- 4 教材はなるべく児童の生活から生れたものを選び、教科書に親しみをおぼえさせると共に、読解力の増進をはかる。そのためには生活童話・詩・日記・観察記録なども適当であろう。

第3 指 導 法

- 1 かな漢字まじり文による国語教育との関連
 - (1) 国語教育の指導には、音声言語と文字言語との両方面があり、国語教育の目的は、主として日常の国語を習得させ、その理解力と発表力とを養うにある。国語教育の一部として新たにロー

マ字教育を採用するのも、この目的をなしとげて一層の効果をあげ、あわせて国語の純化に役立たせようとするにある。ローマ字教育を行うにあたっては、常に児童の国語意識に注意し、その現実 に即して指導法を立案すべきである。

- (2) ローマ字が単音文字であるという特質を生かし、その表音性の適切な指導により、国語の音韻の有機的な構成を明らかにし、国語教育の一面である音声言語の訓練に役立たせなければならない。
- (3) ローマ字教育を原則として、第4学年から行うとすると、この期間の児童は、第3学年までの国語教育によって、初等科における漢字の過半数と、ひらがな・かたかなをおぼえ、かな漢字まじり文の理解・表現にも一応習熟し、初歩的ながら国語意識をもち、基本的な言語力・文字力が身についているから、この事実 に注意して現実 になかったローマ字教育を行い、さらに高次の国語訓練をなすべきである。
- (4) ローマ字は表音文字であるから、ローマ字教育によって生きた言語生活に直接結びついた音声化ができ、音の上から国語意識を明確にすることができる。またローマ字文は、分ち書きで書かれるから、単語意識をはっきりもたせ、国語構造に自覚を与えるなど、文法的訓練にも役立ち、形の上から国語意識を明確にすることができる。かように分節をはっきりすることによって、文章構造の意識と思想の筋道をはっきりする。すなわちローマ字教育は、以上のような点で、国語意識を明確にし、したがって、文体意識をも明確にするものであるから、ローマ字で文章を書くことにより、従来のかな漢字まじり文の表現形式にかかわることなく、耳で聞いただけで意味のよくわかる文章を書くようになり、新しい文体の成立が可能になる。かような点にも十分留意して指導すべきである。

2 ローマ字文の読み方の指導

- (1) ローマ字は単音文字であるために、とかく音声表現的な方面に教授者の注意が向けられやすく、したがってローマ字で書かれた語がその意味に結びつかないきらいがある。ローマ字で書かれたものを読む筋道は、視覚的な語表象が、語の音表象を呼び起し、それがなからだちになって語の意味がわかるという順序である。つまり、ローマ字で書かれた文なり語なりを見て、すぐに意味がわかるようにすることが、ローマ字文の読み方教授の目標であり、ここに第一義的な重点が置かれなければならない。
- (2) ローマ字で書かれた語を音節や単音に分解して教えることは、児童がまだ習わない単語でも、自身で読み書きすることができるようにするための必要な手段ではあるが、それは児童がローマ字に慣れてくるに従って、自然にできてくる語形と語形とを比べ合わせる力に相応して、会得できるように指導すべきである。これには同じ語形や共通した部分をもつ語形をくり返して使用することが必要である。
- (3) ローマ字を教えるについては、音声言語から直接に与える方法と、かなをなからだちにする方法とが考えられるが、ローマ字の特質の一つは表音性にあり、また表記されたものを音声化するにも特色があるから、音声言語から直接にはいる方が、ローマ字の特質にもかない、国語を純正にするためにも、効果がある。ただ、あまりこまかい所に注意しすぎると、いつまでも拾い読みの段階に止まりやすいので、その点にも気をつけなければならない。かなをなからだちとする方法は、児童の既得知識を利用するために、音節的にローマ字を教えるには役立つが、それではかなの表記法にとらわれて、ローマ字文に習熟しないおそれがあり、また、かなづかいの制約が直接にローマ字にかかることにもなるから、かなをなからだちとせず、音声言語から直接に教える方法をとる方が適當である。

3 文字および文章の書き方

- (1) ローマ字には、印刷体と筆記体とがあり、両者は相当に字形がちがうから、児童にとって、はじめはその理解が困難であり、混乱を生じやすい。それでまず印刷体の読み書きを一通りのみこませてから筆記体にかかった方がよい。
- (2) ローマ字で文章を書く場合、思うことを正しく、早く、美しく文字に表現することができるようにしなければならない。書こうと思う語をすぐそのまま文字に表現し、しかもそれが社会的約束からはずれたものでないようにすべきである。書こうとする語形が、文字に書かれる前に頭に浮んでいるくらいになれば申し分がない。音に頼って書くことは、慣れていない語を組み立てる時には必要であるが、音にたよらずに語を文字にうつせるまでにすることが必要である。それ故、特別な努力を払わないでも、ローマ字で書くことができるようになるまで習熟させなければならない。
- (3) ローマ字で文章を書く場合、従来のかな漢字まじり文の文体にかかわることなく、ローマ字文としての新しい文体を作り出すように指導すべきである。ローマ字としては、だらだらと長く続いた文章は意味がとりにくい。また、耳なれない漢語や同音異義語などの使用も、避けなければならない。ローマ字文としては、簡潔で、すなおな、意味のよく通るものが、最も望ましい。ローマ字文の作文指導にあたっては、そういう新しい文体の創造にも心がける必要がある。

2 改訂 ローマ字教育の指針

(昭和25年3月)

第1 ローマ字教育の必要と方針

国語をやさしく、そして、耳で聞いてわかるようにし、教育・学問をひろめ、民主的・文化的な国民を育て上げるためには、いろいろの手段があろうが、その一つとしてローマ字教育を行うことが必要である。

- (1) ローマ字は表音文字であるから、文字にこだわらずに直接にことばの意味を理解させることができ、したがって、表意文字である漢字の場合よりも、書きことばに対する反省を強め、やさしく、わかりやすいことばを書いたり、話したりさせることに役だつ。また、ローマ字は単音文字であるから、国語の音韻的ならびに文法的構造に関する自覚を高め、美しく、正しい国語を自由に使う能力を養うことができる。
- (2) ローマ字は、書いたり、印刷したりするのに、能率の高い文字組織であるから、ローマ字を多く用いる社会習慣ができれば、社会生活の能率、一般国民の文化水準が高められる。
- (3) ローマ字は現在、世界の多くの国が、その国語を書き表わす文字として用いているから、わが国民一般がローマ字で自由に国語を読み書きする能力および習慣をもつようになれば、それだけ国際的な活動を容易にし、国際間の理解・親善を深めることができる。
- (4) ローマ字は字画が簡明であるから、児童・生徒の近視を予防し、学習の際における姿勢を正しく保つためにも有利である。したがって、ローマ字の普及は国民の保健・衛生の立場から見ても望ましいことである。

ローマ字教育の必要な理由は、だいたい以上のようなものである。初等教育機関はもとより、その他の学校でもローマ字教育を行

い、速かに国民一般がその利益を受けるようにする必要がある。

ローマ字教育を行うにあたっては、ローマ字によって国語の音韻的ならびに文法的構造に関する理解を深めるとともに、また、やさしい文字組織を利用して、多くのことばを習得させ、国語の理解力と表現力を高めるように指導することを根本方針とすべきである。なお、ローマ字教育は、英語その他の外国語を教える前提として行うという考え方もあるが、ローマ字教育はあくまでも国語教育の一環として考えられなければならない。

第2 教 材

教科書を選定したり、教材を選んで配列したりする場合は、次の点に注意する。

1 国語をローマ字で字で書き表わす方法を訓練する。

学習の初期 30 時間ぐらひは、児童・生徒の生活に即した単語や文の形をローマ字書きで示し、その読み方・書き方に慣れさせる。特に次の点に気をつける。

(1) 国語を表わすに必要な字母は、指導の初期 20 時間ぐらひまでにひととおり提出する。教科書に現われたものだけで不十分な場合には、日記や生活経験記録、組の児童・生徒の名まえなどによって補う。

(2) 国語の音の表わし方が、自然にもれなく習得できるようにする。すなわち直音・よう音・つまる音・はねる音・長音などを含む単語によって、その読み方・書き方に慣れさせる。

(3) ローマ字文のあらゆる表記のしかた、たとえば、大文字や符号の使い方、分かち書きのしかたなどを無理のない方法で学習させる。

2 正しい国語・美しい国語を習得させる。

(1) 表音文字であるローマ字の特質を生かして、標準語的発音を指導できるように、教材はつとめて標準語を用いなければなら

ない。

- (2) 同音異義で誤解を起しやすいことばや、耳慣れない漢語を避け、耳で聞いてすぐにわかることばを使うように心がける。
- (3) 文章は簡明で生き生きしているものがよい。漢語を避けようとして、とかく、くたぐたしい表現に陥る恐れがあるが、この点は十分に気をつけなければならない。

3 表現力・理解力を訓練する。

日常の言語生活に自由に応用できるように、話し方、聞き方、読書のしかた、記録のしかた、日記の書き方、手紙の書き方などに取材する。

4 国語のもっている法則・性質に対する科学的興味を起させるようにする。

- (1) 動詞の活用、複合語、複合語における連濁、音便等の言語現象を理解させる。

例1 動詞の活用

{	(読む: <u>yoma</u> → <u>yomi</u> など)	<u>ma</u> , <u>mi</u> , <u>mu</u> , <u>me</u> , <u>mo</u>
	(取る: <u>tora</u> → <u>tori</u> など)	<u>ra</u> , <u>ri</u> , <u>ru</u> , <u>re</u> , <u>ro</u>
	(買う: <u>kawa</u> → <u>kai</u> など)	<u>wa</u> , <u>i</u> , <u>u</u> , <u>e</u> , <u>o</u>

例2 複合語

{	sake + ya → sakaya	<u>ka</u> , <u>ki</u> , <u>ku</u> , <u>ke</u> , <u>ko</u>
	ine + taba → inataba	<u>na</u> , <u>ni</u> , <u>nu</u> , <u>ne</u> , <u>no</u>
	koe + iro → kowairo	<u>wa</u> , <u>i</u> , <u>u</u> , <u>e</u> , <u>o</u>

例3 複合語における連濁

{	asa + kiri → asagiri	ka, ki, ku, ke, ko
		ga, gi, gu, ge, go
{	naki + koe → nakigoe	ka, ki, ku, ke, ko
		ga, gi, gu, ge, go

$$\left| \begin{array}{l} \text{kusa} + \text{hana} \longrightarrow \text{kusabana} \left\{ \begin{array}{l} \text{ha, hi, hu, he, ho} \\ \text{(fu)} \\ \text{ba, bi, bu, be, bo} \end{array} \right. \end{array} \right.$$

例4 音 便

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{yomite (ta)} \longrightarrow \text{yonde} \\ \text{arigataku} + \text{gozaimasu} \longrightarrow \text{arigatô gozaimasu} \end{array} \right.$$

(2) 詩・歌・童謡などの韻文教材では、韻律の表現について理解させる。

5 なるべく児童・生徒の生活に取材し、教材に親しみを覚えさせるとともに読解力の増進をはかる。

第3 指 導 法

1 話し方の指導

(1) われわれが正確な文章を書き、または書かれた文章を読んで誤りなく理解するはたらきは、他人の話を聞いて正しい表現を感覚的に知ることから始まるのである。

ここに、初期の国語教育における話し方の重要性があり、この点はローマ字教育においても同様である。

ことに、ローマ字教育の初期においては、児童・生徒にとって見慣れないローマ字で書き表わした単語・句・文はそれを読んだ時に意味が直ちに理解できない恐れがあるから、まず、話し方によってそれらの単語・句・文に十分に親しみをもたせてから、ローマ字で書き表わしたものへ自然に導いて行くことがたいせつである。

(2) 入門期の30時間ほどは、毎時間読み方の指導にはいる前に、話し方の指導をすることが、特に重要である。〔時間配当については、「第四 学習時間の配当」の項を参照のこと。〕

話し方の材料としては、その日に指導すべき新出の単語、新しい用法の単語、新しい句・文の形などを取り上げる。そして

それらが用いられなければならない適当な場を作り、話し合っている間に自然にそれらが使われるようにする。

たとえば、話合いのなかに、それらの単語・句・文に関係のある問を発したり、絵や実物を見せたり、物語にして聞かせたりする。そして教師はそれらの新出の単語・句・文を黒板に書いたり、カードを用いたりしてその語形を示し、語形を語音と意味とに結びつけさせる。

- (3) こうして指導された単語・句・文がほんとうに児童・生徒の身についたか、どうかをためすために、それらを使って自由に文を口で言わせてみる必要がある。ほんとうに自分のものとなっているなら、それらを正しく使って話ができるようになる。このようにすれば話す力もつき、作文の力もつくのである。

2 読み方の指導

正しい読み方というのは、単語の形が目にはいつてくるにつれて、その文の内容が読む人にそのまま直ちに理解されることである。数個の音節でできている単語を読むのに、一つ一つの音節を読んでから、それらの音節を結びつけて、その単語の意味を知るといような読み方は正しい読み方とはいえない。語形が目にはいると、すぐその表わす意味がわかるようにはじめから指導する必要がある。

- (1) 指導法には次のようなものがある。

- (a) a, b, c などの文字の形とその呼び名から教え始める方法。

この方法では、1字1字の形と呼び名とがわかっても、単語の中にある時の音は別に教えなければならない。この方法によると、たとえば、ジー(g), ユー(u), アイ(i), エー(a) といような文字の呼び名とそれらの文字の単語の中における発音とが混同されるために、書き方の時、

「自転車」を $\left\{ \begin{array}{l} \text{gitensya (訓)} \\ \text{gitensha (標)} \\ \text{Gitensya (日)} \end{array} \right\}$ と書き、

「牛乳」を $\left\{ \begin{array}{l} \text{gûnû (訓・標)} \\ \text{Gûnû (日)} \end{array} \right\}$ と書き、「書いて」を「kita」

と書くような誤りを生ずる恐れがある。

(b) 1字1字とその表わす音とを結びつける方法。

たとえば、t を ト、a を ア、b を ブ、e を エ などと教えるのであるが、児童・生徒に1字1字の表わす音を教え、記憶させることは、興味のない仕事であり、たとえ、1字1字の発音を覚えたとしても、それらを結びつけて一つ一つの音節の正しい発音を覚えるのは困難であり、したがって「tabeta」を「トアブエトア」と読むような誤りを起しやすい。

(c) a, i, u, e, o; ka, ki, ku, ke, ko; ... というような五十音図によって教える方法。

この方法で教えると、ローマ字がかなと結びつくから、ローマ字で書く時、

「学 校」を $\left\{ \begin{array}{l} \text{gatukou (訓)} \\ \text{gatsukou (標)} \\ \text{Gatukou (日)} \end{array} \right\}$

「急行列車」を $\left\{ \begin{array}{l} \text{kiyuukouretusiya (訓)} \\ \text{kiyuukouretsushiya (標)} \\ \text{Kiyuukouretusiya (日)} \end{array} \right\}$

と書き誤る恐れがある。また、この方法ばかりによると、読む時にも、たとえば、「サ・ク・ラ・ガ・サ・イ・タ」のように音節ごとに区切って読む癖がつく。これではローマ字文をすらすらと速く読む習慣がつきにくい。

(d) 1語1語の単語の読み方から教える方法。

これは初期の指導としては、一つの指導法であるが、単語

が読めたからといって、文が読めるとは限らない。一定の順に並んだ単語を文法的に処理して、その意味をつかむ力はまた別のものであるから、単語を読む練習に力を入れすぎると文の理解力がそこなわれる。

(e) まず、文章からはいり、適当な時期に音節に分解する方法。

ある一つの単語がいろいろの場面や位置に用いられているいくつかの文章を与え、それらの文章をくり返し読ませて、その特定の単語をはっきりと意識させた後、その単語を取り出し、その単語についての読み書き、および、用い方などを十分に練習させる。

このような単語の数をだんだんふやしていくと、字数の少ないローマ字では語形の似たいくつかの単語に出合う。そこで形の似ている単語をはっきりと区別して意識させることが必要になる。

このようにして、単語の語形の相違と、語音の相違との関係を明らかにするために、単語をさらに、音節に分解し、一つ一つの音節について、その発音を教えるのである。

分解を始める時期は、これらの十分に練習をした単語の数が60語前後になったころが適当であろう。しかしながら、必ずしも、この時期から始めなければならないというわけではなく、それ以前でも、教師が適当と認める機会があったら、音節の分解を行ってもさしつかえない。たとえば、inu, ko-inu ; neko, koneko という単語が出てきた場合には、互に無関係な単語として教えないで、それらを比較して、「ko」という音節を抽出して示すのである。この音節の分解の指導が終ると、児童・生徒は習わないことばでも、自分で自由に読むことができるようになる。

(2) (e) による指導法では、次のことに注意しなければならない。

(a) 教科書は児童・生徒が自分自身で読むべきである。教師が

読んで聞かせ、それをただ口まねさせることは、児童・生徒にほんとうに読みの力をつけることができなくなる恐れがある。このためには、ローマ字文をひととおり読めるようになるまでは話し方の時に、新しい単語・句・文の指導を十分にしておくことが必要である。

- (b) 新しい単語・句・文の指導を有効に行うためには、毎時間に提出する数を制限したほうがよい。だいたい、新しい単語の数は、

第 1 時間～第 5 時間	3 語～4 語
第 6 時間～第 10 時間	4 語～5 語
第 11 時間～第 20 時間	5 語～8 語
第 21 時間～第 30 時間	7 語～15 語

ぐらいが適当であろう。

- (c) 初期の 15 時間ぐらいまでに教科書に出てくる単語は教科書でのくり返し回数を含めて、合計少なくとも 15 回はいろいろな条件で取り扱い、その単語を一目見て読めるようにすることが必要である。いろいろな条件というのは、その単語の黒板に書く位置を変えたり、いくつかの違った文脈の中で用いたり、次々の時間に取り扱ったりすることである。同じことばを同じ位置や同じ文の中で何回も機械的に読ませても効果が少ない。

- (d) くり返しは、単語ばかりでなく、文の形についても必要である。そして基礎的な簡単な形から、少しずつ複雑な形へ進んでいくようにする。

- (e) 読み方の指導にあたっては、読むこと自体を目的とするよりも、むしろ読む人自身がある目的を達するための手段として行うものであることを考えにいれておく必要がある。児童・生徒に文意を考えると、表現に注意するとかいうのは、きりした目的を与えないで、ただ読ませるという指導はなる

べく避けたほうがよい。たとえば、同じ文を数度読ませる場合は、そのたびごとに別の目的を与えて、それぞれの目的が達せられるように指導する必要がある。

(3) 読む力を進めるには、次のような方法がある。

(a) 意味のつながりを手がかりにする方法。

例 Amari tenki ga ii _____, dekaketa.

noni ; nado ; node ; ga ; keredo

上の文の線の引いてあるところに下の単語の中から適当なものを選んで入れさせる。

(b) 語の構成を手がかりにする方法。

例 (i) { denki, dentô, denwa, densya, denpô (訓)
 denki, dentô, denwa, densha, dempô (標)
 Denki, Dentô, Denwa, Densya, Denpô (日)

(ii) { mita, mite, miru, minai
 okita, okite, okiru, okinai

(c) 語形を手がかりにする方法。

語形とは単語を構成する文字の集まりが形作るその単語特有の輪郭（たとえば、Nippon という単語の **Nippon** という輪郭）のことである。その輪郭を一目見た印象から、その単語の読みと、意味とを直ちに理解できるように指導する。このためには、単語を記入したカード（共同学習用の大型のものや、個人用の小型のもの）を用いると効果的である。

以上の中で(a)は特に重要である。前に述べた音節の分解はこれらの方法に附随して新しい単語を読みこなす力を養う補助手段にすぎない。

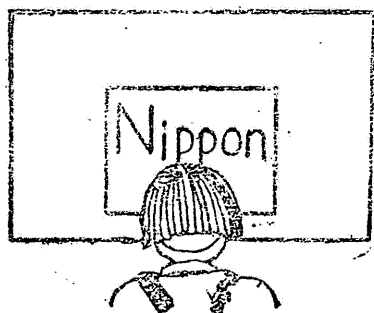
3 書き方および作文の指導

(1) 文字の書き方とその注意

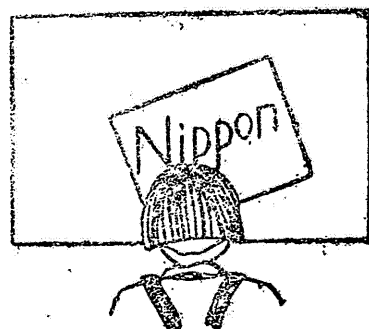
(a) ローマ字の字体には、印刷体・マヌスクリプト体・つづけ

字体の三つがある。入門期の40時間ぐらいいは印刷体・マヌスクリプト体で教えないと効果が上がらない。それは目で見る字形と、手で書く字形とが同じであるほうが覚えやすいからである。最初からつづき字体で教える指導法は避けたほうがよい。つづき字体は書く時の姿勢をくずしやすいから、上級になって、正しい姿勢の習慣がついてから教えたほうがよい。

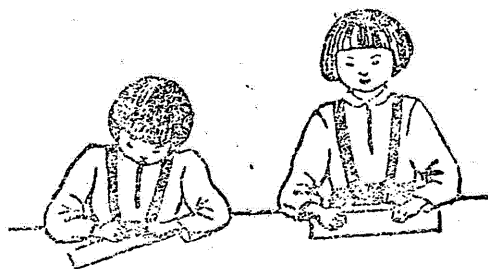
- (b) 初期の段階においては、文字は斜体でなく立体で書くほうが保健上よい。ノートはからだの正面に、まっすぐに置き、姿勢を正して書かせることがたいせつである。ただし、文字に習熟し、したがって、姿勢がくずれる恐れがなくなったら、ノートをやや右へ寄せ、 $15^{\circ} \sim 30^{\circ}$ ぐらい右肩上がりに置いてもよい。ローマ字文を書く場合に、とかく行が右上がりになる傾向が見られるから、初期のうちによく注意して、まっすぐに横に書く癖をつけることが必要である。



初期の段階においては、ノートはからだの正面に、まっすぐに置き、姿勢を正し、文字は立体で書かせる。

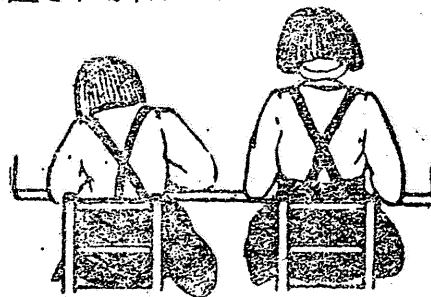


文字に習熟し、姿勢がくずれる恐れがなくなったら、ノートをやや右へ寄せ、 $15^{\circ} \sim 30^{\circ}$ ぐらい右肩上がりに置き、斜体で書かせてもよい。



第1図

第2図



第1図

第2図

最初からノートを右肩上がりに置き、斜体で書かせると、第1図のようにくずれた姿勢になる恐れがあるから、第2図のようにノートをからだの正面にまっすぐに置き、立体を用いて、正しい姿勢で書かせなければならない。

(c) 目とノートとの距離は 30 cm ~ 40 cm が適当である。特に低学年では、けいとけいとの間隔の広い (12 mm 以上) ノートを使わせ、字はなるべく大きく書かせる。なお、使用する鉛筆は、B または 2B 程度のやわらかいものがよい。

(2) 書き方の指導は、読み方と密接な関係を保ちながら行う。

(a) 入門期の前半約 25 時間の間は、読む練習が十分にできた教材を写して書かせる。その時、1 語を一まどめに書き、他の語から離して書く癖をつけることがたいせつである。

(b) 読む力がつき、写し書きが正しくできるようになったら、次に述べるような記憶書きの練習をさせる。それには、児童・生徒が読み書きともに十分にできるようになった語を用いた 3 語 ~ 4 語の短い文を黒板に書き、1 分間ほど指と腕で空間に書く練習をさせてから黒板の字を消し、次に教師は、その文をもう 1 度口で言って聞かせ、児童・生徒には何も見せないで、その文を書かせるのである。

児童・生徒が書き終えたら、教師は再び黒板にその文を書き、児童・生徒に自分たちの書いたのが正しいかどうかを確認させる。慣れるにつれて、単語の数を少しずつふやしていき、また、あまり慣れていない単語もあわせて練習させる。

このような練習を 10 時間ぐらい行ったら、よく読み書きのできる短文を何も見せないで記憶によって書かせる練習を始める。

(c) 記憶書きが十分にでき、読みがさらに上達し、音節の分解も終わったら、それまでに十分に練習のできている単語ばかりで書かれた文の中に、1 語 ~ 2 語ずつ新しい単語をまじえ、それが正しく書けるように練習させる。

このようにして、新しい単語が書けるように指導して行く。

(d) ローマ字文を書く時は、単語の語形を頭に思い浮かべ、まとまった形として文字に写せるようにすることがたいせつで

ある。その練習を十分に行って、はじめて文の内容を豊富にし、表現力を向上させる余裕ができてくるのである。

- (3) ローマ字で文章を書く場合、従来のかな・漢字まじり文体にかかわることなく、ローマ字文としての新しい文体を作り出すように指導すべきである。

耳慣れない漢語や同音異義で誤解を起しやすいことばの使用を避け、しかも言い換えの不適切から、だらだらと長く続いた文章にならないように注意し、簡潔で、すなおな、意味のよく通るような表現に心がけなければならない。

- (4) 書き方の指導にあたっては、単に、機械的な反復練習に陥らないように、児童・生徒の生活に即したものに取材し、児童・生徒が興味をもって学習できるように心がけることが必要である。

以上述べたように、指導法にはいろいろあるが、結局は学習過程における一要素にすぎない。

教師の熱意、児童・生徒の能力や努力が基本となり、その他の諸要素が加わって、はじめて教授の効果が現われるのであって、あらゆる場合に万人に共通する一定不変の指導法というものは、存在しないのである。

教師の関心と熟練の度合、児童・生徒の年齢、素質と努力、および学習が行われる言語的環境等によって指導法は変化すべきものであるから、絶えざる研究とくふうによって、各自の最善の方法を発見し、信念をもって実施して行くように努力してほしい。

第4 学習時間の配当

入門期においては、時間の適切な配当によって、学習の効果を上げることができる。1週間に1時間というような時間配当では、教育効果が上がりにくいから、少なくとも、1週間に3時間を配当し、13週間～15週間続けて集中的に学習させるべきである。

マヌスクリプト体

A B C D E F G H I J K L M

N O P Q R S T U V W X Y Z

a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t

u v w x y z

Ban no gohan o taberu.

Suzume ga naite iru

3

ローマ字文の書き方 (昭和22年2月)

I つづり方

1 直 音

a	i	u	e	o
ア	イ(ヰ)	ウ	エ(ヱ)	オ

ka	ki	ku	ke	ko
カ	キ	ク	ケ	コ

ga	gi	gu	ge	go
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ

sa	si	su	se	so
サ	シ	ス	セ	ソ

za	zi	zu	ze	zo
ザ	ジ(ヂ)	ズ(ヅ)	ゼ	ゾ

ta	ti	tu	te	to
タ	チ	ツ	テ	ト

da		de	do
ダ		デ	ド

na	ni	nu	ne	no
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ

ha	hi	hu	he	ho
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ

ba	bi	bu	be	bo
バ	ビ	ブ	ベ	ボ

ma	mi	mu	me	mo
マ	ミ	ム	メ	モ

pa	pi	pu	pe	po
パ	ピ	プ	ペ	ポ

ya		yu		yo
ヤ		ユ		ヨ

ra	ri	ru	re	ro
ラ	リ	ル	レ	ロ

wa
ワ

2 よう音(拗音)

kya キヤ	kyu キユ	kyo キョ	gya ギヤ	gyu ギユ	gyo ギョ
sya シヤ	syu シユ	syo ショ	zya ジャ(ヂヤ)	zyu ジュ(ヂユ)	zyo ジョ(ヂョ)
tya チャ	tyu チュ	tyo チョ			
nya ニヤ	nyu ニユ	nyo ニョ			
hya ヒヤ	hyu ヒユ	hyo ヒョ	bya ビヤ	byu ビユ	byo ビョ
mya ミヤ	myu ミユ	myo ミョ	pya ピヤ	pyu ピユ	pyo ピョ
rya リヤ	ryu リュ	ryo リョ			

〔備考1〕 以上は、現代語で標準的と認められる音を、ローマ字で書きあらわす場合と、かなで書きあらわす場合とを対応して示したものである。

〔備考2〕 次のようなつづり方も必要に応じて習わせる。

shi (シ), chi (チ), tsu (ツ), fu (フ), ji (ジ, チ)
sha (シャ), shu (シュ), sho (ショ), cha (チャ), chu (チュ),
cho (チョ), ja (ジャ, チャ), ju (ジュ, チュ), jo (ジョ, チョ),
di (ヂ), du (ヅ), dya (ヂャ), dyu (ヂュ), dyo (ヂョ),
wo (ヲ, 助詞「を」にかぎる), kwa (クワ), gwa (グワ)

〔備考3〕 特殊な音の書きあらわし方については自由とする。

3 いわゆる長母音はその文字の上にやまがた「へ」をつけてあらわすか、または母音字を重ねてあらわす。ただし、「ていねい」
「命令」などの「エイ」は ei とする。

obâsan	おばあさん	nêsan	ねえさん
Tôkyô	東京	ryôri	料理
kûki	空気	tyûi	注意

ôkii, ookii	大 き い	tiisai	小 さ い
teinei	て い ね い	meirei	命 令

- 4 はねる音は、すべて n であらわす。

sannin	三 人	sinbun	新 聞
denpô	電 報	kantoku	監 督
tenki	天 気		

〔注意〕 はねる音をあらわす n の次にすぐに母音字又は y が続く場合には、n のあとに切るしるし「'」を入れる。

gen'in	原 因	kin'yôbi	金 曜 日
--------	-----	----------	-------

- 5 つまる音は、次に来る子音字を重ねてあらわす。

Nippon	日 本	gakkô	学 校
kitte	切 手	zassi	雑 誌
ossyaru	おっしゃる	syuppatu	出 発
tyotto	ちょっと		

ただし次のような場合にはアポストロフ「'」を使って示す。

“A'” to sakebu. 「あっ」とさけぶ

- 6 文の最初の単語や固有名詞やその他必要のある場合には、その語頭に大文字を用いる。

Kyô wa kin'yôbi desu. きょうは金曜日です。

Tôkyô	東 京	Huzisan	富 士 山
-------	-----	---------	-------

〔附記1〕 外来語は国語音のつづり方に従って書く。

inki	イ ン キ	naihu	ナ イ フ
tabako	た ば こ	ranpu	ラ ン プ

〔附記2〕 外国語（地名・人名を含む。）のローマ字つづりは、原則として原語に従って書く。ただし日本語風に呼びならわした地名・人名は外来語なみにあつかう。

Ⅱ 分ち書きのし方

- 1 原則として単語はそれぞれ一続きに書き、他の単語から離し

て書く。

Suzusii kaze ga soyosoyo huku.

涼しい風がそよそよ吹く。

Kyô wa watakusi no tanzzyôbi desu.

きょうは私の誕生日です。

Kare wa eigo mo deki, sono ue Huransugo mo zyôzu da.

彼は英語もでき、その上フランス語もじょうずだ。

Iya, sonna kimoti wa nai.

いや、そんな気持はない。

〔注意1〕 いわゆる形容動詞と認められる語は、「だ」をはなして書く。

kirei da きれいだ zyôzu da じょうずだ

〔注意2〕 複合語で一語としてまだ十分に熟していないものにはつなぎ「-」を入れる。

rigai-kankei 利害関係

hanasi-tuzukeru 話し続ける

ただし、一語として十分に熟したものには「-」を用いない。

hinoki ひのき amagasa あまがさ

〔注意3〕 接頭語・接尾語は続けて書く。

otera お 寺 massakini まっ先に

anatagata あなたがた ronriteki 論理的

dorodarake だろだらけ

ただし、接尾語で上の語に続けて書くと、意味のまぎれやすい場合には、離して書く。

Hanako San 花子さん Tarô Kun 太郎君

Itô-Zirô Sama 伊藤次郎様

〔注意4〕 固有名詞は次のように書く。

Nippon Ginkô 日本銀行 Sumidagawa すみだ川

Sakurazima 桜島 Tôkyôwan 東京湾

Tôkyô-to	東 京 都	Tiba-ken	千 葉 県
2	助動詞は続けて書くのを原則とする。		
kikaseru	聞か <u>せる</u>	misaseru	見 <u>させる</u>
yorokobareru	喜ば <u>れる</u>	tasukerareru	助け <u>られる</u>
kakanai	書か <u>ない</u>	tabeyô	たべ <u>よう</u>
ikitai	いき <u>たい</u>	hanasimasu	話し <u>ます</u>
okita	起き <u>た</u>	moratta	もら <u>った</u>
yonda	読ん <u>だ</u>	mimai	見 <u>まい</u>
ikumai	行く <u>まい</u>		

〔注意1〕 助動詞「う」は接続する動詞・助動詞などによって、それぞれの行のオ段長音となる。

kakô	書 <u>こう</u>	sasô	差 <u>そう</u>	utô	打 <u>とう</u>
utaô	歌 <u>おう</u>	yomô	読 <u>もう</u>	urô	売 <u>ろう</u>
kogô	こ <u>ごう</u>	yobô	呼 <u>ぼう</u>		
desyô	で <u>しょう</u>	masyô	ま <u>しょう</u>		

〔注意2〕 助動詞「そうだ」「ようだ」は sô da, yô da のように、それぞれ「だ」を離して書く。

〔注意3〕 助動詞「そうだ」は様子・有様などの意味をあらわすものは、「そう」を前の語に続けて書くが、伝え聞く意味をあらわすものは前の語から離して書く。（次項参照）

arisô da	有 <u>り</u> そう <u>だ</u>	aru sô da	有 <u>る</u> そう <u>だ</u>
suzusisô da	涼 <u>し</u> そう <u>だ</u>	suzusii sô da	涼 <u>しい</u> そう <u>だ</u>

3 助動詞のうちで「だ」「です」「らしい」「ようだ」および伝え聞く意味をあらわす場合の「そうだ」などは、離して書く。

Are wa Huzisan da.

あれは富士山だ。

Huzisan wa utukusii yama desu.

富士山は美しい山です。

Mô minna kaetta yô da.

もうみんな帰ったようだ。

Kon'ya wa ame ga huru rasii.

今夜は雨が降るらしい。

Kono hon wa Yamada Kun no rasii.

この本は山田君のらしい。

Asoko wa taihen atui sô da.

あそこはたいへん暑いそうだ。

〔注意〕 接尾語の「らしい」は続けて書く。

Ano otoko wa itu made tattemo kodomorasii ne.

あの男はいつまでたっても子供らしいね。

4 助詞は、離して書くのを原則とする。

Kore wa watakusi no hon desu.

これは私の本です。

Koko wa, natu wa suzusii si, huyu wa atatakai.

ここは、夏は涼しいし、冬はあたたかい。

Kare wa, natu demo huyu demo zyôbu da.

彼は、夏でも冬でもじょうぶだ。

Tenki ga kuzureru na to omowaseru no ga kono kumo da.

天気がくずれる なと思わせる の がこの雲だ。

〔注意1〕 助詞「は」「も」が助詞「に」「で」に重なった場合には続けて書く。

Ue niwa ue ga aru.

上には上がある。

Dare nimo dekinai.

だれにもできない。

Tegami dewa osoku naru.

手紙ではおそくなる。

Kiku dake demo yoi.

聞くだけでもよい。

〔注意2〕 接続の「と」は続けて書く。

Haru ni naruto, tubame ga kuru.

春になると、つばめが来る。

〔注意3〕 禁止の「な」は続けて書く。

Ikuna yo.

行くなよ。

- 5 用言に附く助詞のうちで「ば」「ても」「でも」「て」「で」「ながら」「たり」「だり」などは続けて書く。

Yomeba wakaru.

読めば分る。

Mitemo wakarumai.

見ても分るまい。

Kusuri o nondemo naoranakatta.

くすりをのんでもなおらなかった。

Dôzo mite kudasai.

どうぞ見て下さい。

Ugokanaide kudasai.

動かないで下さい。

Nakinagara utatta.

泣きながら歌った。

Kodomotati ga detari haittari site asonde iru.

子供達が出たり入ったりして遊んでいる。

Tondari hanetari suru.

とんだりはねたりする。

Ⅲ 符号の使い方

- 1 ローマ字文の中に用いる符号の主なものは、次のとおりである。

・	,	;	:	?
とめ	くぎり	おおくぎり	ふたつてん	といのしるし
	(コンマ)	(セミコロ)	(コロ)	

!
つよめるしるし

()	[]	“ ”	‘ ’	—
かっこ	かくがっこ	引用のしるし	ひとえの 引用のしるし	ぼう
—		,	へ	
つなぎ	きるしるし (アポストロフ)		やまがた	

- 2 「.」は文の終りに用いる。

Kyô wa ii tenki desu.

きょうはいい天気です。

〔注意〕「.」は、また略語を示す場合にも用いる。

N. H. K. (Nippon Hôsho Kyôkai)

日本放送協会

- 3 「,」は、一つの文の中で、語句の切れ目に用いる。

Hai, sô desu. はい, そうです。

Amari tenki ga ii node, dekakete ikimasita.

あまり天気がいいので、でかけていきました。

- 4 「;」は「,」よりも大きな区分を示す場合に用いる。

Watakusi, anata, anokata; kore, sore, are; koko, soko,
asoko nado wa mina daimeisi desu.

私, あなた, あの方; これ, それ, あれ; ここ, そこ,
あそこなどはみな代名詞です。

- 5 「:」は、「;」で示す区分より意味の連絡のいっそう少ない
区分を示す場合に用いる。

Kotowaza nimo iu: Saru mo ki kara otiru.

ことわざにもいう: さるも木から落ちる。

- 6 「?」は問いや疑いの文の終りに用いる。

Kore wa anata no desu ka?

これはあなたのですか。

Are wa nan darô?

あれはなんだろう。

- 7 「!」は、感動や命令の意味を特に強くあらわす必要のある場

合に用いる。

Mâ, kirei da koto !

まあ、きれいなこと

Hanako San, hayaku irassyai !

花子さん、早くいらっしゅい。

- 8 「()」「[]」は、説明のための語句や補いの語句をそえる場合などに用いる。

Sensyû no nitiyôbi (3-gatu 17-niti), watakusi wa
Yokohama e ikimasita.

先週の日曜日(三月十七日), わたくしは横浜へ行きました。

Kare wa sairen [no oto] ni bikkuri sita.

彼はサイレン [の音] にびっくりした。

- 9 「“ ”」は、語句を引用する場合や人のいうことばをそのままうつす場合などに用いる。

“Masao San, uguisu ga naite imasu yo,” to itte, nêsan
wa mado o akemasita.

「正男さん, うぐいすがないていますよ。」といって, 姉さんは窓をあけました。

Seisyo niwa, “Kami wa ai nari,” to aru.

聖書には, 「神は愛なり」とある。

〔注意〕 引用文の中にさらに語句を引用する場合に, 「‘ ’」を用いることがある。

- 10 「——」は、説明の語句をそえる場合などに用いる。

Itiban atarasii yôhuku —— kono aida tukutta bakari no
o kite dekaketa.

いちばん新しい洋服 —— この間つくったばかりのを 着てでかけた。

- 11 「-」は、複合語で、まだ一語として十分に熟していない場合や、一語が二行にまたがる時に、その語が次の行に続くことを示す場合などに用いる。

rigai-kankei

利害関係

hanasi-tuzukeru 話し続ける

Mukasi, mukasi, aru tokoro ni ozii-
san to obâsan ga arimasita.

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがあ
りました。

〔注意〕 一語で二行にまたがる場合に、一つの音節の中途やはね
る音の前では切らない。また、つまる音はかならず重なった字
の間で切る。なお、切る場合は意味のとりやすいようにあつか
う。

12 「'」は、はねる音 n とその次に来る母音字または y とを切り
離す必要のある場合に用いる。(I. 4 注意参照)

13 「へ」は、母音字の上に附けて、その母音が長音であることを
示す場合に用いる。(I. 3 参照)

4 小学校学習指導要領 国語科編（試案）

（昭和26年〔1951〕改訂版による。） （昭和26.12.15）
（原文は縦書）

第6章 ローマ字の学習指導

まえがき

ローマ字の学習は、社会生活をしていく上に、どのような意義があるか。ローマ字の学習指導を国語教育の一環として行うためにはどんな目標が考えられるか。また、ローマ字の学習指導を行うためにはどのような計画と方法があるか。ローマ字の学習指導を国語教育の一環として行おうとする人たちのために、このようなことについて、具体的に考えていくのが、この章のねらいである。

第1節 ローマ字の学習指導はどう考えたら よいか。

ローマ字は、表音文字であり、単音文字であるから、話しことばや書きことばに対する反省を強め、ことばの決まりについての児童の自覚を高めることができる。また、ローマ字は、書いたり、印刷したりするのに能率の高い文字組織であるから、ローマ字を多く用いる社会的習慣ができれば、社会生活の能率と一般国民の文化水準を高めることができる。なお、ローマ字は現在多くの国がその国語を書き表わす文字として用いているから、国際間の理解・親善を深める上に役だつ。

ローマ字の学習指導が、国語の学習指導の中で、どのような位置を占めるかを考えると、次のようになる。

- 1 児童の精神発達の段階に応じ、国語を書き表わす一つ的手段としてローマ字を読み書きする能力を養い、あわせて国語・国字間

題に対して反省する機会を与える。

2 ローマ字の長所を生かし、国語の機能とその特質を児童に理解・習得させ、聞いただけでわかることばを使う習慣を養う。

3 ローマ字がもっている国際的、能率的な長所を理解させる。

このように、ローマ字の学習指導を通じて国語力の充実をはかり、国語生活の改善に資することができるから、ローマ字の学習指導は、国語学習指導の中で一つの重要な位置を占める。

第2節 ローマ字の学習指導の一般目標は何か

ローマ字の学習指導の一般目標として、次のことがあげられる。

- 1 ローマ字を読みこなす力を養う。
- 2 自分の考えをローマ字で書き表わす力を養う。
- 3 ローマ字書きの決まりを身につけて、正しく表現する力を養う。
- 4 気軽にローマ字を使う習慣と態度を養う。

第3節 小学校におけるローマ字学習指導の目標は何か

ローマ字教育が国語教育の一環として行われるかぎり、小学校におけるローマ字の学習指導の目標は、一般的には、国語学習指導の原則によって、ローマ字が表音文字である長所を生かし、これをじゅうぶんに使いこなす力を身につけさせることであることはいうまでもない。

以上の立場から、だいたい次の二つの目標が考えられる。

- 1 ローマ字文への興味を発達させ、自発的にローマ字を読む習慣と態度を養う。
- 2 ローマ字書きのきまりを理解させ、読む人に誤解を起させないように、また、読みにくさを感じさせないように分ち書きをして書く習慣と態度を養う。

第4節 ローマ字の学習指導はどう計画したらよいか

一 初期の段階 (注) かつこの中の数字は、3年生からローマ字学習を始めた場合の3年生の基準を示す。

(一) 読むことの学習指導はどうしたらよいか。

1 指導の目あてをどこにおくか

- (1) はじめて読む文を、1分間35語(30語)以上の速さで読むことができる。
- (2) 一目見て読み取れることばの数が最小限70語くらいになる。
(ただし活用形やその他の変化した形は含まない。)
- (3) 習わないことばでも、読むことができる。

2 どう指導したらよいか

(1) 読みの準備。

学習を始める前に、適当な図形や絵などを用いて、その大小・向き・細部の違い・配列の順序などを、速く、正しく見分ける練習をさせる。また視線が行に従って左から右へ運動する練習をさせたり、行の終りから次の行の初めへ速く、正しく動く練習をさせる。

学習を始める3、4か月くらい前から、学校の建物や備品などにローマ字書きの札をはり、ローマ字に親しみをもたせておく。

(2) 新しい単語の提出。

(イ) 新しく提出する単語の数は、だいたい次の標準によるのが適当であろう。

第1時～第5時	3語～4語
第6時～第10時	4語～5語
第11時～第20時	5語～8語
第21時～第30時	7語～15語

(㍑) 新しく提出する単語の指導は、その単語を話すことばの文脈の中で使って行う。理解の背景となる経験を確実にするために行う話合いの中で、自然に使われる場合は、その機会を利用する。それができない場合には、次のような方法によるのがよい。

(㍒) そのことばを使わなければならないような実例、絵・写真、実際の状況などを示して話させたり、質問させたり、答えさせたりする。

(㍓) 文章の中の、ある位置へくることばを考えさせる。

(㍔) 教師がある物語をつくって、その中へ、その単語を織りこんで、話して聞かせる。

3 どんな点に注意したらよいか

(1) 入門学年の指導は、特に重要であるから、その計画は、児童の実態に即してじゅうぶん考慮しなければならない。

(2) 新しい単語の指導は、文字を見て、語音を思い浮べる力が強くなるにつれ、また単語を音節に分解する力が進むに従って、少しずつ、その手続を、簡単にしていく。しかし、指導する新しい単語の数が多い場合は、むずかしい単語については、(㍑)から(㍔)までの方法によって指導する必要がある。ただし、児童が自分で確実に理解して読みうることばの指導は、しなくてもよい。

(3) 初期に提出される単語や、文の形は、違った文脈の中でくり返して使われなければならない。単語は、初めの60語から70語ぐらい(70語～80語)は教科書の中で7回(8回)以上くり返して提出すべきであるが、教師は、さらに、他の機会において、同じ単語を数回くり返し提出して指導すべきである。これ以後は、くり返しの度数を少しずつ減らしていい。

(4) 第1回の読みは、児童自身が黙読で行うことがたいせつである。

(5) 一つの段落は、一つのまとまった内容を表わしていることを

理解させる。

- (6) 文字、音節の発音ばかりを機械的に指導すると文字の形を見分けるのに注意を奪われたり、一つ一つの音節を表わす文字と音との関係を考え考え読んだり、また、ことばの意味がわからなかったりするようになる恐れがある。

(二) 書くことの学習指導はどうしたらよいか。

1 指導の目あてをどこにおくか

- (1) 印刷体またはマスキリプト体を用いて書くことができる。
- (2) 文の初めに、大文字を使うことができる。
- (3) よく書き慣れた短い文を、1分間40字(30字)以上の速さで書くことができる。
- (4) 1センチメートル(1.2センチメートル)の間隔のけい線の中に、大文字も小文字も正しく書くことができる。
- (5) 住所・氏名・年月日・助詞などは、自由に速く書くことができる。
- (6) 固有名詞のあとへくる「さん・様・くん」を正しく分ち書きすることができる。
- (7) 日常よく使われることばの語尾の変化形が正しく書くことができる。
- (8) 日常よく使われることばを、正しく分ち書きすることができる。
- (9) はねる音と、その次にくる母音字または、yを切り離して発音する場合には、['](アポストロフ)をつけることができる。
- (10) 長音のしるし[へ]または[-]を使うことができる。
- (11) 文の終わりには、とめ[.]をつけておくことができる。
- (12) 普通の疑問文には、問のしるし[?]をつけることができる。
- (13) 文中の明白な切れ目には、くぎり[,]を入れて書くことができる。

2 どう指導したらよいか

ローマ字を書く力は、文をつくる力を発達させていくうちに、自然にできてくるものであるが、ここには、書く技術に関する面だけをあげておく。

(1) 見ながら書くこと。

見ながら書いていくうちに単語の語形と単語を形づくる、一つ一つの文字が書けるようになり、分ち書きが自然にできるような基礎を作る。初期の段階では教師の見ていないところでこれを行うと字形をまちがえたり、誤った分ち書きをする習慣をつける恐れがある。この方法で字形・大きさ・位置・分ち書きなどを正しく書く習慣をつけるようにすることは、常に必要であり有効である。

(2) 覚えたことばを書くこと。

見ながら書く力がついて、書こうと思う単語がちょっと見ただけですぐ書ける程度になれば、そのことばは見ないで書ける段階に達したと考えてよい。教師は、そのころから、見ながら書くことの指導のほか、覚えて書くことばの増加をはかる。

(3) 自由に書くこと。

覚えて書くことばが増加するにつれて、自分で書こうと思うことばを自由に書く技術を指導し始める。この移りゆきは、自然にゆっくり行われることが必要である。自由に書くことの段階では、初期のうちは、短い興味のある文を書かせる。

(4) 分ち書きをすること。

分ち書きを正しくするのに必要なのは、文法の知識ではなく、分ち書きの規則を適用する技術である。まず1語を一まとめに書くということから出発して、よく似た語がほかの語と区別されるようになればよいのである。

(5) 符号の使い方。

符号の使い方の指導は、読むこと、書くことの実際に即して行うべきで、符号の名まえや使い方だけを教えても効果が少な

い。読みのほうでは、この段階でも、符号の全部がひとつおき出てくるであろうが、書くほうでこの段階の指導すべき符号は、次のものの基本的な使い方である。

(イ) とめ [.]

(ロ) といのしるし [?]

(ハ) くぎり (コンマ) [,]

(6) 学年の終りには、四つ (三つ) 以上の簡単な文で、一つのまとまった内容を書き表わすことができるようにする。

3 どんな点に注意したらよいか。

(1) 入門学年の指導は、特に重要であるから、書くことにおいても、その計画は、児童の実態に即してじゅうぶん考慮しなければならない。

(2) 一つずつの音節や単語を書き表わすことだけに力を入れすぎ、ことばを一まとめにして書き表わすことの指導をおろそかにすると、分ち書きをする習慣がつきにくくなり、かなを書く場合の習慣にとらわれたり、語音を忠実に表現しようとするあまり、共通語を書く際にも、方言やなまった音をそのまま書き表わしたりする傾向ができてくる。

(3) 学年の終りには、よう音・つまる音、n とその次にくる母音字、または y を切り離して書く場合の書き方を、特に練習させるがよい。

二 やや進んだ段階 (注) かつこの中の数字は、3年生からローマ字の学習を始めた場合の4年生に対する基準を示す。

(一) 読むことの指導はどうしたらよいか。

1 指導の目あてをどこにおくか。

(1) はじめて読む文を1分間55語 (50語) 以上の速さで読むことができる。

(2) 一目見て読み取れることばの数が、200語～350語以上になる。(ただし活用形やその他の変化した形は含まない。)

- (3) いろいろの種類の文を読むことができる。
- (4) イタリック体・ゴシック体の用い方がわかってくる。
- (5) 一目見て読み取れることばの範囲が広がり、たとえば、慣用句などは、できるだけすぐ読めるような習慣ができる。
- (6) いろいろな符号の使い方がわかる。
- (7) 読む速さを増すことに興味をもつようになる。
- (8) 分ち書きの違いによって、意味が変わることに気づくようになる。
- (9) ほかの式のつづり方のローマ字文をも読むことができる。
- (10) 文字の名まえを読むことができる。

2 どう指導したらよいか。

- (1) 読めることばの数を増すには、一目見て読み取れることばを増すことと、未知のことばでも、自分で読んで理解する力をつけることの、二つの面を考える必要がある。
- (2) 新しい単語の指導は、この段階から児童の能力によって著しく違ってくる。

この段階の初期には進んだ児童に対しては、知らない固有名詞とか、特別にむずかしい単語だけを指導し、話しことばとして使われている単語については特別な指導の必要はない。

また、普通の児童に対しては、教材の新出語が総語数の10分の1を越えるような場合は、簡単に指導をしたほうが効果的である。また遅れた児童に対しては、同じ教材で指導する場合、相当ていねいな指導を行い、さらに第1回の読みを教師が質問しながら指導していくようにする。

3 どんな点に注意したらよいか。

- (1) ひゆ的ないいまわしを理解する力をつけるようにする。
- (2) 接続詞・副詞などの働きを理解させるようにする。
- (3) 複合語のなりたちを理解させるようにする。
- (4) 前後の関係で、一つのことばの働きが違うことに気づかせる

ようにする。

- (5) ほかの式のローマ字文を読めるようにするには、まず、一つの式にじゅうぶん慣れてから始めるようにすべきである。

(二) 書くことの指導はどうしたらよいか。

1 指導の目あてをどこにおくか。

- (1) 間隔が0.9センチメートル（1センチメートル）のけい線の中で、字と字との間をつめて書くことができる。
- (2) よく書き慣れた短い文なら、見ながら1分間60字（50字）以上の速さで書くことができる。
- (3) 聴写することができる。
- (4) 自分の書いたローマ字文が、読みやすいかどうかを批判することができる。
- (5) 接頭語や接尾語を見分けて書くことができる。
- (6) 普通に使う略号を書くことができる。
- (7) 数詞と助数詞の書き方が正しくできる。
- (8) 地名の書き方が正しくできる。
- (9) つまる音を示す〔'〕（アポストロフ）が正しく使える。
- (10) 簡単な手紙・日記・プログラム・図表・説明書などを書くことができる。
- (11) アルファベット順を2字目または3字目（1字目）まで利用することができる。

2 どう指導したらよいか。

- (1) 書くことの指導の材料として適当なのは、日記や手紙などによく使われることば（普通に使われる略号を含む。）である。なお、一目見て読み取れることばは、何も見ないで速く書けるようにする。反対語や同意語を書かせることは、書く語いを増すのによい方法である。
- (2) 二つ以上の段落のある文が書けるように指導する。
- (3) 符号の使い方については、読むことの指導で理解させるほ

か、次の点を徹底させる。

(イ) 引用のしるし〔“ ”〕

このしるしの中に引用される文に〔. 〕〔, 〕〔? 〕〔! 〕
をつけることをあわせて指導し、また、それに関連して引用のしるしを使わないでもよい場合も、理解させる。

(ロ) つなぎ〔-〕 1語が2行にまたがる場合に使う。

(ハ) 問のしるし〔?〕 文脈と語の調子によって疑問の意味が現れる場合。

(ニ) 強めるしるし〔!〕 強く呼びかけたことの明らかな場合、感嘆の場合、命令の場合。

(ホ) かっこ〔()〕 簡単な説明のことばを入れる場合。

(ヘ) くぎり〔, 〕 同じ種類のことばを並べる場合。

3 どんな点に注意したらよいか。

(1) ノートに書く場合には、すべてローマ字で書かせるようにするがよい。

(2) 聴写をする場合には、何も見ないで、速く書けることばを多く含んだ短い文を書き取らせることから始めるようにする。

(3) 語尾の変化することばの変化形のうち、前の段階で学習しなかったものも書けるようにする。

(4) 文をつくるときには、その題を正しい位置に書き、本文は左右に余白をとって書く習慣をつけるようにする。

(5) 1語を2行に分けて書くときには、一定の書き方に従うようにする。

(6) よく使われる副詞や接続詞が、正しく書けるようにする。

三 さらに進んだ段階 (注) かつこの中の数字は、3年生からローマ字学習を始めた場合の6年生に対する基準を示す。

(一) 読むことの指導はどうしたらよいか。

1 指導の目あてをどこにおくか。

(1) はじめて読む文を、1分間80語(90語)以上の速さで読むことができる。

(2) 一目見て読み取れることばの数が、400語(550語)以上になる。(ただし活用形やその他の変化した形は含まない。)

(3) 符号の使い方がよくわかる。

(4) 単語集を使用することができる。

2 どう指導したらよいか。

(1) この段階では、別の段階で築いた、いろいろな内容の、さまざまな種類の文を読む力を伸ばし、比較的長くて、内容の豊かなものが読めるようにする。また文の長さや、その中でのことばの選び方とその配置、章や節の構成などに注意を向けさせるようにする。

(2) 新しい単語の指導は、固有名詞・学術用語、その他、特にむずかしいことばの場合に行う。指導を必要とすることばでも、単語集の使い方がわかってくれば、それを利用して読むようにしむける。教科書に単語集がついていない場合には、教師は適当な方法によってこれを補うがよい。

(二) 書くことの指導はどうしたらよいか。

1 指導の目あてをどこにおくか。

(1) よく書き慣れた短い文を、見ながら、1分間70字以上の速さで書くことができる。

(2) 接頭語・接尾語をつけたり、二つ以上のことばを組み合わせたりして、新しいことばをつくり、正しく分ち書きすることができる。

(3) いろいろな文を書くことができる。

(4) アルファベット順に配列することが完全にでき、またそれを使うことができる。

2 どう指導したらよいか。

この学年では、変化のある効果的な表現の指導に重点を置く。つくることでは、だらだらと長い文を書く傾向があるから、長いセンテンス、短いセンテンスの使い方、また、文の中のこと

ばの配置のしかた、その効果などを指導する。

- (1) 役所・会社・団体などの名まえで、簡単なものの分ち書きが正しく書けるようにする。
- (2) 話を聞いて、その要点や、筋書ができるようにする。
- (3) 簡単な記録や、会の規則などを書くことができるようにする。
- (4) 筋書をまず作り、それに従って段落を組み立てることができるようにする。
- (5) 符号の使い方については、この学年で指導すべきものは次のとおりである。

(イ) とめ〔.〕

年号の Tsy. (Taisyô) ; Syw. (Syôwa) などの略号のあとへつけるとめ。

(ロ) 強めるしるし〔!〕

(ハ) くぎり〔,〕

○ ba, to, tara (dara), nara を使って条件を表わす場合。

○ 動詞・形容詞・形容動詞の中止形や tari (dari), te(de) を使って、文をつなぐときに用いられる場合。

○ 接続詞のあとへつける場合。

○ 二つの修飾句が一つの名詞にかかるとき、その間に使う場合。

(ニ) 大きくぎり〔;〕

○ 多くの語を並べたとき、種類の変ったものに移る場合、特におのおのの句の中にくぎりが使っている場合。

(ホ) ふたつてん〔:〕

○ 説明を添える場合。

○ 文を引用するときなどに、「次のとおり」という意味で使う場合。

○ 戯曲で人物の名のあとにつける場合（地の文はかっこへ入れる場合が多い。）

第5節 ローマ字の学習指導における評価は どうしたらよいか

ローマ字の学習指導の評価については、一般国語学習指導の評価の方法を準用して、ローマ字の学習指導目標が達成されたかどうかを見きわめるとともに、特に、次の点について調べる。

一 初期の段階

- 1 ローマ字文を見て外国語だと思っていた児童が、ローマ字は国語の表記法の一つであるということを自覚するようになったか。
- 2 ローマ字文を積極的に読もうとする態度ができたか。
- 3 習った語いの範囲で、標準的語音をいっそう正しく発音することができるようになったか。
- 4 ローマ字文を読んだり、書いたりする速度が、だんだん速くなったか。

二 やや進んだ段階

- 1 いろいろな目的に応じ、自発的にローマ字の読み物を読み、また、日記・記録・報告書などの面にも、進んでローマ字を使う態度ができたか。
- 2 分ち書きをする習慣ができ、分ち書きについて、わからないところを進んで調べたり、質問したりするようになったか。
- 3 よう音やつまる音が正しく書けるようになったか。
- 4 ことばにはいろいろの種類のあることを、その形や働きから気づくようになったか。
- 5 ローマ字文を読んだり、書いたりする速度が、さらに、だんだん速くなったか。

三 さらに進んだ段階

- 1 ローマ字を書くとき、文の形式や符号の使い方、段落の展開などに進歩を示したか。
- 2 国語の構造や音韻に対して、新しい興味をもってきたか。

- 3 耳で聞いてよくわかることばで、すなおに表現する力が伸びたか。
- 4 生活の中にローマ字が自然に取り入れられ、使われる範囲が広がってきたか。
- 5 標準語で、ローマ字文を書くことができるようになったか。
- 6 ローマ字文を読んだり、書いたりする速度が速くなったか。

5 中 学 校 学 習 指 導 要 領 国 語 科 編 (試 案)

(昭和26年〔1951〕改訂版による。) (昭和26.10.1)
(原文は縦書)

第9章 中学校の国語科におけるローマ字の 学習指導

ま え が き

国語教育としてのローマ字教育は、従来の、中等教育ではほとんど行われていなかった。しかし、以前と比べてローマ字がわが国の現在および将来に対して持っている意義は、はなはだしく変ってきた。現在、社会一般にローマ字の使用が行きわたっているとは言えないが、将来その使用範囲はもっと広まっていくものと思われる。したがって、現在、学校教育の中で、ローマ字の学習指導を行うことは重要な意義を持っている。

ローマ字の基礎的能力は小学校で養われるから、中学校ではさらに進んで、その読み書きの能力を高め、日常生活に応用する範囲を広くし、そうして、国語・国字の問題についても関心を持たせるように指導すべきである。

この章は、これから国語教育の一環としてローマ字の学習指導を行おうとする人たちのために特に設けられたものである。

一 ローマ字学習の意義

ローマ字は表音文字であり、単音文字であるから、話しことばや書きことばに対する反省を強め、国語の音韻ならびに文法に関する生徒の自覚を高めることができる。また、ローマ字は書いたり、印刷したりするのに能率の高い文字組織であるから、ローマ字を多く用いる社会的習慣ができれば、社会生活の能率と一般国民の文化水

準を高めることができる。なお、ローマ字は、現在世界の多くの国がその国語を書き表わす文字として用いているから、国際間の理解・親善を深める上に役だつ。

二 ローマ字学習指導の地位

ローマ字の学習指導が国語の学習指導の中でどのような地位を占めるかを考えると、次のようになる。

- 1 生徒の精神発達の段階に応じ、国語を書き表わす一つ的手段としてローマ字を読み書きする能力を養い、あわせて国語・国字問題に対して反省する機会を与える。

- 2 ローマ字の長所を生かし、国語の機能とその特質を生徒に習得させ、聞いただけでわかることばを使う習慣を養う。

- 3 ローマ字が持っている国際的、能率的な長所を理解させる。

このように、ローマ字の学習指導を通じて国語力の充実をはかり、国語生活の改善に資することができるから、ローマ字の学習指導は国語学習指導の中で一つの重要な地位を占める。

三 ローマ字学習指導の一般目標

ローマ字の学習指導の一般目標として、次のことがあげられる。

- 1 ローマ字文を読みこなす力を養う。

- 2 自分の考えをローマ字文で書き表わす力を養う。

- 3 ローマ字書きのきまりを身につけて、正しく表記する力を養う。

- 4 気軽にローマ字を使う習慣と態度とを養う。

四 中学校の国語科におけるローマ字学習指導の目標

- 1 ローマ字文がよく読めるようになる。

- 2 正しくわかり書きをして、ローマ字文を自由に書く習慣をつ

ける。

- 3 ローマ字文に使われている符号の意味をいっそうよく理解して正確に使う力をつける。
- 4 国語の文法や音韻に関する知識を増す。

五 ローマ字学習指導の計画

(一) ローマ字学習指導の計画の立て方

ローマ字の学習指導の計画は、国語の学習指導の中で正しい地位を占めるべきであり、特にローマ字を読むこと、書くことに重点をおくのが妥当である。

生徒は日常生活でローマ字に触れる機会に乏しいから、ローマ字の教科書が学習指導のおもな資料になる傾向がある。したがって、計画はできるだけ他の資料も取り入れて生徒が興味を持って学習できるようにしなければならない。

(二) ローマ字学習指導計画を立てる上の一般的注意

- 1 特別教育活動や他教科、たとえば、社会科、職業・家庭科、理科などに関連して、ローマ字学習の機会を与えることが望ましい。
- 2 ローマ字文の読み書きを指導するには、その内容について、話したり、聞いたりすることもなされなければならないから、そうした面もじゅうぶん考慮しなければならない。
- 3 小学校でローマ字学習がふじゅうぶんであった生徒に対しては、適当な指導計画を考える必要がある。

六 読むことの学習指導

ローマ字の学習指導は、ローマ字教育が国語教育の一環として行われるかぎり、国語科の学習指導の原則によるべきものである。したがって、ローマ字文を読むことの学習指導も、話すこと、聞くこ

と、書くことなどとの有機的なつながりの中で、行われなければならない。特に、ローマ字は、その簡単な文字組織さえ知っていれば、どんな文でも読むことができるから、読み方の学習指導には重要な使命がある。

- 1 調査・研究のための読書、教養・娯楽のための読書の場合にも、ローマ字文の資料の利用ができ、しかも、漢字の負担がないから、やや高い程度の内容のものでも読むことができる。
- 2 読むことの技術としてはいろいろあるが、ローマ字学習においては、すらすらと読めるようになることがたいせつである。すらすらと読むことによって、多くのものを読み、理解を深め、正確に批判し、思想を向上させていくことができる。ローマ字文の読みの速さを増すには、一目見て語形で意味のとれることばの数をだんだん多くし、また、瞬間に読みとる範囲を広げていく。

内容のわかりやすい文をはじめて読む場合には、1分間150語以上の速さで容易に読めるように指導する。

- 3 読解力を高めるために、特に注意すべきことは次のようである。
 - (1) ローマ字文には独得の符号の使い方がある。この符号を理解することによって、内容を速くたやすく読みうる能力を高めるようにする。
 - (2) ローマ字文では漢字を媒介とすることなく、音を聞いてすぐにその意味がとれることが必要である。特に抽象的な語を理解するには、それがどんな場合に使われているか、何をさしているかをじゅうぶんに理解する必要がある。
 - (3) 文の基本的構成、修飾的語句の位置、句の接続関係をはっきり理解するようにする。

七 書くことの学習指導

書くことについては、小学校で習得した技術をさらに進歩させ、日常生活でローマ字を効果的に使用できるようにすべきである。

1 中学校における書く技術の学習指導は、いっそう読みやすい文字を書くこと、いっそう速く書くこと、正しくわかり書きをすること、複雑な符号をも使いこなすことに重点が置かれるべきである。

(1) 語のつづりにいちいちこだわらないで、すらすらと書けるようにする。

(2) わかり書きの指導では、多くの具体的な例からその規則を理解し、正しく適用できるようにする。

(3) 符号の使い方については、小学校で習った符号のいっそう複雑な使い方のほか、

ぼう (——) 点線 (……) アンダーライン (____)

などの使い方を学習させる。

(4) 書く字体は中学校でもマヌスクリプト体で書くのがよい。

2 作文の内容と技術の学習指導に関しては、ローマ字で報告を出す、ノートを取る、読んだ本を紹介する。標語・プログラム、図書館の分類目録、図表・掲示などをローマ字で書く。いろいろな日記、実用的な手紙、詩・脚本・物語などをローマ字で書くなど、いろいろな活動の場が予想される。

3 書く内容と形式が進歩するに従い、耳慣れない漢語や同音異義語、ことさらに飾った言いまわしなどの使用を避け、聞いただけでわかる、発音しやすいことばを使うように指導すべきである。

八 ローマ字学習指導の評価

ローマ字学習指導の評価は、国語教育の評価の方法を使用して、ローマ字学習指導の目標が達成されたかどうかを見きわめるべきであり、次のような点について、特に注意することが望ましい。

- 1 日常生活でローマ字を使う範囲は、どれだけ広がってきたか。
- 2 話しことばと書きことばのへだたりをできるだけ少なくし、自分の考えをいっそうわかりやすいことばで発表しようとする習慣ができたか。
- 3 国語のきまりや性質に興味を持って学習する態度ができてきたか。
- 4 国語を自分たちのものとして愛し、よりよくしていこうという心構えを養うのに、ローマ字の学習はどれだけ役だったか。
- 5 文化と言語・文字との関係や国語・国字の問題について反省する態度ができてきたか。

6 教科用図書検定基準

文部省告示第88号 (昭和27.10.30)
文部省告示第88号改正 (昭和28.11.13)
(原文は縦書)

第1章 国語科の検定基準

第7節 小学校・中学校国語科ローマ字の検定基準

一 絶対条件

(一) わが国の教育の目的と一致しているか。

教育基本法および学校教育法の目的と一致し、これに反するものはないか。たとえば、平和の精神、真理と正義の尊重、個人の価値の尊重、勤労と責任の重視、自主的精神の養成などの教育目的と一致し、これに反するものはないか。

(二) 立場は公正であるか。

1 政治や宗教について、特定の政党や特定の宗派にかたよった思想・題材をとり、また、これによって、その主義や信条を宣伝したり、あるいは非難したりしているようなところはないか。

2 ローマ字に関する主義的偏見をおしつけてはいないか。

(三) 小学校・中学校国語科ローマ字の指導目標と一致しているか。

1 学習指導要領国語科編ならびに「改訂ローマ字教育の指針」に示された目標と一致しているか。

2 国語の音韻についての自覚を高め、国語の構造ならびに機能上の特質についての理解を深め、国語教育の徹底充実に資することができるものであるか。

3 文字組織のやさしさから、多くの内容を利得することができるように配慮されているか。

4 読書のしかた、表現のしかた、記録通信のしかた、日常生活に必要な事務上の書類の取扱方など、言語技術の習得に対して

配慮されているか。

英語教育の前提として編修されているようなことはないか。

二 必要条件

(一) 内容

1 教材は、現行の教育課程に示されたところに基いているか。

学習指導要領国語科編および「改訂ローマ字教育の指針」に示されたところと合致しているか。特に、初年度においては読み書きに習熟させることに、第2年度以後においては意味をつかむことに重点がおかれているか。

2 内容は、正確であるか。また、著（編）者以外から採用した場合は、典拠が明示してあるか。

3 内容は、現代の進歩に応じているか。

(二) 児童・生徒の発達

1 児童・生徒の発達に適応しているか。

(1) 児童・生徒の国語意識の発達に即して編修されているか。

(2) 児童・生徒の生活・経験・興味に適応しているか。

2 児童・生徒の個人差に応ずる幅があるか。

(1) 知能の個人差に応ずる幅をもっているか。

(2) 興味の個人差に応ずる幅をもっているか。

(三) 組織・配列

1 配列が適切であるか。

(1) ローマ字による国語のあらゆる場合の表記法を自然に順を追って提出し、無理なく学習できるように配慮されているか。

(2) 国語として意味の伴う形態をなしている語または文章によって、はあくができるように配慮されているか。

(3) 国語の形態における児童・生徒の国語意識の発展段階を考慮して配列してあるか。

(4) 児童・生徒の発達に適した配列であるか。

(5) 指導に便利な配列であるか。

- (6) 重点を考慮した配列であるか。
- (7) 特に初年度用教科書については、
 - (イ) 国語を書き表わすに必要な字母が，20時間までにひととおり提出されているか。
 - (ロ) 音の表わし方を漏れなく学習できるように配慮されているか。
 - (ハ) 語の提出，特に「くり返し」について配慮されているか。
 - (ニ) ひん度数の多い単語および次の年度以後の学習の基礎となる語の提出が考慮されているか。
 - (ホ) 初期に提出された語は，少なくとも4，5回以上くり返して使われているか。
 - (ヘ) 印刷体・マヌスクリプト体の読み書きに重点がおかれているか。
 - (ト) まず，文章からはいり，適当な時期に音節に分解する指導法をとるに適した配列であるか。
- 2 国語科および他教科との関連がよく考えられているか。
 - (1) 特に漢字まじりの文「国語」との関連が考慮されているか。
 - (2) 特に，「英語」との相違が意識されているか。
- 3 分量が適切であるか。
 - (1) 分量が児童・生徒の発達に適応しているか。
 - (2) ローマ字教育実施要項による指導時間量（40時間以上）を基準としているか。
 - (3) 指導時間の弾力性に応じうるか。
- 4 区分が適切であるか。
 - (1) 章・節・項に分けた場合は，その分け方が適切であるか。
 - (2) 章・節・項の区分・目的が明確であるか。
 - (3) 各分節間に統一があり，連絡がとれているか。
- 5 さし絵・写真・図表などが適切に用意されているか。
 - (1) さし絵・図表は，必要数をもっているか。

- (2) 初年級では、特にさし絵による直接指導が可能であるように編修されているか。
 - (3) さし絵・図表などは、鮮明であり、美しいか。また、これらの原拠が示してあるか。
 - (4) 児童・生徒の興味に合ったものであるか。
 - (5) さし絵・図表などは正確であるか。
- 6 有効に使用できるようにくふうされているか。
- (1) 主要な題材の位置がよくわかるようにしてあるか。
 - (2) 既習事項との連絡が考えられているか。
 - (3) 刺激と暗示とによる自発活動への誘発・発展があるか。
 - (4) 目的に到達するような誘導があるか。
 - (5) 自学自習に便利であるか。
 - (6) 有益な練習問題，発展的な学習への問題をもっているか。
 - (7) 共学に対する配慮がなされているか。
 - (8) 印刷体・マヌスクリプト体に重点をおき，つづき字体の学習にも考慮が払われているか。
 - (9) 単語集・用語表などが適切に用意されているか。
 - (10) つづり方の第1表，第2表（別表参照。）が示されているか。
- 7 地域の差に応ずる幅があるか。
- (1) 地域の特殊性（気候・風土・自然現象など。）に応ずる弾力性をもっているか。
 - (2) 都会的なものにかたよっていないか。
 - (3) ローマ字を見る機会の少ない地域でも指導できるように考慮されているか。
 - (4) 児童・生徒の生活の地域的な特質に応ずる幅があるか。
 - (5) 児童・生徒の興味の地域的な特質に応ずる幅があるか。
- 8 学校の設備の差に応ずる幅があるか。
- (1) 設備の有無にかかわらず使用できるか。
 - (2) 土地の状況や校外の自然や施設を用いうるよう考慮され

ているか。

(四) 表 現

1 表現が適切であるか。

- (1) 漢字まじり文で書かれた文をそのままローマ字書きにしているようなことはないか。
- (2) 同音異義語や耳慣れない漢語をみだりに使わず，国語の純化に対する配慮がしてあるか。
- (3) 努めて標準語または標準語的発音と語法を用いようとしているか。
- (4) 文の長さや構造が児童・生徒の発達に適應しているか。
- (5) 文の構造が一つあるいは二，三にかたよってはいないか。
次の年度からの読み書きの基礎をつくりうるものであるか。
- (6) 文章は簡明であるか。
- (7) ことばは具体的で生き生きしているか。

2 漢字・かなづかい・ローマ字つづりが適切であるか。

- (1) 漢字・かなを仲介とせず，ローマ字だけを用いてあるか。
- (2) 日本語を書き表わすのに必要な字母がひとつとおり提出されているか。
- (3) ローマ字つづりは，別表のつづり方のうち，第1表に掲げるもの（そえがきを含む。）を用いているか。
- (4) 第2表に掲げるつづり方のローマ字文の読み方も，適当な時期において習得することができるよう配慮されているか。
- (5) ローマ字文のわかち書き，符号の使い方は，おおむねローマ字教育実施要項の「ローマ字文の書き方」に準拠したものであるか。（わかち書きが「ローマ字文の書き方」の示すところと違う場合は，その理論的根拠を別冊として添付すること。）
- (6) わかち書き，符号の使い方の学習に漏れはないか。その提出順序が考慮されているか。
- (7) 奥付その他に漢字・かなを使用する際は，当用漢字表・同

別表・同音訓表・現代かなづかいによっているか。

- (8) 印刷体・マヌスクリプト体・つづけ字体の三者に考慮が払われているか。

(五) その他

- 1 文字の大きさ・字間・行間が適切であるか。

(1) 学年に応じて適当な活字を用いているか。

(2) 行間は適切であるか。

(3) わかち書きの間隔は適切であるか。

(4) 符号の形・大きさは適切であるか。

別 表

ローマ字のつづり方

国語のローマ字つづり方は第1表による。但し、第2表のつづりを用いてもよい。

第 1 表

〔(は重出を示す。)]

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dyu
kwa			dyo
gwa			
			wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上にへをつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお、固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

7 国語審議会 国語問題要領（ぬきがき）

（昭和 25 年 6 月）

ま え が き

昭和 24 年 6 月、文部省設置法に基いて新しく設置された国語審議会は、文部大臣の諮問に応ずることを主とした従来の国語審議会とは異なり、民主的・自主的に国語政策の立案審議を進めることになった。そこで、具体的な諸問題に着手するにあたって、新しい国語審議会の性格と方針を明確にするとともに、国語の現状と国語における問題となるべき点がどこにあるかを客観的に見わたす必要を痛感したので、国語白書作成の部会を設けて、その原案を作成した。この部会の成案は「国語問題要領」として、25 年 6 月 12 日第 7 回総会で正式に議決され、文部大臣に報告された。（以下省略）

1 国語審議会の性格と任務 （省 略）

2 国語の現状の分析

わが国は古来、諸外国の文化を摂取してきたが、それに伴って、日本語とは系統のちがった言語・文字に接する機会が多かった。そして古くは中国、近くはヨーロッパ・アメリカなどの言語・文字を採り入れた結果、ついに今日の複雑多様な国語が形成された。こうして国語問題は、わが国の文化政策としてどうしても避けることのできない重大な問題になってきたのである。

- (1) 国語を用いるもの
 - ⋮
 - (5) 語法および文体
 - (6) 表 記 法
- } （省略）

国語の表記法はきわめて複雑である。

- (イ)
 - (ロ)
 - (ハ)
- } （省略）

(ニ) ローマ字は、外国語表記のため、しばしば漢字かなまじり文の中に混用され、また駅名の標示や看板などにも用いられるが、一方、国語表記の方法としてローマ字だけを採用しているものもあり、義務教育期間中にはローマ字の学習や、ローマ字による教科指導も行われている。いま、一般に通用しているローマ字のつづりかたにも、いわゆる訓令式・日本式・標準式の3種がある。

(ホ) } (省略)
(ヘ) }

3 国語問題の歴史的展望

(1) 国字改良の意見とその実行

近代になって国字改良のために発表された意見としては、慶応2年(1866)に前島密^{ひそか}が建白した漢字御廃止^の之儀が最初であり、これが動機となってローマ字論やかな専用論が現れ、明治16年(1883)にはかなのくわいが作られた。……(中略)……

ローマ字採用の意見は、明治2年(1869)南部義籌^{よしかず}の修国語論の主張に始まり、17年(1884)には羅馬字会^{ローマ}が作られ、後にローマ字ひろめ会(明治38年、1905——)と日本ローマ字会(大正10年、1921——)とが設けられた。……(下略)。

(2) 国語政策の実施

(前略) ローマ字についても、政府は、教育上・学術上または国際関係上、そのつづり方統一の必要を認め、早く昭和5年(1930)に臨時ローマ字調査会を設けてその審議に着手し、昭和12年(1937)内閣訓令としてその方式を発表した。

(3) 口語文と話しことば(省略)

4 国語に関する諸機関

(前略)文部省調査普及局国語課は、……また公用文の改善、ローマ字およびローマ字教育に関することがらを取り扱い、かねて……。

5 国語問題審議の基準 (省略)

§3 会 議

1 臨時ローマ字調査会

(昭5.11.25～昭11.6.30)

○官制 (昭5.11.25)

勅令第222号

(原文は縦書)

臨時ローマ字調査会官制

第1条 臨時ローマ字調査会ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ国語ノローマ字綴方ニ関スル事項ヲ調査ス

第2条 調査会ハ会長1人及委員35人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
前項定員ノ外必要アル場合ニ於テハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第3条 会長ハ文部大臣ヲ以テ之ニ充ツ

委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第4条 会長ハ会務ヲ総理ス

会長事故アル時ハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第5条 会長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第6条 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ調査会ノ請求アルトキハ適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第7条 調査会ノ議事ニ関スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第8条 調査会ニ幹事長1人及幹事若干人ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事長ハ会長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ掌理ス

幹事ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第9条 調査会ニ書記若干人ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○官制廃止（昭 11. 6. 30）

勅令第 144 号

（原文は従書）

臨時ローマ字調査会官制ハ之ヲ廃止ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○議事規則（文部省令 昭 5. 12. 16）

臨時ローマ字調査会議事規則（原文は縦書）

第 1 条 会議ハ会長之ヲ招集ス

第 2 条 会長ハ会議ノ議長ト為リ議事ヲ整理ス

第 3 条 会議ハ会長、委員及臨時委員ヲ合セ其半数以上出席スルニ
アラサレハ之ヲ開クコトヲ得ス

第 4 条 議席ハ予メ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第 5 条 会議ハ公開セス

第 6 条 発言セントスル者ハ議長ノ許可ヲ受クヘシ

第 7 条 議事ハ出席ノ委員及臨時委員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

会長可否ノ數ニ加ハリタルトキハ之ヲ出席委員ト看做ス

可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス

第 8 条 会長必要ト認ムルトキハ委員及臨時委員ノ中ヨリ主査委員
ヲ選定シ審査ヲ為サシムルコトヲ得

主査委員ハ其互選ニ依リ委員長ヲ置ク

主査委員長ハ審査ノ経過及結果ヲ會議ニ報告スヘシ

主査委員會ニハ本則ノ規定ヲ準用ス

○會議の開会

・総 会

第1回(昭5.12.15)～第14回(昭11.6.26)

・主査委員会

第1次主査委員会

第1回(昭9.3.6)～第12回(昭9.7.14)

第2次主査委員会

第1回(昭10.5.10)～第10回(昭10.7.23)

第3次主査委員会

第1回(昭11.1.17)～第3回(昭11.1.31)

臨時ロ一マ字調査会委員名簿(昭5.11.26現在)

委 員

鈴木富士彌	内閣書記官長	藤岡 勝二	東京帝国大学 教授
川崎 卓吉	法制局長官	長屋 順耳	東京外国語学 校長
吉田 茂	外務次官	岡田 武松	気象台技師
潮 恵之輔	内務次官	松村真一郎	農林次官
河田 烈	大蔵次官	田島勝太郎	商工次官
杉山 元	陸軍次官	今井田清徳	逓信次官
石井 英橘	陸軍少将	青木 周三	鉄道次官
小林 躋造	海軍次官	久保田敬一	鉄道省運輸局長
米村 末喜	海軍中将	侯爵 小村 欣一	拓務次官
小原 直	司法次官	桜井 錠二	正三位勳一等
野村 嘉六	文部政務次官	鎌田 栄吉	従三位勳一等
中川 健蔵	文部次官	男爵 阪谷 芳郎	正三位勳一等
大麻 唯男	文部参与官	田中館愛橘	正三位勳一等
篠原英太郎	文部省普通学務局長	嘉納治五郎	〃
芝田 徹心	文部省図書局長	上田 万年	〃

田丸 卓郎 従三位勳二等 中目 覺 正四位勳三等
 伯爵 林 博太郎 正三位勳二等 福永 恭助 正六位勳四等功五級

幹事長

芝田 徹心 文部省図書局長

幹事

森山 鋭一 法制局参事官 山崎 厚二 文部省図書事務官

菊沢 季麿 文部書記官 保科 孝一 東京文理科大学教授

臨時ローマ字調査会在任（職）年月日

（年号はすべて昭和である。）

会 長

5.11.26 ~ 6.12.13	田 中 隆 三	文部大臣
6.12.13 ~ 9. 3. 3	鳩 山 一 郎	〃
9. 3. 3 ~ 9. 7. 8	子爵 斎 藤 実	〃
9. 7. 8 ~ 11. 2. 1	松 田 源 治	〃
11. 2. 2 ~ 11. 3. 9	川 崎 卓 吉	〃
11. 3. 9 ~ 11. 3.25	潮 恵 之 助	〃
11. 3.25 ~ 11. 6.30	平 生 鈇三郎	〃

委 員

5.11.26 ~ 6. 4.14	鈴 木 富士彌	内閣書記官長
6. 5. 5 ~ 6.12.13	川 崎 卓 吉	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.26	森 恪	〃
7. 6.18 ~ 8. 3.13	柴 田 善三郎	〃
8. 5. 6 ~ 9. 7. 8	堀 切 善次郎	〃
9. 7.31 ~ 9.10.20	河 田 烈	〃
9.11.10 ~ 10. 5.11	吉 田 茂	〃
10. 6.11 ~ 11. 3.10	白 根 竹 介	〃

11. 4.30 ~ 11. 6.30	藤 沼 庄 平	内閣書記官長
5.11.26 ~ 6. 4.14	川 崎 卓 吉	法制局長官
6. 5. 5 ~ 6.11. 9	武 内 作 平	〃
6.11.25 ~ 6.12.13	斉 藤 隆 夫	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.26	島 田 俊 雄	〃
7. 6.18 ~ 8. 3.13	堀 切 善次郎	〃
8. 5. 6 ~ 9. 7. 8	黒 崎 定 三	〃
9. 7.31 ~ 11. 1.11	金 森 徳次郎	〃
11. 1.16 ~ 11. 3.10	大 橋 八 郎	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	次 田 大三郎	〃
5.11.26 ~ 5.12. 6	吉 田 茂	外務次官
5.12.15 ~ 7. 5.10	永 井 松 三	〃
7. 6.18 ~ 8. 5.16	有 田 八 郎	〃
8. 7.10 ~ 11. 4.10	重 光 葵	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	堀 内 謙 介	〃
5.11.26 ~ 6. 8. 8	潮 恵之輔	内務次官
6. 9.12 ~ 6.12.14	次 田 大三郎	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.27	河原田 稼 吉	〃
7. 6.18 ~ 9. 7.10	潮 恵之輔	〃
9. 7.31 ~ 10. 6.28	丹 羽 七 郎	〃
10. 7.12 ~ 11. 3.13	赤 木 朝 治	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	湯 沢 三千男	〃
5.11.26 ~ 6.12.14	河 田 烈	大蔵次官
7. 2.10 ~ 9. 5.19	黒 田 英 雄	〃
9. 6.16 ~ 9. 7. 8	藤 井 真 信	〃
9. 7.31 ~ 11. 3.13	津 島 寿 一	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	川 越 丈 雄	〃
5.11.26 ~ 7. 2.29	杉 山 元	陸軍次官
7. 3.19 ~ 7. 8. 8	小 磯 国 昭	〃

7. 9.21 ~ 9. 8. 1	柳 川 平 助	陸軍次官
9. 8.23 ~ 10. 9.21	橋 本 虎之助	〃
10.10.11 ~ 11. 3.23	古 莊 幹 郎	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	梅 津 美治郎	〃
5.11.26 ~ 7.12.28	石 井 英 橘	陸軍中將
7.12.28 ~ 11. 5.20	鈴 木 元 長	〃
11. 5.20 ~ 11. 6.30	柴 原 四 郎	陸軍少將
5.11.26 ~ 6.12. 1	小 林 躋 造	海軍次官
6.12.24 ~ 7. 6. 1	左近司 政 三	〃
7. 6.18 ~ 9. 5.10	藤 田 尙 德	〃
9. 5.24 ~ 11. 6.30	長谷川 清	〃
5.11.26 ~ 5.12.10	米 村 末 喜	海軍中將
5.12.10 ~ 7.12.24	植 村 茂 夫	〃
7.12.24 ~ 10.12. 4	小 野 彌 一	〃
10.12. 4 ~ 11. 6.30	大田垣 富三郎	海軍少將
5.11.26 ~ 6.12.21	小 原 直	司法次官
7. 2.10 ~ 9. 7.14	皆 川 治 広	〃
9. 7.31 ~ 10. 5.13	金 山 季 逸	〃
10. 5.22 ~ 11. 6.30	長 島 毅	〃
5.11.26 ~ 6. 4.15	野 村 嘉 六	文部政務次官
6. 4.28 ~ 6.12.15	横 山 金太郎	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.27	安 藤 正 純	〃
7. 6.18 ~ 9. 7.19	東 郷 実	〃
9. 7.31 ~ 11. 3.21	添 田 敬一郎	〃
11. 4.30 ~ 12. 6.30	山 本 厚 三	〃
5.11.26 ~ 6.12.17	中 川 健 蔵	文部次官
7. 2.10 ~ 9. 8.11	栗 屋 謙	〃
9. 8.31 ~ 11. 6. 9	三 辺 長 治	〃
11. 6.11 ~ 11. 6.30	河 原 春 作	〃

5.11.26 ~ 6. 4.15	大 麻 唯 男	文部参与官
6. 4.28 ~ 6.12.15	工 藤 鉄 男	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.27	山 下 谷 次	〃
7. 6.18 ~ 9. 7.19	石 坂 豊 一	〃
9. 7.31 ~ 11. 3.25	山 榊 儀 重	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	作 田 高太郎	〃
5.11.26 ~ 6.12.17	篠 原 英太郎	文部省普通学務 局長
7. 2.10 ~ 9. 6. 8	武 部 欽 一	〃
9. 6.23 ~ 10. 4. 2	下 村 寿 一	〃
10. 4.19 ~ 11. 6. 9	河 原 春 作	〃
11. 6.11 ~ 11. 6.30	菊 池 豊三郎	〃
5.11.26 ~ 11. 6.30	芝 田 徹 心	文部省図書館長
5.11.26 ~ 8. 3.31	藤 岡 勝 二	東京帝国大学教 授
5.11.26 ~ 7. 8. 4	長 屋 順 耳	東京外国語学校長
7. 9.21 ~ 11. 6.30	戸 沢 正 保	〃
5.11.26 ~ 11. 6.30	岡 田 武 松	気象台技師
5.11.26 ~ 6.12.14	松 村 真一郎	農林次官
7. 2.10 ~ 9. 7.10	石 黒 忠 篤	〃
9. 7.31 ~ 11. 6.30	長 瀬 貞 一	〃
5.11.26 ~ 6.12.21	田 島 勝太郎	商工次官
7. 2.10 ~ 11. 6.30	吉 野 信 次	〃
5.11.26 ~ 6. 6.19	今井田 清 徳	逓信次官
6. 6.27 ~ 11. 1.11	大 橋 八 郎	〃
11. 1.16 ~ 11. 6.30	富 安 謙 次	〃
5.11.26 ~ 6. 9.12	青 木 周 三	鉄道次官
6.10. 5 ~ 9. 8. 4	久保田 敬 一	〃
9. 8.23 ~ 11. 6.30	喜 安 健次郎	〃
5.11.26 ~ 6. 6.12	久保田 敬 一	鉄道省運輸局長
6.10. 5 ~ 7. 1.20	中 山 隆 吉	〃

7. 2.10 ~ 9. 6. 1		日 淺	寬	鐵道省運輸局長
9. 6.16 ~ 9. 8. 4		前 田	穰	〃
9. 8.23 ~ 11. 6.30		新 井	堯 爾	〃
5.11.26 ~ 5.12.29	侯爵	小 村	欣 一	拓務次官
6. 1.12 ~ 7. 5.26		堀 切	善次郎	〃
7. 6.18 ~ 9. 7. 8		河 田	烈	〃
9. 7.31 ~ 10. 1. 9		坪 上	貞 二	〃
10. 1.12 ~ 11. 6.30		入 江	海 平	〃
5.11.26 ~ 11. 6.30		桜 井	錠 二	從二位勳一等
5.11.28 ~ 9. 2. 6		鎌 田	栄 吉	從三位勳一等
5.11.26 ~ 11. 6.30	男爵	阪 谷	芳 郎	正三位勳一等
〃		田中館	愛 橘	〃
〃		嘉 納	治五郎	〃
〃		上 田	万 年	〃
5.11.26 ~ 7. 9.22		田 丸	卓 郎	從三位勳二等
5.11.26 ~ 11. 6.30	伯爵	林 博	太 郎	正三位勳一等
〃		中 目	寛	從三位勳二等
〃		福 永	恭 助	正六位勳四等功 五級
7.11.21 ~ 11. 6.30		佐 伯	功 介	從五位
9. 2. 3 ~ 11. 6.30		新 村	出	京都帝国大学教授
〃		岡 倉	由三郎	正四位勳三等
9. 6.30 ~ 11. 6.30		門 野	幾之進	勳四等

臨時委員

6. 4.10 ~ 11. 6.30	伯爵	二 荒	芳 德	從三位勳三等
〃		神 保	格	正四位勳三等
6. 4.10 ~ 11. 6.23		末 弘	巖太郎	從四位勳三等
6. 4.10 ~ 11. 6.30		桜 根	孝之進	從四位勳四等
〃		宮 崎	静 二	正七位
〃		菊 沢	季 生	

11. 6.11 ~ 11. 6.30

11. 6.23 ~ 11. 6.30

幹事長

5.11.26 ~ 11. 6.30

幹事

5.11.26 ~ 11. 6.30

5.11.26 ~ 9. 6. 8

5.11.26 ~ 7.10.15

7.10.31 ~ 11. 6.30

5.11.26 ~ 11. 6.30

書記

5.11.26 ~ 11. 6.30

//

//

//

第1次主査委員会

委員長 栗屋 謙

委員 芝田 徹心

宮崎 静二

幹事 岡倉由三郎

書記 水平 勳

第2次主査委員会

委員長 三辺 長治

委員 芝田 徹心

佐伯 功介

菊沢 季生

幹事 谷原 義一

書記 水平 勳

第3次主査委員会

松村 真一郎 正三位勳二等

世良 琢磨 従五位

芝田 徹心 文部省図書局長

森山 鋭一 法制局参事官

菊沢 季磨 文部書記官

山崎 犀二 文部省図書事務官

谷原 義一 文部書記官

保科 孝一 東京文理科大学教授

阿部 隆介 文部属

堀 泰 //

水 平 勳 //

湯沢 幸吉郎

佐伯 功介

神保 格

菊沢 季生

新村 出

谷原 義一

保科 孝一

新村 出

岡倉由三郎

神保 格

宮崎 静二

保科 孝一

委員長
委員

林 博太郎

大橋 八郎

新村 出

中目 覺

幹事長
幹事
書記

芝田 徹心

森山 銳一

水平 勳

添田敬一郎

戸沢 正保

岡倉由三郎

谷原 義一

三辺 長治

吉野 信次

保科 孝一

2 ローマ字調査会

(昭 23.10.12 ~ 昭 24.5.31)

○規程 (昭 23.10.12 大臣裁定)

ローマ字調査会規程 (原文は縦書)

第1条 ローマ字調査会は、文部大臣の所轄とし、ローマ字による国語の書き表わし方に関する事項を調査審議する。

調査会は、前項の調査審議の結果を文部大臣に報告し、及び文部大臣の諮問した事項について答申するものとする。

第2条 調査会は、委員 40 人以内で組織する。

特別の事項を調査審議するため、必要があるときは、臨時委員を置くことができる。

第3条 委員は、政治、学術、教育、文化、実業、勤労等の各界における学識経験のある者の中から、文部大臣が命じ、又は委嘱する。

臨時委員は、学識経験のある者の中から調査会の承認を得て、文部大臣が命じ又は委嘱する。

第4条 臨時委員は、特別の事項の調査審議が終ったときは、退任するものとする。

第5条 調査会に、委員の互選による委員長及び副委員長各 1 人を置く。委員長及び副委員長の任期は、1 年とする。

第6条 調査会に専門の事項を調査させるために専門調査員を置くことができる。

専門調査員は学識、経験のある者の中から調査会の承認を得て、文部大臣が命じ又は委嘱する。

第7条 委員長は、会務を総理する。

副委員長は、委員長を補佐し、委員長が欠けたとき、又は委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

第8条 調査会は、文部大臣に対し、文部大臣又は文部部内職員が調査会に出席して説明することを求めることができる。

文部大臣及び文部部内職員は、調査会に出席して意見を述べる
ことができる。

第9条 調査会の会議は原則として、公開する。

第10条 調査会には必要がある場合には、一般の意見を聞くために、
公聴会を開く。

第11条 調査会に幹事を置く。

幹事は、関係各官庁の官吏の中から、文部大臣が命じ又は委嘱
する。

幹事は、委員長の指揮を受けて庶務を整理する。

第12条 調査会に書記を置く。

書記は関係各官庁の官吏の中から、文部大臣が命じ又は委嘱す
る。

書記は、委員長及び幹事の指揮を受けて、庶務に従事する。

○議事規則

ローマ字調査会議事規則（原文は縦書）

第1条 会議は、委員長が招集する。

第2条 委員長は、会議の議長となり、議事を整理する。

第3条 委員長は、調査会にはかり質疑、討論その他の発言につい
て時間を制限することができる。

第4条 会議は、委員長委員及び臨時委員を合わせて、その半数以
上が出席しなければ開くことができない。但し、あらかじめ特に
議決を経たときはこの限りでない。

第5条 議席は、「あいうえお」順とする。

第6条 発言しようとするものは、議長の許可を受けなければな

らない。

第7条 議事は、出席の委員及び臨時委員の過半数で決定する。

可否同数のときは、議長が決定する。

第8条 採決は、挙手又は、起立によって決定する。但し、議決によって記名投票又は無記名投票によることができる。

第9条 調査会に、必要があるときは、主査委員会を設けることができる。

主査委員会は、委員及び臨時委員の中から、委員長が会議にはかって指名する。

第10条 主査委員は、互選によって主査委員長を設ける。

主査委員長は、審査の経過及び結果を会議に報告しなければならない。

主査委員会の議事についてはこの規則を準用する。

第11条 専門調査員は、総会、又は、主査委員会に出席して、その担当の事項について意見を述べることができる。

第12条 この規則に定めてない事項については、会議にはかって委員長が定める。

○会議の開会

・総 会

第1回（昭和23.11.9）～第2回（昭和23.11.17）

・主査委員会

・ つづり方に関する主査委員会

第1回（昭和23.12.1）～第7回（昭和24.5.6）

・ ローマ字教育に関する主査委員会

第1回（昭和23.12.3）～第10回（昭和24.5.27）

ローマ字調査会委員名簿

(昭和 23.12.2 現在)

委員長	山崎匡輔	東京都教育委員
副委員長	宮沢俊義	東京大学教授
委員	秋岡悟郎	日本図書館協会理事
	安藤正次	学術研究会議国語国字問題研究班 班長
	池田義信	日本映画連合会事務局長
	石黒修治	国語協会理事
	井手成三	文部次官
	井上達二	井上眼科病院長
	宇田道夫	日本放送協会編成局演出部長
	大塚明郎	元京城帝国大学理学部長
	香月善次	日本交通公社教習所長
	亀井孝	東京商科大学予科教授
	河合一雄	日本タイムズ社主筆兼編集総長
	金田一京助	日本学士院会員
	桑原信	国際文化振興会翻訳課長
	紺野四郎	時事新報社副主筆
	式田次雄	東京都立第五女子高等学校教官
	田口泖三郎	科学研究所所員
	千葉勉	元東京外国語学校教授
	千葉雄次郎	中京新聞社社長兼主筆
	友井楨	日本キリスト教団総主事教師部長
	長沼直兄	言語文化研究所理事長
	萩原忠三	共同通信社編修総務
	服部四郎	東京大学助教授
	花島克巳	日本出版協会海外課長

幹 事	平 井 昌 夫	成城高等学校講師
	古 垣 鉄 郎	日本放送協会専務理事
	前 田 静 夫	渋谷区立広尾小学校教官
	松 坂 忠 則	カナモジカイ常務理事
	村 岡 花 子	文部省社会教育局調査員
	物 部 長 興	日本民主主義文化連盟教育部長
	吉 阪 俊 蔵	東京商工会議所専務理事
	吉 田 甲子太郎	新潮社「銀河」編修長
	吉 野 源三郎	岩波書店「世界」編修長
	北 岡 健 二	文部省学校教育局中等教育課長
	坂 元 彦太郎	// // 初等教育課長
	青 木 誠四郎	// 教科書局教材研究課長
	釘 本 久 春	// // 国語課長
	細 井 房 夫	文部事務官
	松 尾 拾	//
書 記	高 木 博	文部事務官
	天 沼 寧	//
	福 田 安 男	//

ローマ字調査会 つづり方に関する主査委員会委員名簿

(昭和 23.12.2 現在)

主査委員長	安藤 正次		
副主査委員長	服部 四郎		
主査委員	宇田 道夫	大塚 明郎	桑原 信
	田口 泖三郎	千葉 勉	長沼 直兄
	平井 昌夫	吉阪 俊蔵	

ローマ字調査会 ローマ字教育に関する主査委員会委員名簿

(昭和 23.12.2 現在)

主査委員長	長沼 直兄		
副主査委員長	前田 静夫		
主査委員	安藤 正次	石黒 修治	井上 達二
	式田 次雄	村岡 花子	宮沢 俊義
	吉田甲子太郎		

ローマ字調査会の発足まで（経過説明）

文部省教科書局国語課
ローマ字調査係
(昭和23年10月)

I ローマ字教育協議会

昭和22年4月から、全国の小学校ならびに新制中学校で、ローマ字教育が実施されることになったが、これにさきだって、ローマ字教育を実施するについてのいろいろの対策を協議するために、昭和21年6月、文部省に「ローマ字教育協議会」が設置されて、教育関係者、学者、ローマ字研究家、放送、出版関係者などにお集りを願ひ、同年10月まで慎重に審議を重ねた結果、「ローマ字教育の指針」「ローマ字教育を行ふについての意見」をとりまとめ文部大臣に提出した。(昭和21年10月22日)。当局はこれに基いてその実施方法を慎重に検討した結果「国民学校におけるローマ字教育実施要項」

(注「備考(1) この要項における国民学校とは、来年度から新学制が実施される場合には、小学校および新制中学校をさすのである。」)を決定、発表し(昭和22年1月20日)、これによって、昭和22年度からローマ字教育が実施されているのである。

ローマ字教育協議会の「ローマ字教育を行ふについての意見」のうちに、「ローマ字の表記法(特につづり方)については、別冊『ローマ字教育の指針』に示す方式をとるが、更に適當の機関を設け、学術上・教育上および實際生活上から研究を進め、改善をはかられ

たきこと」とあり、また、1946年（昭和21年）にわが国を訪れたアメリカの教育使節団の報告書の「国語の改革」の章に、「1 ある形のローマ字をぜひとも、一般に採用すること。2 選ぶべき特殊の形のローマ字は、日本の学者・教育権威者および政治家より成る委員会が、これを決定すること、（以下省略）とあるのに基いて、当局は公正な機関を設けて、ローマ字に関する諸種の問題について調査・審議をすることとなったが、これには相当の日時を要するので、昭和22年度におけるローマ字教育については、文部当局談に「従って、この要項はさしあたり昭和22年度に実施すべき点について定めたものであり、その実施の成果を基礎として更に昭和23年度からの計画を考えていきたいと思ひます。」とあるとおり、ひとまず暫定的の処置によって実施することとなったのである。

II ローマ字調査委員会準備会

以上のようにローマ字による国語の書きあらわし方、また、小・中学校におけるローマ字教育については、まだまだ検討を加え、改善をしなければならない点がたくさんにある。たとえば、つづり方の問題にしても、ローマ字教育の方針や方法にしても、まだ研究を要する点が少なくないのであって、当局はこれらの問題についてすみやかに根本的解決をはかり、本格的なローマ字教育を一日も早く実施することが、刻下の急務であると考え、昨年4月以降「ローマ字調査委員会」（仮称）の設置を準備しつつあった。

この委員会は社会各方面の権威者をもうらした民主的な構成であるようにし、あくまでも中正な性格をもち、公正妥当な結論を得るために、現在わが国を代表する各職域・各団体の権威者・代表者等の協力のもとに、委員選出の方法・範囲、また、委員会運営の方法などについての隔意のない意見をきき、それにしたがって委員会を設置するために、委員会の発足にさきだって、ローマ字調査委員会準備会を開くこととした。

準備会は、ローマ字研究家、言語関係、報道関係者、官界等の権

威者・代表者にお集りを願い、昨年の暮から今年の初めにかけて下記の通り4回開いた。

第1回 昭和22年12月5日（金）

第2回 昭和22年12月11日（木）（第1回小委員会）

第3回 昭和23年1月22日（木）（第2回小委員会）

第4回 昭和23年1月29日（木）

このうち、第1回および第4回は総会であり、第2回および第3回は小委員会である。

準備会の経過概要は次のとおりである。すなわち、第1回の準備会において、当局からローマ字教育の実施にいたるまでのいきさつ、委員会設置の必要、準備会開催の必要と目的ならびに使命などについて説明をして後、座長を定め、種々質疑応答を重ねた結果、委員の選出は、現在わが国の文化を代表するような団体をできるだけたくさん選んで、それを委員の推薦母体とすることを決定し、推薦の具体的方法ならびに人員配当などのこまかい点は小委員会を設けて検討することを決定し、小委員会を構成する小委員の人選は座長一任となった。

準備小委員会 昭和22年12月11日、第1回小委員会において、推薦母体、推薦の具体的方法、人員配当などを決定し、それにしたがって当局は政治、学術、教育、文化、実業、勤労等の各職域団体の代表者に対して、「識者の御意見・御研究などを十分に考慮検討して、ローマ字による国語の書きあらわし方ならびにローマ字教育に関する調査・研究につき遺憾なきを期したい」から「貴団体におかれて、こうした問題について、もっとも適当と思われる方々を当局の参考までに」知らせられたい旨の依頼状をおくり、これに対する各方面からの回答に基いて、第2回小委員会において慎重に選考した結果、委員の候補者につきいちおうの成案を得ることができた。なお、臨時委員の選考、委員会の運営などのことについては、委員会が本格的に発足してのち、委員会自身が決定すべきことな

どを議決した。ついで本年1月29日第4回準備会を開き、小委員会で得た結論を報告し、慎重な検討、質疑応答を重ねて委員候補者についての最後案をまとめた。また官制については各方面との折衝の関係上、多少の字句の修正はあるかも知れないが、趣旨は変更しないという了解のもとに、当局に一任し、議事規則は委員会自身がつくることなどを定め、最後に下記の決議を行って準備会はその使命を遺憾なく果して解散した。

ローマ字調査委員会準備会決議：本準備会はローマ字問題の重要性にかんがみ、本問題に関する公正にして権威ある委員会を構成するための案を得ることに努めてきたが、ここに結論を得た。ついでには本準備会の意見を基礎としてローマ字調査委員会がすみやかに設置され、中正妥当な結論が得られるように希望する。

Ⅲ ローマ字調査会

準備会終了後当局としては、その決議に基いて、一日もすみやかに、「ローマ字調査委員会」（仮称）を本格的に発足させるために、必要な準備をととのえつつあったのであるが、政令による委員会を設置するための根拠となる「各省設置法」の制定・施行をみないために、いたずらに日を送ることになったのである。しかしながらローマ字に関する調査・審議は一日もゆるがせにすることができないたいせつなことがらであるので、この際ひとまず政令によらずに大臣裁定による調査会を設置することとし、将来、根拠法規の制定されたあかつきには、政令によるものにきりかえる予定をもって「ローマ字調査会」という名称のもとに出発することとなったのである。

3 ローマ字調査審議会

(昭和 24.6.1 ~ 昭 25.4.16)

○政令 (昭和 24.7.5)

政令第 256 号

(原文は縦書)

ローマ字調査審議会令

内閣は、文部省設置法 (昭和 24 年法律第 146 号) 附則第 17 項の規定に基づき、この政令を制定する。

(所掌事務)

第 1 条 ローマ字調査審議会 (以下「審議会」という。)は、左に掲げる事項を調査審議し、及びこれらに関し必要と認める事項を、文部大臣及び関係各大臣に建議する。

- 1 ローマ字による国語の表記法に関する事項
- 2 ローマ字による国語教育に関する事項

(組織)

第 2 条 審議会は、委員 40 人以内で組織する。

- 2 特別の事項を調査審議するため必要があるときは、審議会に臨時委員を置くことができる。
- 3 専門の事項を調査するため必要があるときは、審議会に専門調査員を置くことができる。

第 3 条 委員及び臨時委員は、政治、教育、学術、文化、報道、経済等の各界における学識経験のある者及び関係各庁の職員のうちから、文部大臣が任命する。

- 2 専門調査員は、学識経験のある者の中から、審議会の意見を聞いて、文部大臣が任命する。

第 4 条 臨時委員は、特別の事項の調査審議が終ったときは、退任するものとする。

- 2 委員、臨時委員及び専門調査員は、非常勤とする。

第5条 委員により会長として互選された者は、審議会の会務を総理する。

2 委員により副会長として互選された者は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

3 会長及び副会長は、1年ごとに改選する。

(部会)

第6条 審議会は、その定めるところにより、部会を置くことができる。

2 部会に属すべき委員及び臨時委員は、会長が指名する。

3 各部会に属する委員により部会長として互選された者は、各部会の会務を掌理する。

(議事)

第7条 審議会は、委員及び議事に関係のある臨時委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 審議会の議事は、出席した委員及び議事に関係のある臨時委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

3 審議会の会議は、原則として公開とする。

4 審議会は、必要があると認めるときは、関係者に対し、第1条に掲げる事項に関し、意見の開陳又は説明を依頼することができる。

5 第1項及び第2項の規定は、部会の議事に準用する。

(庶務)

第8条 審議会の庶務は、文部省調査普及局において処理する。

(雑則)

第9条 この政令に定めるもののほか、審議会の議事の手続その他運営に関し必要な事項は、審議会が定める。

附 則

1 この政令は、公布の日から施行し、昭和24年6月1日から適

用する。

- 2 この政令施行の後最初に任命される委員以外の委員及び臨時委員は、当分の間、第3条第1項の規定にかかわらず、同項に掲げる者につき、文部大臣が定める方法で推薦された者のうちから、文部大臣が任命するものとする。

○告示（昭和24.11.30）

文部省告示第193号

（原文は縦書）

ローマ字調査審議会令（昭和24年政令第256号）附則第2項の規定による委員及び臨時委員候補者の推薦の方法を次のように定める。

昭和24年11月30日

文部大臣 高瀬 荘太郎

ローマ字調査審議会委員及び臨時委員 候補者推薦方法

第1条 文部大臣は、ローマ字調査審議会令附則第2項に規定する委員及び臨時委員を推薦させるため、必要あるごとに、ローマ字調査審議会の委員の互選による者10人以内で協議会を組織せしめる。

第2条 協議会は、ローマ字調査審議会令第3条第1項に掲げる者のうちから候補者を選定し、推薦するものとする。但し、学識経験のある者の候補者については、政治・教育・学術・文化・報道・経済等の各界について選出分野を定め、その代表団体の意見を聞くものとする。

附 則

この規程は、公布の日から施行し、昭和24年11月1日から適用する。

○会議の開会

・総 会

第1回（昭和24.12.20）～第2回（昭和25.3.29）

・部 会

◦ つづり方部会

第1回（昭和24.6.18）～第12回（昭和25.3.3）

◦ 教育部会

第1回（昭和24.6.2）～第16回（昭和25.2.10）

◦ 分ち書き部会

設置されたが、時間の関係上部会は1回も開かれなかった。

補注：ローマ字調査審議会は昭和24.6.1に発足したが、その委員および審議事項はすべて、ローマ字調査会（昭和23.10.12発足）から引きついだものであって、実際上は部会の回数は第1回から新たに発足せず、ローマ字調査会のつづり方に関する主査委員会（第7回まで）、および、ローマ字教育に関する主査委員会（第16回まで）をうけて、それぞれ、第8回～第19回、および第11回～第26回と呼称された。

ローマ字調査審議会委員名簿

（昭和24.12.20現在）

会 長	安 藤 正 次	東洋大学教授
副会長	長 沼 直 兄	言語文化研究所理事長

委員	秋	岡	梧	郎	都立深川図書館長	
	池	田	義	信	日本映画連合会事務局長	
	石	黒	修	治	国立教育研究所所員	
	伊	藤	日出	登	文部事務次官	
	井	上	達	二	井上眼科病院長	
	宇	田	道	夫	日本放送協会編成局演出部長	
	大	塚	明	郎	成城学園嘱託	
	香	月	善	次	日本交通交社観光学園理事	
	亀	井		孝	一橋大学助教授	
	金	田	一	京	助	国学院大学教授
	桑	原			信	国立国会図書館主事
	紺	野	四	郎		時事新報社副主筆
	式	田	次	雄		都立第五女子高等学校教諭
	田	口	泖	三	郎	科学研究所所員
	千	葉		勉		上智大学教授
	千	葉	雄	次	郎	中京新聞社社長
	友	井			楨	日本基督教団総務部長
	萩	原	忠	三		共同通信社主幹
	服	部	四	郎		東京大学教授
	花	島	克	巳		日本出版協会事務局海外係主任
古	垣	鉄	郎		日本放送協会会長	
前	田	静	夫		渋谷区立広尾小学校教諭	
松	坂	忠	則		カナモジカイ理事長	
宮	沢	俊	義		東京大学教授	
村	岡	花	子		行政監察委員会委員	
吉	田	甲	子	太郎	明治大学教授	

4 国語審議会ローマ字調査分科審議会

(昭 25. 4. 17～

)

○政 令 (昭和 25. 4. 17)

政令第 85 号

(原文は縦書)

政令第 135 号 (一部改正, 昭和 26. 5. 8)

政令第 338 号 (一部改正, 昭和 27. 8. 1)

国 語 審 議 会 令

内閣は、文部省設置法 (昭和 24 年法律第 146 号) 第 24 条第 2 項の規定に基づき、この政令を制定する。

(所掌事務)

第 1 条 国語審議会 (以下「審議会」という。)は、左に掲げる事項を調査審議し、及びこれらに関し必要と認める事項を文部大臣及び関係各大臣に建議する。

- 1 国語の改善に関する事項
- 2 国語の教育の振興に関する事項
- 3 ローマ字に関する事項

(組織)

第 2 条 審議会は、委員 70 人以内で組織する。

- 2 特別の事項を調査審議するため必要があるときは、審議会に臨時委員を置くことができる。
- 3 専門の事項を調査するため必要があるときは、審議会に専門調査員を置くことができる。

第 3 条 委員及び臨時委員は、政治、教育、学術、文化、報道、経済等の各界における学識経験のある者及び関係各庁の職員につき、文部大臣が定める方法で推薦された者のうちから、文部大臣が任命する。

2 専門調査員は、学識経験のある者のうちから、審議会の意見を聞いて文部大臣が任命する。

第4条 学識経験のある者のうちから任命された委員の任期は、2年とし、その欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前者の残任期間とする。

2 臨時委員は、特別の事項の調査審議が終ったときは、退任するものとする。

3 委員、臨時委員及び専門調査員は、非常勤とする。

第5条 委員により会長として互選された者は、審議会の会務を総理する。

2 委員により副会長として互選された者は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

(分科会)

第6条 審議会に、ローマ字に関する事項を担当させるため、ローマ字調査分科審議会（以下「分科会」という。）を置く。

第7条 分科会に属する委員及び臨時委員は、文部大臣が指名する。

第8条 分科会に属する委員により分科会長として互選された者は、分科会の会務を掌理する。

2 分科会長に事故があるときは、分科会に属する委員のうちから、分科会長があらかじめ指名する者が、その職務を代理する。

(部会)

第9条 審議会及び分科会は、審議会の定めるところにより、部会を置くことができる。

2 部会に属すべき委員及び臨時委員は、会長が指名する。

3 各部会に属する委員により部会長として互選された者は、各部会の会務を掌理する。

(議事)

第10条 審議会は、委員及び議事に関係のある臨時委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 審議会の議事は、出席した委員及び議事に関係のある臨時委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

3 審議会及び分科会の会議は、原則として公開とする。

4 審議会又は分科会は、必要あると認めるときは、関係者に対し、第1条に掲げる事項に関し、意見の開陳又は説明を依頼することができる。

5 第1項及び第2項の規定は、分科会及び部会の議事に準用する。
(庶務)

第11条 審議会の庶務は、文部省調査局において処理する。

(雑則)

第12条 この政令に定めるもののほか、審議会の議事の手続その他その運営に関し必要な事項は、審議会が定める。

附 則

1 この政令は、公布の日から施行する。

2 国語審議会令（昭和24年政令第253号）及びローマ字調査審議会令（昭和24年政令第256号）は、廃止する。

○省令（昭和26.7.5）

文部省令第16号

（原文は縦書）

国語審議会令（昭和24年政令第85号）第3条第1項の規定に基づき、国語審議会の委員及び臨時委員の推薦方法に関する規程を次のように定める。

昭和26年7月5日

文部大臣 天 野 貞 祐

国語審議会の委員及び臨時委員の推薦方法に関する規程

第1条 国語審議会の委員及び臨時委員は、国語審議会委員等推薦協議会（以下「協議会」という。）が推薦する。

2 協議会は、必要あるごとに文部大臣が設ける。

3 協議会は、国語審議会の委員のうちから互選した7人以上15人以内の者で構成する。

4 協議会は、当該委員及び臨時委員の推薦を終ったときに、解散するものとする。

5 協議会の議事の手続その他その運営に関し必要な事項は、協議会が定める。

第2条 協議会は、学識経験のある者のうちから任命すべき委員及び臨時委員の推薦に当っては、あらかじめ政治、教育、学術、文化、報道、経済等の各界について委員及び臨時委員を選出すべき分野を定め、推薦しようとする者についてその分野に係る代表的団体の意見を聞かなければならない。

第3条 文部大臣は、緊急を要する場合その他特別の事情ある場合には、委員及び臨時委員3人以内を限り、前2条の規定にかかわらず、国語審議会の会長の推薦をもって協議会の推薦にかえることができる。

附 則

この規程は、公布の日から施行する。

○会議の開会

第1期（昭和25年4月～昭和27年4月）

- ・国語審議会総会

第5回（昭和25.4.17）～第14回（昭和27.4.14）

- ・ローマ字調査分科審議会総会

第1回（昭和25.10.19）

・部会（国語審議会に設置のもの）

。ローマ字教育部会

部会第1回（昭和25.11.20）～第16回（昭和27.3.17）

起草委員会第1回（昭和26.10.29）～第2回（昭和26.12.24）

・部会（ローマ字調査分科審議会に設置のもの）

。つづり方部会

第1回（昭和25.6.26）～第24回（昭和27.2.25）

。分ち書き部会

部会第1回（昭和25.7.10）～第16回（昭和27.1.28）

連絡会第1回（昭和27.1.21）～第2回（昭和27.2.25）

補注：1 国語審議会は、第1回総会を昭和24年11月10日に開き、その第4回総会までは、国語審議会とは別にローマ字調査審議会が設置されていた。昭和25年4月17日ローマ字調査審議会令が廃止され、国語審議会令が一部改正されて、国語審議会にローマ字調査分科審議会が設置された。

2 分ち書き部会における連絡会とは、日時の関係上、正式に部会を開く余裕がなかったために、打合せのため開催されたものである。

第2期（昭和27年4月～昭和29年4月）

・国語審議会総会

第15回（昭和26.6.2）～第20回（昭和29.3.15）

・ローマ字調査分科審議会総会

第1回（昭和27.7.7）～第14回（昭和29.3.2）

・部会

。教育部会

第1回（昭和28.11.18）～第4回（昭和29.2.9）

。わかち書き部会

小委員会第1回（昭和28.7.24）～第2回（昭和28.9.21）

部会第1回（昭和28.11.17）～第4回（昭和29.2.11）

補注：1 今期のローマ字調査分科審議会は、つづり方の単一化を先議事項とし、部会を設けず、分科会の委員全員で審議をした。

2 わかち書き部会に小委員会を設けたのは、部会の設置は国語審議会総会の承認を要するので、それまでの暫定処置としてである。

3 国語審議会総会の回数は第1期から引きつづいて呼称する。

第3期（昭和29年7月～ ）

・国語審議会総会

第21回（昭和29.9.20～ ）

・ローマ字調査分科審議会総会

第1回（昭和29.11.1～ ）

・部 会

注：国語審議会総会の回数は第1期、第2期から引きつづいて呼称する。

国語審議会委員名簿（第1期）

（昭和25.6.12現在）

委 員

会 長	土 岐 善 鷹	早稲田大学講師，教科用図書検定調査審議会委員，文学博士
副 会 長	宮 沢 俊 義	東京大学教授，法学博士
	青 野 季 吉	評論家，早稲田大学講師
	阿 利 資 之	中部日本新聞社東京総局顧問
	有 光 次 郎	秀英出版社長，学術奨励審議会委員
	安 藤 正 次	東洋大学教授，教育刷新審議会委員

池田義信	日本映画連合会事務局長
石黒修治	国立教育研究所員，国語協会理事
今井直一	三省堂取締役
牛山栄治	東京都新宿区牛込第一中学校長，教育刷新審議会委員
大野巖	大野化学会社長，能率協会理事，工学博士
緒方富雄	東京大学教授，医学博士
折口信夫	慶応大学教授，国学院大学教授，文学博士
鹿住徳一	読売新聞社記事審査委員会副委員長
河竹繁俊	早稲田大学教授，文学博士
金田一京助	国学院大学教授，文学博士
倉石武四郎	東京大学教授，文学博士
佐々木孝丸	劇作家組合常任委員長
颯田琴次	東京大学附属医専部長兼教授，日本放送協会評議員，医学博士
佐野利器	東京大学名誉教授，教育刷新審議会委員，工学博士
沢登哲一	東京都立第五高等学校長，社会教育審議会委員
園田次郎	朝日新聞社新聞用語改善委員会委員長
滝口義敏	共同通信社連絡局長
田口泖三郎	科学研究所所員
千種達夫	東京地方裁判所判事
坪田譲治	作家
照井猪一郎	明星学園中学校長兼小学校長
時枝誠記	東京大学教授，文学博士
内藤侃	日本労働組合総同盟出版部長
中島健蔵	東京大学講師，日本著作家組合書記長，教科用図書検定調査審議会委員

中	村	宗	雄	早稻田大学教授，法学博士
野	村	兼	太郎	慶応大学教授，経済学博士
服	部	静	夫	東京大学教授，理学博士
服	部	四	郎	東京大学教授，文学博士
原		富	男	専修大学教授，文学博士
藤	森	良	信	毎日新聞社出版局書籍部顧問
舟	橋	聖	一	作家，文芸家協会理事長
前	田	賢	次	東京商工会議所業務部長
松	坂	忠	則	カナモジカイ理事長
務	台	理	作	東京教育大学教授，文学博士
山	口	吉	郎	東京大学教授，工学博士
菅	野	義	丸	総理府官房副長官
佐	藤	達	夫	法務府法制意見長官
剣	木	享	弘	文部事務次官

臨時委員

井	上	達	二	井上眼科病院長，医学博士
宇	田	道	夫	日本放送協会編成局演出部長
大	塚	明	郎	成城大学教授，理学博士
桑	原		信	国立国会図書館主事
千	葉		勉	上智大学教授
長	沼	直	兄	財団法人言語文化研究所理事長
福	田	邦	三	東京大学教授，医学博士
松	浦	四	郎	法政工業専門学校幹事兼教授
武	藤	辰	男	東京都杉並区宮前中学校長
村	田	五	郎	日本タイムズ社取締役兼渉外局長
山	崎	好	次郎	横須賀市立山崎小学校長
吉	田	甲	子太郎	明治大学教授

ローマ字調査分科審議会

安	藤	正	次	有	光	次	郎	石	黒	修	治
井	上	達	二	宇	田	道	夫	大	塚	明	郎
金	田	一	京	倉	石	武	四郎	桑	原		信
佐	野	利	器	田	口	柳	三郎	千	葉		勉
中	島	健	蔵	長	沼	直	兄	服	部	四	郎
福	田	邦	三	松	浦	四	郎	松	坂	忠	則
武	藤	辰	男	村	田	五	郎	山	崎	好	次郎
吉	田	甲	子太郎								

国語審議会 ローマ字教育部会委員名簿

(昭和 25. 6. 12 現在)

部会長	石	黒	修	治							
部会委員	安	藤	正	次	牛	山	栄	治	大	塚	明 郎
	佐	野	利	器	千	葉		勉	照	井	猪一郎
	時	枝	誠	記	長	沼	直	兄	松	浦	四 郎
	武	藤	辰	男	山	崎	好	次郎			

ローマ字調査分科審議会 つづり方部会委員名簿

(昭和 25. 6. 12 現在)

部会長	安	藤	正	次							
部会委員	有	光	次	郎	井	上	達	二	宇	田	道 夫
	大	塚	明	郎	倉	石	武	四郎	桑	原	信
	佐	野	利	器	田	口	柳	三郎	千	葉	勉
	中	島	健	蔵	長	沼	直	兄	服	部	四 郎

福田邦三 松浦四郎 村田五郎
 武藤辰男 山崎好次郎

ローマ字調査分科審議会 分ち書き部会委員名簿

(昭和 25.6.12 現在)

部会長	大塚明郎		
部会委員	安藤正次	石黒修治	金田一京助
	桑原信	田口昶三郎	千葉勉
	中島健蔵	服部四郎	松浦四郎
	松坂忠則	武藤辰男	山崎好次郎
	吉田甲子太郎		

国語審議会委員名簿(第2期)

(昭和 27.6.3 現在)

委員

会長	土岐善麿	都立日比谷図書館長, 国立国語研究所評議員, 文学博士
副会長	宮沢俊義	東京大学法学部長, 法学博士
	麻生磯次	東京大学教養学部長, 文学博士
	有光次郎	秀英出版社長
	安藤正次	東洋大学教授, 国立国語研究所評議員会長
	池上退蔵	朝日新聞社記事審査部付
	江尻進	日本新聞協会編集部長
	遠藤嘉基	京都大学教授, 文学博士
	大住達雄	三菱倉庫社長

大塚明郎	成城大学講師，理学博士
緒方富雄	東京大学教授，医学博士
折口信夫	慶応大学・国学院大学教授，文学博士
楓井金之助	東京新聞社校閲部長
甲斐政治	日本民間放送連盟事務局長
亀井勝一郎	評論家，文芸家協会理事
河竹繁俊	早稲田大学教授，文学博士
北浜清一	香川県坂出市西庄小学校長，日教組教育文化部長
木下一雄	東京学芸大学学長
金田一京助	国学院大学教授，国立国語研究所評議員，文学博士
倉石武四郎	東京大学教授，国立国語研究所評議員，文学博士
桑原武夫	京都大学人文科学研究所教授，国立国語研究所評議員
小林英夫	東京工業大学兼名古屋大学教授，文学博士
颯田琴次	東京芸術大学教授，国立国語研究所評議員，医学博士
佐藤為治郎	読売新聞社校閲部長
佐野利器	東京市政調査会副会長，工学博士
沢登哲一	都立小石川高等学校長，国立国語研究所評議員
渋谷秀雄	著作家
下村宏	法学博士
田口柳三郎	科学研究所員
竹田復	東洋大学教授，文学博士
千種達夫	東京地方裁判所判事
千葉勉	上智大学教授
都留重人	一橋大学教授

照井猪一郎	三鷹市明星学園中学校長兼小学校長
時枝誠記	東京大学教授，国立国語研究所評議員，文学博士
殿木圭一	共同通信社編集局次長
中島健蔵	東京大学講師，日本著作家組合書記長，国立国語研究所評議員
中村茂	N・H・K放送文化研究所長
長沼直兄	言語文化研究所理事長
波多野完治	お茶の水女子大学教授，国立国語研究所評議員
服部静夫	東京大学教授，理学博士
原富男	東京文理科大学講師，文学博士
舟橋聖一	作家，文芸家協会理事
保科孝一	東京文理科大学名誉教授
堀内庸村	日本ローマ字会理事
前田賢次	東京商工会議所業務部長
松坂忠則	カナモジカイ理事長，国立国語研究所評議員
丸野不二男	毎日新聞社校閲部長
吉川幸次郎	京都大学教授，文学博士
吉田甲子太郎	明治大学教授
剣木享弘	内閣官房副長官
佐藤達夫	法務府法制意見長官
日高第四郎	文部事務次官

ローマ字調査分科審議会

佐野利器	有光次郎	安藤正次
江尻進	大塚明郎	北浜清一
木下一雄	金田一京助	倉石武四郎

桑	原	武	夫	小	林	英	夫	田	口	泖	三郎
千	葉		勉	照	井	猪	一郎	時	枝	誠	記
中	島	健	藏	長	沼	直	兄	波	多	野	完
堀	内	庸	村	松	坂	忠	則	吉	田	甲	子
											太郎

国語審議会

ローマ字調査分科審議会 教育部会委員名簿

(昭和 28.10.8 現在)

部会長	有	光	次	郎							
部会委員	遠	藤	嘉	基	大	塚	明	郎	北	浜	清
	木	下	一	雄	金	田	一	京	助	小	林
	佐	野	利	器	照	井	猪	一郎	時	枝	誠
	長	沼	直	兄	波	多	野	完	治	堀	内
	吉	田	甲	子							庸
				村							

国語審議会

ローマ字調査分科審議会 わかち書き部会委員名簿

(昭和 23.10.8 現在)

部会長	長	沼	直	兄							
部会委員	遠	藤	嘉	基	大	塚	明	郎	金	田	一
	小	林	英	夫	田	口	泖	三郎	中	島	健
	堀	内	庸	村	松	坂	忠	則			藏

国語審議会委員名簿（第3期）

（昭和29.11.1現在）

委員

会長	土岐善麿	都立日比谷図書館長，国立国語研究所評議員，文学博士
副会長	金田一京助	学士院会員，国学院大学教授，国立国語研究所評議員，文学博士
	有光次郎	秀英出版社長
	池上退蔵	朝日新聞社記事審査部
	池田弥三郎	慶応義塾大学助教授
	石井庄司	東京教育大学教授
	伊藤忠兵衛	伊藤忠商事社長，国立国語研究所評議員
	上野陽一	産業能率短期大学長
	遠藤嘉基	京都大学教授，文学博士
	大住達雄	三菱倉庫社長
	大塚明郎	東京教育大学教授，理学博士
	緒方富雄	東京大学教授，医学博士
	楓井金之助	東京新聞社校閲部長
	河竹繁俊	早稲田大学教授，文学博士
	倉石武四郎	東京大学教授，国立国語研究所評議員，文学博士
	桑原武夫	京都大学教授，国立国語研究所評議員
	高津春繁	東京大学教授，文学博士
	酒井三郎	日本民間放送連盟事務局長
	颯田琴次	東京芸術大学教授，国立国語研究所評議員，医学博士
	佐藤孝二	東京大学教授，理学博士
	佐藤為治郎	読売新聞社校閲部長

渋沢秀雄	作家
下村宏	藤楓会会長，法学博士
菅原卓	劇作家
高木市之助	愛知県立女子短期大学長，文学博士
田口泖三郎	京都外国語短期大学長
竹田復	東洋大学教授，文学博士
田村秋子	文学座名誉俳優
千種達夫	東京地方裁判所判事
照井猪一郎	明星学園小・中学校長
時枝誠記	東京大学教授，国立国語研究所評議員，文学博士
殿本圭一	共同通信社編集局次長
中島健蔵	東京大学講師，国立国語研究所評議員
中村茂	N・H・K放送文化研究所長
西本三十二	国際基督教大学教授
野島秀義	中央区立文海中学校長
野間忠雄	東京都教育庁指導部長
波多野完治	お茶の水女子大学教授，国立国語研究所評議員，文学博士
服部静夫	東京大学教授，理学博士
原富男	東京教育大学講師，文学博士
舟橋聖一	作家
古谷綱武	評論家
保科孝一	東京文理科大学名誉教授
前田賢次	東京商工会議所業務部長
前田雄二	日本新聞協会編集部企画課長
松坂忠則	カナモジカイ理事長，国立国語研究所評議員
丸野不二男	毎日新聞社紙面審査委員

吉 川 幸次郎	京都大学教授，文学博士
吉 田 甲子太郎	明治大学教授
谷 口 寛	内閣官房副長官
林 修 三	内閣法制局次長
田 中 義 男	文部事務次官

ローマ字調査分科審議会

分科会長	有 光 次 郎		
	石 井 庄 司	遠 藤 嘉 基	大 塚 明 郎
	桑 原 武 夫	下 村 宏	田 口 泖三郎
	照 井 猪一郎	中 島 健 蔵	野 間 忠 雄
	波多野 完 治	吉 田 甲子太郎	

5 官制・政令・規程などによらない会議

(1) ローマ字教育対策懇談会

(a) 趣 旨

ローマ字教育の実施に関する対策を協議し、ローマ字教育協議会を設ける準備としての打合せをするために開かれた。

(b) 期 日

昭和21年6月15日

(c) 出席者（出席予定者を含む。）

加茂正一，鬼頭礼蔵，佐伯功介，土岐善麿，服部四郎
教科書局長，ほか関係官

(d) 議 事

ローマ字教育実施の対策について。

(2) ローマ字教育協議会

(a) 趣 旨

小学校ならびに新制中学校で実施されることになったローマ字教育に関するいろいろの問題についての対策を協議するために設置されたものである。

(b) 期 間

昭和21年6月29日～昭和21年10月22日

総 会

第1回（昭和21.6.26）～第2回（昭和21.10.22）

起草協議員会

第1回（昭和21.7.4）～第2回（昭和21.9.30）

起草協議員会つづり方研究会（昭和21.10.10）

専門協議員会

第1回(昭和21.7.22)～第5回(昭和21.9.12)

(c) 協議員名簿 (◎議長, ◎起草兼専門協議員, ○起草協議員)

◎石 黒 修 治	国語協会常務理事
入 江 俊 郎	内閣法制局長官
◎岩 淵 悦太郎	第一高等学校教授
○大久保 正太郎	国語教育学会幹事
○坪 井 忠 二	東京帝国大学教授, 理学博士
◎土 岐 善 麿	朝日新聞社客員
時 枝 誠 記	東京帝国大学教授, 文学博士
中 野 好 夫	東京帝国大学助教授
◎服 部 四 郎	東京帝国大学助教授, 文学博士
○緒 方 富 雄	東京帝国大学助教授, 医学博士
◎加 茂 正 一	
城 戸 又 一	毎日新聞社文化部長
◎鬼 頭 礼 蔵	農民講道館農業専門学校教授
◎佐 伯 功 介	日本ローマ字会常務理事
◎飛 田 多喜雄	成蹊学園初等学校主事
○福 原 麟太郎	東京文理科大学教授
古 垣 鉄 郎	日本放送協会専務理事
奥 中 孝 三	
○松 坂 忠 則	カナモジカイ常務理事
村 上 義 保	週刊少国民副編修長
山 極 武 利	常盤国民学校長
宮 崎 静 二	中央大学講師
教科書局長, 学校教育局長ほか関係官	

(d) 議 事

ローマ字教育を行うについての意見

ローマ字教育の指針

ローマ字文の書き方
等について

(3) ローマ字調査委員会準備会

(a) 趣 旨

昭和22年度から、小学校および中学校においてローマ字教育が実施されているが、これについてさらに研究を進め、改善をはかり、ローマ字による国語の書き表わし方、ならびに教育に関するあらゆる問題について、学術上・教育上・実際生活上等の観点からじゅうぶんな検討を加えるために設置されるべきローマ字調査委員会についてのいろいろの準備・打合せのために開かれたものである。

(b) 期 間

昭和22年12月5日～昭和23年1月29日

総 会

第1回(昭和22.12.5)～第2回(昭和23.1.29)

小委員会

第1回(昭和22.12.11)～第2回(昭和23.1.22)

(c) 出席者(出席予定者を含む。)

大塚明郎	日本ローマ字会
土岐善麿	ローマ字運動本部
奥中孝三 千葉勉	ローマ字ひろめ会
石黒修治	国語協会常務理事
松坂忠則	カナモジカイ
金田一京助	日本言語学会
安藤正次 時枝誠記	国語学会

長 沼 直 兄	言語文化研究所理事長
坪 井 忠 二	科学技術関係者
山 崎 匡 輔	教育刷新委員会
海 後 宗 臣	中央教育研究所理事
務 台 理 作	教育研修所長
黒 岩 武 道	日本教職員組合文化部長
中 野 好 夫	日本文芸家協会
中 島 健 蔵	日本作家組合
田 島 道 治	実業家
畝 田 武二郎	内閣事務官
鮫 島 真 男	法制局第三部長
花 島 克 巳	日本出版協会
池 上 退 蔵	朝日新聞社用語研究室
滝 口 義 敏	時事通信社調査部長
古 垣 鉄 郎	日本放送協会専務理事
有 光 次 郎	文部次官
教科書局長，ほか関係官	

(d) 議 事

- ローマ字調査委員会委員選出の基準・範囲・方法
- ローマ字調査委員会において研究・審議すべき事項
- ローマ字調査委員会運営の方法
- 等について

(4) ローマ字に関する学習指導要領編修協議会

(a) 趣 旨

ローマ字教育の方針・方法その他については、「ローマ字教育の指針」により、一応その基準は示されているが、その基準をさら

に明確にするため、「学習指導要領（国語科編）」のなかにローマ字に関する事がらが採り入れられることになったので、その原案を作成するために設置されたものである。

補注： 学習指導要領の編修事務は初等中等教育局の初等教育課，中等教育課の所管であるが，ローマ字については，従来から調査局国語課の所管であるので，学習指導要領のローマ字に関する部分についてはこの協議会が原案の作成にあたり，作成された原案を初等中等教育局所管の「国語学習指導要領編修委員会」に回付したのである。

(b) 期 間

昭和25年4月10日～昭和26年1月24日

第1回（昭和25.4.10）～第22回（昭和26.1.24）

(c) 協議員名簿（昭和25年4月現在）

石 黒 修 治	国立教育研究所所員
泉 節 二	東京学芸大学付属小学校教諭
小 川 俊一郎	杉並区立和田中学校長
亀 井 孝	一橋大学助教授
鬼 頭 礼 蔵	ローマ字運動本部副委員長
高 野 柔 蔵	北区立滝野川小学校教諭
長 沼 直 兄	言語文化研究所理事長
飛 田 多喜雄	成蹊中学校教諭
松 井 早 苗	台東区立育英小学校教諭
官 崎 勝 式	東京教育大学付属中学校教諭
武 藤 辰 男	杉並区立宮前中学校長
吉 田 甲子太郎	明治大学教授

(d) 議 事

小学校の国語科におけるローマ字文の学習指導について
中学校の国語科におけるローマ字文の学習指導について

(5) 文部省ローマ字教育実験調査研究会

(a) 趣 旨

文部省ローマ字教育実験学級に対する指導試案・テスト問題等の作成をし、また、学習指導の結果の分析・評価、その他についての研究協議をするために設けられたものである。

(b) 期 間

昭和26年6月25日～昭和29年3月31日

(c) 委員名簿

(昭和29年2月現在)

小 林 行 雄	文部省調査局長
天 沼 寧	文部省調査局国語課
安 藤 新太郎	東京都教育庁指導主事
石 黒 修 治	
岩 淵 悦太郎	国立国語研究所研究第1部長
小 川 俊一郎	東京都杉並区立泉南中学校長
小田原 喜治彦	東京都大田区立久原小学校教官
金 子 好 郎	清明学園初等学校教諭
鬼 頭 礼 蔵	ローマ字教育研究所教育部長
木 宮 乾 峰	文部省初等中等教育局初等教育課
久 納 六 郎	東京都新宿区立牛込仲之小学校教官
桜 庭 信 之	東京教育大学教育学部助教授
白 石 大 二	文部省調査局国語課長
高 野 柔 蔵	東京都荒川区立真土小学校長
丸 山 千 織	東京都渋谷区立千駄谷小学校教官
三 尾 紗	日本ローマ字会理事
村 上 俊 亮	国立教育研究所長

(d) 実験学級名その他

(昭和29年2月現在)

県名	学校名	学校所在地	校長名	担当教官名	児童数
1 北海道	北海道学芸大学函館分校付属小学校	函館市八幡町153	林 重信	中川 繁	39
2 秋 田	秋田大学学芸学部付属小学校	秋田市東根小屋町64	久司 慶三	斉藤千弥男	50
3 山 形	光が丘小学校	酒田市浜畑町75	村田 悌雄	渋谷 豊四	48
4 宮 城	富谷小学校	黒川郡富谷町西沢13	平島 武夫	渡辺 孝夫	42
5 新 潟	川崎小学校	長岡市干場町	鷲尾 末松	石口 輝隆	45
6 栃 木	宇都宮大学学芸学部付属松原小学校	宇都宮市戸祭町1637	野中 退蔵	浜野 衛	42
7 埼 玉	宮寺小学校	入間郡宮寺村605	中野喜代春	荻野 勉	36
8 埼 玉 (川口市)	青木南小学校	川口市青木町3--390	加藤 武緒	生方 弘代	46
9 東 京	常磐松小学校	渋谷区常磐松町	椎野 開蔵	本橋 茂夫	61
10 静 岡 (磐田市)	磐田北小学校	磐田市見付	鳥居 誠一	榑原なみ子	56
11 三 重	新鹿小学校	南牟婁郡新鹿村	尾川 貞夫	仲 敏郎	34
12 奈 良	浮孔小学校	大和高田市三倉堂	中原 菊明	橋本 好史	40
13 兵 庫	新宮小学校	揖保郡新宮町新宮	中塚 光男	松浦 知己	40
14 鳥 取	若桜小学校	八頭郡若桜町	小倉 威	藪田 芳子	41
15 香 川	法勤寺小学校	綾歌郡法勤寺村1200	三谷 修平	山下 雄	42
16 徳 島	桑島小学校	鳴門市撫養町	金岡 四郎	藤田 博子	30
17 愛 媛	生石小学校	松山市生石町	佐川 通義	新山 賢	51
18 福 岡	東国分小学校	久留米市国分町	宮崎 好雄	稻益 静雄	34
19 熊 本	隈府小学校	菊池郡隈府町隈府	工藤 達也	岡本 計助	44
20 長 崎	深江小学校	南高来郡深江村	中村 茂彦	和田 真登	41

§ 4 付 録

1 連合国最高司令部指令第2号

A B O 500

(昭和20年9月3日)

第1部 総 則 (省略)

第2部 日本国軍隊

1~16 (省略)

17 日本国政府ハ一切ノ都会自治町村及市ノ名称ガ此等ヲ連結
スル公路ノ各入口ノ両側及停車場歩廊ニ少クトモ六「イン
チ」以上ノ文字ヲ使用シ英語ヲ以テ掲ゲラルルコトヲ確保ス
ルモノトス名称ノ英語ヘノ転記ハ修正「ヘボン」式(「ロー
マ」字)ニ依ルベシ

18 (省略)

第3部~第5部 (省略)

2 米国教育使節団報告書 (ぬきがき)

(昭和21年3月31日)

第2章 国語の改革 (全文)

日本の子供達に対して我々が責任を感じさへしなければ、これに
触れずにゐた方が慎しみ深くもあり氣楽であつてよいと思ふ問題
に、ここに当面するのである。言語は国民生活に極めて密接な関係
をもつた一つの有機体であるから、外部からそれに近よることは危
険なのである。しかしこの密接な関係がまた専ら内部から行はうと
する改良をさまたげてゐるのである。何事にも中間の行き方がある
が、この場合それは立派な中庸の道になるであらう。国語の改良は
どんな方面から刺戟を受けて着手してもいいが、その完成は国内で
するより外にないことを、我々は知つてゐる。我々が与へる義務が
あると感ずるのは、この好意の刺戟であつて、それと共に、未来の
あらゆる世代の人々が感謝するにちがひないと思はれるこの改良
に、直ちに着手するやう現代の人々に大いに勧める次第である。深
い義務の觀念から、そしてただそれだけの理由で、我々は日本の国
字の徹底的改良を勧めるのである。

国語改良問題は明らかに根本的な、急を要するものである。それ
は小学校から大学に至るまで、教育計画のほとんどあらゆる部門
に、その影を投げかける。この問題を満足に解決できなければ、意
見の一致を見た多くの教育目的の達成は、極めて困難になるであら
う。例へば、他の諸国民の理解の促進や、自国における民主主義の助
成がさまたげられるであらう。教育過程及び一切の知的成育に言語
が決定的な役割を演ずることは、一般世人の認めるところである。
それは在学中及び卒業後もずっと学問の重要な素因をなすものであ
る。日本人は、他国人と均しく、言語の音声的並に書記的記号を思
考の手段とする。教育の全過程の質と能率が、これらの記号の性質

の如何によつて深甚な影響を受ける。

日本の国字は学習の恐るべき障害になつてゐる。広く日本語を書くに用ひる漢字の暗記が、生徒に過重の負担をかけてゐることは、ほとんどすべての有識者の意見の一致するところである。小学校時代を通じて、生徒はただ国字の読方と書き方を学ぶだけの仕事に、大部分の勉強時間を割かなくてはならない。この初期数年の間、広範囲の有用な語学的及び数学的熟練と、自然界及び人類社会に関する主要なる知識の修得に充てられるべき時間が、この国字習熟の苦しい戦ひのために空費されてゐるのである。漢字の読み書きに過大の時間をかけて達成された成績には失望する。

小学校を卒業しても、生徒は民主的公民としての資格には不可欠の語学能力を持つてゐないかも知れない。彼等は日刊新聞や雑誌のやうなありふれたものさへなかなか読めないのである。概して、彼等は現代の問題や思想を取扱つた書物の意味をつかむことができない。殊に、彼等は卒業後読書を以て知能啓発の楽な手段となし得る程度の修得さへ、でき兼ねるのを常とする。であるからと言つて、日本の学校を参観したものは、生徒が明敏でまた非常に勉強することを否定しうるものはただ一人もない。公民たる者の基本的義務を立派に果さうとすれば、個人は、社会の出来事に関する簡単な記事の意味を、理解しなければならぬ。各個人はまた学校卒業後、直接自己の運命に影響する条件を、次ぎ次ぎに制圧するに足る普通教育の要素を持たなくてはならぬ。児童が小学校を卒業する前にさうした事の手ほどきをしておかないと、後になつては、自らこれに着手する時間も無しまたする気にもなれないものである。そして日本の児童の中、約85パーセントがこの時期に学校教育を済ますのである。

中等学校に入学する15パーセントの児童にとつても、依然として国語問題は解決されぬ。これら年上の少年男女は、相変らず国字記号の修得といふ果てしない仕事に骨を折るのである。何れの近代

国民に、かやうなむづかしい時間のかかる表現と伝達の、ぜいたくな手段を用ひる余裕があるであらうか。

国語改良の必要は、日本においてすでに長い間認められてゐた。著名な学者達がこの問題に多大の注意をはらひ、政論家や新聞雑誌の主幹をふくむ有力者の中には、実行可能な方法を種々研究したものが多し。約20に上る日本人の団体が、今日この問題に関係してゐるといふことである。大体において、三つの国字改良案が討議されつつある。第1は漢字数の制減を求め、第2は全然漢字を廃止して、ある種の仮名を採用することを要求し、第3は漢字も仮名も完全に廃棄して、1種のローマ字を採用することを要望する。

これらの諸案の中何れを採るべきかは、容易に決定することができぬ。然し、史実と教育と言語分析とを考へあはせて、使節団は、早晩普通一般の国字においては漢字は全廃され、そしてある音標式表現法が採用されるべきものと信ずる。かやうな表現法は比較的修得に容易であり、また全学習過程を大いに簡便にするであらう。この表現法によって辞書、カタログ、タイプライター、ライノタイプ機及びその他の言語補助の用法が、簡単になるであらう。更に大切なことには、この表現法によつて日本の大衆は、芸術、哲学、科学、及び技術学上の自国の文書中に存在する知識と知恵に、一層親しみ易くなるであらう。それはまた日本人の外国文学研究を容易ならしめるであらう。

漢字といふものの中に存するある審美的その他の価値が、音標法では到底十分に表はせないといふことは容易に認められる。然し、一般の民衆が国の内外の事がらに良く通じて、はつきり意見が述べられるやうになるべきであるとすれば、もつと簡便な読み書きの手段が与へられなくてはならぬ、統一された実施可能な計画の完成には、時日を要するではあらうが、然し今こそ着手の好機であると思ふ。

使節団の判断では、仮名よりもローマ字に長所が多い。更に、それは民主的公民としての資格と国際的理解の助長に適するであらう。

必然的に幾多の困難が伴ふことを認めながら、多くの日本人側のためらひ勝ちな自然の感情に気付きながら、また提案する変革の重大性を十分承知しながら、しかもなほ我々は敢て以下のことを提案する。

1 ある形のローマ字を是非とも一般に採用すること。 2 選ぶべき特殊の形のローマ字は、日本の学者、教育権威者、及び政治家より成る委員会がこれを決定すること。 3 その委員会は過渡期中、国語改良計画案を調整する責任を持つこと。 4 その委員会は新聞、定期刊行物、書籍その他の文書を通して、学校や社会生活や国民生活にローマ字を採り入れる計画と案を立てること。 5 その委員会はまた、一層民主主義的な形の口語を完成する方途を講ずること。 6 国字が児童の学習時間を欠乏させる不断の原因であることを考へて、委員会を速かに組織すべきこと。余り遅くならぬ中に、完全な報告と広範囲の計画が発表されることを望む。

この大事業を起すために任命される国語委員会は、新しい形体の使用から生ずる学習過程について、豊富な資料を集めるための国立国語研究所にまで、発展するかも知れぬ。かやうな研究所ができれば外国の学者をひきつけることになるであらう、といふのは、多くの人々は何処にでも直ぐに役立つ有用なる着想を、日本の持つ経験の中に発見するであらうから。

今は国語改良のこの重要処置を講ずる好機である。恐らくこれ程好都合な機会は、今後幾世代の間またとないであらう。日本国民の眼は将来に向けられてゐる。日本人は国内生活においても国際的關係においても、新しい方向に動きつつある。そしてこの新しい方向は文書通信の簡単にして効果的な方法を必要とするであらう。また同時に、戦争が多くの外国人を刺戟し、日本の国語と文化を研究せしめてゐる。この感興を持続せしめ、育くまうとすれば、新しい書記法を見出さなくてはならぬ。国語は広い公道たるべきもので、障壁であつてはならない。世界に永き平和をもたらさんとする各国の

思慮ある男女は、国民的な孤立と排他を支持する言語的支柱は、できる限り打ちこはす必要のあることを知つてゐる。ローマ字採用は、国境をこえて知識や觀念を伝達する上に偉大な寄与をなすであらう。

本 報 告 の 要 旨 (ぬきがき)

国語の改革 国字の問題は教育実施上のあらゆる変革にとつて基本的なものである。国語の形式の如何なる変更も、国民の中から湧き出て来なければならないのであるが、かやうな変更に対する刺戟の方は如何なる方面から与へられても差しつかへない。單に教育計画のためのみならず、将来の日本の青年子弟の発展のためにも、国語改革の重大なる価値を認める人々に対して激励を与へて差しつかへないのである。何かある形式のローマ字が一般に使用されるやう勧告される次第である。適當なる期間内に、国語に関する総合的な計画を発表する段取に到るやうに日本人学者、教育指導者、政治家より成る国語委員会が、早急に設置されるやう提案する次第である。この委員会は如何なる形式のローマ字を採用するかを決定する外、次の役目を果すことにならう。即ち

- (1) 過渡期における国語改革計画の調整に対する責任をとること。
- (2) 新聞、雑誌、書籍及びその他の文書を通じて、学校及び一般社会並に国民生活にローマ字を採用するための計画を立てること。
- (3) 口語体の形式をより民主的にするための方策の研究。

かゝる委員会は行く行くは国語審議機関に発展する可能性があらう。文字による簡潔にして能率的な伝達方法の必要は十分認められてゐるところで、この重大なる処置を講ずる機会は今現在が最適で将来かゝる機会はなかなかめぐつて来ないであらう。言語は交通路であつて、障壁であつてはならない。この交通路は國際間の相互の理解を増進するため、また知識及び思想を伝達するために、その国境を越えた海外へも開かれなくてはならない。

3 第2次訪日アメリカ教育使節団報告書

(ぬきがき)

(「昭和25年9月22日連合国軍最高司令官に提出された」もの。)

6 国語の改革 (全文)

1946年にアメリカ教育使節団は、日本語の書きことばについて徹底的な改革を勧告した。使節団はかかる改革の措置が深遠な問題を包蔵することをじゅうぶん承知して、その立場を擁護するため、この言語改革の必要性は、日本においても長い間認められていたことを指摘した。約言すれば、使節団は、あらゆる手段を尽してなんらかの形のローマ字が一般に用いられるようにすること、かつ、この目標は日本の学者・教育指導者および政治家からなる特別委員会を創設することによって、実現されるべきことを提言した。

これらの勧告がなされてから4年以上経過した。この期間において、国語改革の研究上ある程度の進歩が見られた。1950年8月に、文部省は小学校の84.3パーセント、中学校の48.1パーセントは、なんらかの形のローマ字を教えていると報じている。その他国語の簡易化の研究はすでに完成され、あるいは目下順調に進行中である。

1946年、国語審議会は、日常生活において漢字の使用を有効容易にする目的をもって当用漢字表を作成した。これら漢字の音・訓を示すために、1947年に当用漢字音訓表が同審議会によって提出され、政府によって採用された。さらに簡易化は、学校における義務教育の基礎として漢字を881字に減じた。かなづかいも一致した考えに従って同様に改革され簡易化された。

このように、終戦以後も国語改良のため努力がなされた。漢字は少なくとも理論的に制限され、かなづかいもそれに伴って改良され、ローマ字の使用と教授とは増加した。口語が公文書に使用されるよ

うになった。しかし日本人自身は、多くのなすべきことが残されていることを知っている。かれらは国立国語研究所を設けて、いっその研究と改革に対し刺激を与えた。この研究所は、国語ならびに国語と国民生活間の関係を科学的に研究するために設立された。しかしよく反省してみると、これら戦後の発展によって成し遂げられた事がらは不完全でもあり、矛盾もある。現在の改革は、国語そのものの真の簡易化、合理化には触れないで、かなや漢字文の単純化に終ろうとしている。多くの日本人は、もし、かれらが国語を簡易な明白な純正なものにつくり直すことができないならば、漢字かなまじりの表記の方式の改革は、なんら永続的な結果を生み出すものでないことを認めている。すべての言語改革は、その根本問題として、話しことばのもつ弱点について考えなければならない。書きことばと、話しことばとの間の著しい相異は、非常なハンデキャップであって、最もすぐれた学者たちによって、熱心に研究される値うちがある。

国語改革については次のような勧告をする。

- 1 一つのローマ字方式が最もたやすく一般に用いられうる手段を研究すること。
- 2 小学校の正規の教育課程の中にローマ字教育を加えること。
- 3 大学程度において、ローマ字研究を行い、それによって教師がローマ字に関する問題と方法とを教師養成の課程の一部として研究する機会を与えること。
- 4 国語簡易化の第一歩として、文筆者や学者が当用漢字と現代かなづかいを採択し、使用するよう奨励すること。

4 日本における教育改革の進展（ぬきがき）

——1950年8月第2次訪日アメリカ教育使節団に提

出した文部省報告書——

（原文は縦書）

第7章 国語改革の現状（ぬきがき）

戦後の教育改革は、教育の全部門にわたって、きわめて大規模に行われたが、それらのうち最も根本的な、重要なものの一つに、いわゆる国語改革がある。

いうまでもなく、国字・国語の問題は、ただに教育の領域に関するばかりでなく、学術・文化、さらには国民の生活そのものに、基礎的な関係をもつものである。したがって、国語改革の問題は、ただ教育改革の基礎的部面をなすばかりでなく、実にわが国の文化および国民生活を、その根底から改革する意義を持っているのである。

この基礎的な問題について、戦後、明確に取られた方向は、国民文化の水準の向上と社会生活の能率増進に対する言語上の障害を除去し、真に国民全体のために有利な文字表記と言語表現を育成しようとするのであった。

われわれの国語の状態が、文字組織において、言語表現の上の慣習的事実において、青少年の教育上はなほだしい負担を課する面を持ち、また近代社会生活の要求に不適切な非能率的な面を持っていることは、明治以来、幾多の識者が指摘し、憂え、その改造を提唱してきたところであった。しかしながら、戦後の大改革の時機に会うまでは、民間における幾多の識者の努力や、またきわめてふじゅうぶんながらも続けられてきた政府の努力も、一般的社会事実として、強力に結実することはなかった。それは、国家建設の大本が民主主義の基礎の上に確定されるに至って、初めて、著しく具体化されるべき近代日本における長年の宿題であったのである。この意味において戦後の数年は、日本の教育史にとってのみならず、国語の

歴史においても、画期的な一時期をなすと言えるのである。

さて、1946 年来朝した、米国教育使節団は、つつしみ深く、繊細な心をくばりつつ、しかも確固として、——

国語改革問題は明きらかに根本的な、急を要するものである。それは小学校から大学に至るまで、教育計画のほとんどあらゆる部門に、その影を投げかける。この問題を満足に解決できなければ、意見の一致をみた多くの教育目的の達成は、きわめて困難になるであろう。——

と断言し、明治以来長い間の懸案であったこの国字・国語の簡易化について客観的、世界的な視野から、有力な支持と助言を残したのであった。

これより先、戦後ただちに、政府においては、文部大臣の諮問機関である国語審議会を中心とし、また民間においても、主として「国民の国語運動連盟」を中核として、漢字制限を中心とする国語の平易化計画の作成、あるいは、その必要の社会的呼びかけが、活発に行われつつあった。そして、米国教育使節団の勧告が、日本の各界に影響を与えるに及び、この国語改革事業は、いっそう精力的に進行するに至ったのである。

もとより戦後に行われたいわゆる国語改革については、その根本的な最終的な課題、すなわち、「わが国で一般的に使用する文字を、いかなる種類の文字と定めるか。」という問題の根本的解決には至っていない。その点について、米国教育使節団の勧告のうち、「ある形のローマ字をぜひとも一般に採用すること。」という提案は、それが漢字を全廃し、また、かなをも排除し、ローマ字のみを第一義的な国字とする方針の具体化であるという意味においては、わが国民一般が肯定するには至っていないのである。使節団の勧告の意のあるところを正常に理解しつつも、この最終的課題については、われわれ日本国民は、なお慎重に科学的に、文化的に、歴史的にまた実際的に、大規模な研究を続けた上で、全国民の意志において決

定すべきものであると考えている。これは決して単純に、われわれ日本国民が、ただ過去の言語文化の伝習に引かれて、ためらいがちな心情にあるからではない。

さて、戦後の国語改革において、著しく進展した事実としては、以下の各節に述べるように、これを要約すれば、(1) 文字および表記法の簡易化と、漢字に関する使用の制限と、かなによる表記法則の改定、(2) 主として文体に関する公用文の簡易化、(3) ローマ字による国語教育、の三つがあげられるであろう。……

(下略)

一 文字および表記法の簡易化 (略)

二 公用文の改善 (略)

三 ローマ字教育の実施

ローマ字を第一義的な国字とすべきか否かは、にわかに決定すべきではない。しかしながら、ローマ字によって国語を書き表わす能力を、国民一般に体得させることは、今後国際的交渉を多くもつ国民生活上の必要からも、また、漢字、かな、ローマ字のそれぞれについて、国民一般が自主的に、公平に、価値判断を下しうる素地を作る上からも、じゅうぶんな教育的意義を持つことである。

このような見地から、文部省は、1946年ローマ字教育協議会を設け、その民主的な審議の成果「ローマ字教育の指針」および「ローマ字教育を行うについての意見」に基き、1947年4月から、全国の小中学校にローマ字教育を実施することとなったのである。

その実施の方針としては、(1) 各学校長の意志によって、実施するか否かを決定すること、(2) 小学校4年以上(特別な場合は3年からも行ってよい。)1年を通じて約40時間を教授に当てること、また(3) ローマ字の教授は、国語教育の徹底という目標を第一義として行うべきこと、などが定められているが、こうしてローマ字による国語教育が開始されたことは国民教育一般の上で、まさに最初の事実

である。

さて、ローマ字教育を実施するに当って、解決に困難な最大の点は、ローマ字のつづり方の問題であった。そしてローマ字教育の出版に当って、一応、いわゆる訓令式を基準とするが、他の2様式、つまり標準式、日本式の採択が自由とされる処置が取られた。しかしながら、このつづり方の問題は、その後も研究を続行すべきであり、政府において適当な審議研究機関を設定し、慎重な研究に努めるべきであるという意見が、協議会から提言された。文部省では、この意見に基き、ローマ字調査会を設け、その研究審議を進めている。

文部省は右の方針によって、ローマ字教科書を編集発行し、また「ローマ字教育の効果測定に関する調査」を行って教授の内容方法等の研究に努め、全国数か所に「ローマ字教育協議会」を開催して地方の指導主事および国語教師等に刺激を与えるなど、ローマ字教育の振興に努力してきた。そして、現在、小・中学校におけるローマ字教育の実際は、次の数例に見られるような状態となっている。

1950年2月現在の調査によると、ローマ字教育を実施している学校は次のとおりである。

	実 施 校	学 校 総 数	%
小 学 校	17,470	20,745	84.3
中 学 校	5,707	11,619	48.1

このうち訓令式、日本式、標準式の各式の採用比率は

	訓令式	%	日本式	%	標準式	%	その他	%
小学校	10,999	62.9	1,678	9.6	3,991	22.8	802	4.6
中学校	2,646	46.4	450	8.8	2,366	41.5	245	4.3

である。

ロ一マ字教科書需要数一覽表

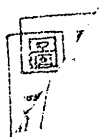
(1950.7.2)

		1948 年度		1949 年度		1950 年度		合 計	
		小 学 校	中 学 校	小 学 校	中 学 校	小 学 校	中 学 校	小 学 校	中 学 校
国 定	訓	3,287,530	1,600,902	3,137,895	697,691	2,405,000	260,434	8,830,425	2,559,027
	標	973,636	1,353,239	1,305,495	663,704	953,912	224,938	3,233,043	2,241,881
	合 計	4,261,166	2,954,141	4,443,390	1,361,395	3,358,912	485,372	12,063,468	4,800,908
検 定	訓	—	—	—	—	280,556	162,257	280,556	162,257
	日	—	—	374,613	—	735,165	52,985	1,107,778	52,985
	標	—	—	128,757	—	324,151	198,780	452,908	198,780
	合 計	—	—	503,370	—	1,339,872	414,022	1,843,242	414,022
国 検 合 計		4,261,116	2,954,141	4,946,760	1,361,395	4,698,784	899,394	13,906,710	5,214,930
合 計		7,215,307		6,308,155		5,598,178		19,121,640	
							国 定	16,864,376	
							検 定	2,257,264	

なお、1948年、文部省は、ローマ字問題全般に関する審議研究を進めるために、「ローマ字調査会」を設けた。ローマ字のつづり方に関する詳細な科学的研究、ローマ字教育の方針に関する慎重な研究が、この調査会によって進められてきたが、この調査会は1950年に改組されて、国語審議会のローマ字分科審議会となり、現在も研究を続行中である。ローマ字のつづり方は、日本のローマ字論における最大問題であるが、その統一は、こういう民主的・学術的な審議会がじゅうぶんな審議を経ないでは、にわかに決定できない難問題である。われわれは、明治以来のこの難問題の解決を、拙速の愚を犯すべきではないであろう。

四 国立国語研究所の設置 (略)

五 国語白書の公表 (略)



MEJ 4066

国語シリーズ 23

ローマ字問題資料集(第1集)

定 価 5 3 円

昭和30年3月20日 印刷

昭和30年3月30日 発行

著作権所有

文

部

省

発 行 者

東京都中央区入船町3-3

藤

原

政

雄

印 刷 所

東京都江東区亀戸町5-7

三

報

社

印

刷

株

式

会

社

東京都中央区入船町3-3 振替東京18513

発 行 所

明治図書出版株式会社